

中南津軽地域住民の 仕事と生活に関する調査報告書

2015年6月
弘前大学人文学部

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター

地域未来創生センター

— Innovative Regional Research Center —

はじめに

本研究は、弘前大学地域未来創生センターの調査・研究事業の一環として行うもので、中南津軽地域にお住まいの皆さまの働き方や現在の生活状況について調査し、今後の地域振興、特に若者の地域定着や UJI ターンを促進する政策の提案を行うべく、2015 年 2 月に実施した『中南津軽地域住民の仕事と生活に関する調査』の結果をとりまとめたものであります。

人口減少問題は、本県にとって解決が急がれる最重要課題の一つであります。当センターで今まで行ってきた本県の人口動態に関する研究によって、人口減少の最大の要因は社会的な移動にあることが明らかになりました。本県で出生した各世代の 3～4 割が 20 代前半までに本県を離れています。このような若者を食い止めることも大変重要な政策であります。もう一つの観点は本県を離れてさまざまな経験をした人々が喜んで戻れる地域づくりや UJI ターンを環境を整えることも重要な政策となります。

本研究は、UJI ターンについて地域内の社会経済環境のみならず、個人の属性や個別的な社会経済環境に注目し、そのような環境が移動の選択にどのような影響を与えているのかを分析しました。この地域の有効な UJI ターン促進策を考える上で貴重な基礎資料として一助になれば幸いです。

この調査にあたり、ご協力いただきました皆さまや関係機関などに、心から感謝申し上げます。

2015 年 6 月

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター長 李 永 俊

目 次

はじめに

第1章 調査の概要	1
1 調査の背景と目的	1
2 調査方法	2
3 調査結果の概要	3
4 報告書の構成	5
第2章 中南津軽地域住民の仕事と生活実態	7
1 はじめに	7
2 仕事の状況	7
3 所得からみる生活実態	11
4 就業形態と性別からみる生活実態	12
5 中核市部と周辺部との仕事と生活実態の差	15
6 小括	16
第3章 U・J・Iターナー者の仕事と生活実態	17
1 はじめに	17
2 U・J・Iターナーの定義	17
3 仕事と生活実態	21
4 賃金関数の推計	28
5 小括	29
第4章 U・J・Iターナーの理由とそのきっかけ	31
1 はじめに	31
2 移動時期	31
3 移動元の都道府県	33
4 U・J・Iターナーの理由	34

5	移動にともなう変化	37
6	小括	39
第5章 UJI ターン者の社会関係		41
1	はじめに	41
2	地元関係は強固か	42
3	居住年数と地元関係	48
4	祭、青年団、ボランティアでの関係性	50
5	祭、青年団、ボランティアでの関係性と居住年数	53
6	近距離のサポート・ネットワーク	57
7	遠距離のサポート・ネットワーク	74
8	集団加入	82
9	小括	84
第6章 中南津軽地域の女性のUターン移動経験について		88
1	問題設定	88
2	現在の家族と就業の状況	89
3	地域移動の理由や条件について	93
4	小括	99
第7章 出生順位はUJIターンに影響したのか		103
1	研究の背景および目的	103
2	分析結果	103
3	小括	113
付 録		115
	回答者集計表	115
	回答者用質問紙	133

第1章 調査の概要

李 永 俊

1. 調査の背景と目的

人口減少問題は、本県にとって解決が急がれる最重要課題の一つである。国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口」によると、青森県の人口は2025年には116万1千人、2035年には100万9千人で、25年後には確実に100万人を割ることが見込まれている。これは、ピーク時の人口（152万9千人（1983年））から三分の一が減少する結果となり、地域の持続可能性を脅かす最重要課題となっている。

人口の増減は、自然動態（出生数－死亡数）と社会動態（転入－転出）の合計で決定される。自然動態の推計を見ると、少子高齢化の影響で1999年からは死亡数が出生数を上回って自然減となっている。以降は一貫して、減少幅が拡大している。一方、社会動態は、本県は大都市圏、主には東京圏に優秀な労働力を供給してきていたので、戦前から一貫して転出が転入を上回る社会減となっている。特に高度成長期からバブル経済がピークだった1990年代前半までは、年間1万3千人前後が社会減となっていた。バブル崩壊後、東京圏における景気低迷によって一時的に社会減が減少したが、景気回復に伴って転出が再び増加している。

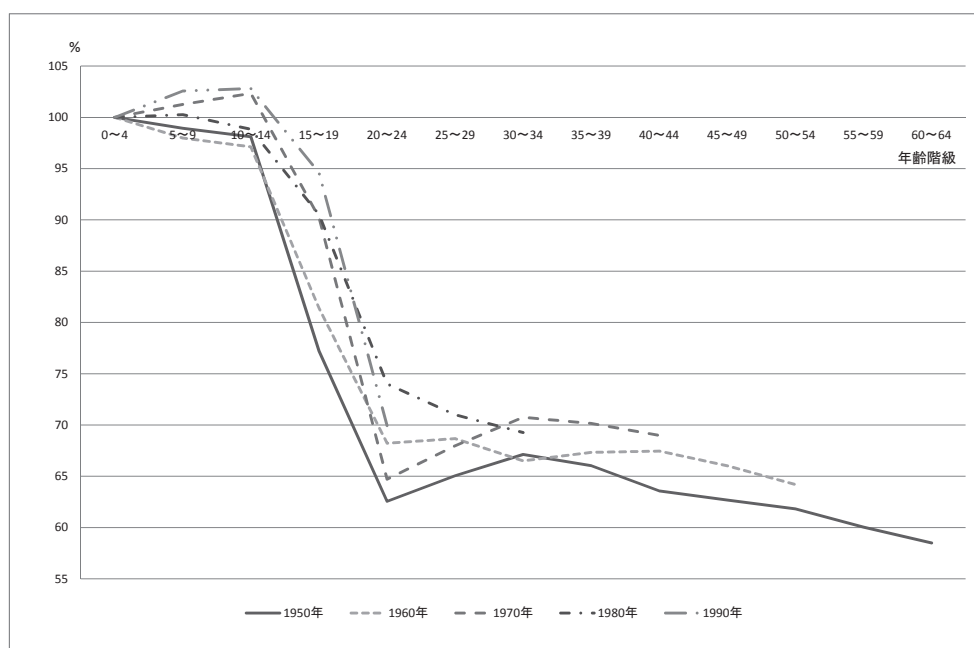
転出者の多くは、就職や就学期にあたる18歳から22歳の時期に本県を離れる。このような若い世代の県外への流出は、域内の消費の低迷を招き、消費の低迷は生産活動の縮小につながり、雇用の場が失われ新たな転出を招くようになる。このような外部不経済の存在によって人口減少が止まらなくなるのである（玄田・大井・篠崎（2005））。また、域内の経済活動だけでなく、婚姻率の低下や出生数の減少に拍車をかけ、本県の存続に関わる問題となる。

図1-1は、国勢調査を用いて、出生時の人口が時間の経過とともにどのように推移しているかを図示したものである。図からすべての世代において、3割強から約4割までの人口が15～24歳までに流出していることがよく分かる。また、樋口（1991）などは近年の少子化によって若者の地元志向が強くなっていると指摘しているが、1980年の0～4歳層までは流出が減少しているものの、1990年生まれには流出が増加しており、少子化の影響で県外への流出傾向が縮小しているとは必ずしも言えないことがわかる。また、流出した人口の回復についてみると、15～24歳までに0～4歳層人口の3割強から約4割までに流出した人口は40代の半ばまでに徐々に回復していることがわかる。しかし、回復する人口は0～4歳人口の1割に満たなくなっており、すべての世代において十分に人口が回復されないま

ま、老年期を迎えることがわかる。このような流出は、婚姻人口の不足、出生数の減少へとつながり、累積的に人口減少スピードを加速させる要因となっている。

このような人口減少スピードを減速させ、将来的に人口の回復のためには、流出者を県内に留めることと、流出した人口の U ターンや J ターンを促進させること、そして県外からの流入者を増加させることが政策的に考えられる。県内に若者を留めるためには、流出要因が何かを明らかにして、その要因を取り除くことや、県内に留まるインセンティブを付加することが有効である。県外への流出の要因については、石黒他（2013）『東京に出る若者たちに』で詳細な分析を行った。UJI ターンについては、当初の調査計画が東日本大震災の影響で中断されたために、調査が遅れ今になってしまった。本調査報告書は、UJI ターン者の社会経済生活と彼らの移動要因を明らかにすることで、より効果的な UJI ターンの促進策を考える上で基礎資料を提供することを目的とする。

図 1-1 出生時人口の推移



出所：総務省『国勢調査』より作成。

2. 調査方法

調査方法の概要は以下のとおりである。

・調査地点と回答者数

調査対象地域は、青森県中南地域県民局管内の 7 市町村、弘前市、黒石市、平川市、西目屋村、藤崎町、大鰐町、田舎館村である。調査地点は、市町村で層化し、母集団の人口比に

応じて対象者を配分した。

・対象者と抽出方法

2015年2月現在で対象地域に在住する20～70歳の有権者男女を、各市町村の選挙人名簿から等確率法の確率比例抽出法で抽出した。

・調査法

郵送による質問紙法を用いた。

・調査期間

2015年2月～3月

3. 調査結果の概要

3-1 回収状況

対象者からの回答は1015名だったが、集計後に明らかに年齢が対象外だった回答者3名と現在在住地が対象地域外だった12名を取り除いて、有効回答は1000、有効回答率は1000/1880で53.2%だった。

3-2 回答者のプロフィール

表1-1 回答者の性別

	人数	%
男性	431	43.1
女性	565	56.5
不明	4	0.4
計	1,000	

表1-2 回答者の年齢

年齢	人数	%
20～29	83	8.3
30～39	157	15.7
40～49	209	20.9
50～59	247	24.7
60～70	276	27.6
不明	28	2.8
計	1,000	

表1-3 回答者の学歴

最終学歴	人数	%
小・中学校	82	8.2
高校	514	51.4
短大・高専	83	8.3
大学・大学院	170	17.0
専門学校	146	14.6
不明	5	0.5
計	1,000	

表1-4 配偶者の有無

	人数	%
結婚している	686	68.6
離別・死別	108	10.8
未婚	200	20.0
無回答	6	0.6
計	1,000	

表1-5 子供の有無

	人数	%
いない	268	26.8
いる	723	72.3
無回答	9	0.9
計	1,000	

表1-6 回答者が同居している家族

	人数	%
夫や妻	643	64.9
自分の父	191	119.3
自分の母	292	29.5
舅(夫や妻の父)	58	5.9
姑(夫や妻の母)	120	12.1
兄弟姉妹	100	10.1
息子	349	35.2
娘	324	32.7
祖父	17	1.7
祖母	60	6.1
一人暮らし	71	7.2
一人暮らしでない		
孫	43	19.1
嫁	23	10.2
娘婿	9	4
その他の親戚	20	11.2

4. 報告書の構成

第2章では、調査対象地域である中南区民局管内の仕事と生活実態をデータから概観した。まず、仕事の状況においては、無業者の割合が60歳以下で有配偶者を除いても、1割を超えており、厳しい就業状況を反映している。また、健康寿命において重要な要因と考えられている高齢者の有業率にみても、無業者の割合が4割強となっており、高齢者層においても、働く場を作ることが重要な課題であることがよく分かる。所得においては、正規雇用者の年収が非正規雇用者の2倍以上となっており、雇用形態間の所得格差が大きいことが明らかになった。

第3章では、移動パターン別に仕事と生活実態を比較した。第一に注目されるのは、UJIターン者の割合である。Uターン者が28.3%、Jターン者4.8%、Iターン者6.6%で全体の4割弱に上っているという点である。また、県内の他地域からの流入者も含めると全人口の半数は他の地域への居住経験をもっていることがわかる。これは、執筆者たちが予想していたよりもはるかに高い数値となっている。UJIターン者の特徴としては、定住者より高学歴者の割合が高いということがいえる。ただ、就業状況や所得においてはUJターン者と定住者間の統計的に有意な差は見られなかった。他方、Iターン者においては、所得にプラスの影響を与えており、Iターン者の所得が他のタイプより有意に高くなっていることが注目される。

第4章では、UJIターンに分析対象を絞って、移動の動機ときっかけについて分析を行った。まず、注目したのは移動の時期であった。事前の予測とは異なり、景気動向を示す有効求人倍率とUJIターンとは統計的に認められる逆相関関係は見られなく、流出の動向とは異なり、景気動向とは無関係にUJIターンが行われていることがわかった。また、UJIターンの主な理由としては、「実家に戻ったから」などの家族関係の理由と答えた人の割合が高く、次に「仕事場・通学先が近いから」などの仕事関連の理由となっていることが興味深い。一方、UJIターンの決め手となった直接のきっかけは、「転勤や配置転換」や「仕事を自分から辞めた」などの仕事関連のきっかけが直接的なきっかけになっていることが分かった。また、UJIターンを可能にした条件としては、UJターン者は実家に住むことが出来た」をあげているのに対し、Iターン、県内の他地域からの流入者は「勤務先に、支店や支部があった」を挙げており、出身地であるか否かによって移動の条件が異なっていることが良くわかる。本章から、UJIターン希望者の属性に応じたきめ細かな支援政策が求められていることが良くわかる。

第5章では、中南区民地域住民の社会関係を検討した。月に一度は連絡ないし接触がある関係をアクティブな関係と見なして、その人数を検討するほか、ソーシャル・サポート源としての社会関係と、集団への参加を検討の対象とした。移動パターンによって社会関係は異なるが、重要な知見として、以下があげられる。中南区民地域では、特に弘前市郊外の自治体において、小学校から、中学校からといった古い関係が強固であり、Uターン経験者で

も、地域に留まり続けた者と同程度の社会関係を得ることができる。一方で、こうした地域では、JI ターン、そして中南津軽地域内部からの移動者が、社会関係に統合されることが少ない。これらの人々、特にI ターン者は、出身地との関係を維持し、それに依存する傾向がある。このことは、中南津軽地域全体で言えることであるが、特に郊外地域で強く、流入者を地域に取り込み、活用していく障害となりうる。

第6章では女性を対象を絞り、第一に、家族や仕事の実態について定住層と移動層を比較しつつ検討し、第二に、移動層の中でも青森県出身者を対象としてU ターン移動の理由や条件について分析を行った。現在、女性の回答者の9割弱が実家で同居および近居の状態であり、実家と密接な関係を持てる状況にあった。移動経験については、青森県出身女性の9割弱が30代までにU ターンしている。そして7割近くがもともと青森に戻る希望を持っており、その多くが親の近くにいる安心感をあげていた。U ターンの理由や条件について、女性にとって家族との関係（親や配偶者、子どもなどの人間関係や家屋などの資産も含む）は非常に密接である。U ターンできるのは実家の存在が大きく、とくに低年齢層では仕事を辞めて避難的に実家に戻っていると思われる層が含まれていた。高年齢層は、親や配偶者、子どもとの関係のなかで移動が行われる傾向が強かった。

第7章では、出生順位とUJI ターン地域移動との関係を明らかにした。長男の場合、定住者が42.1%、U ターン者が40.3%で約8割を占めている。長男ではない場合でも、定住者とU ターン者を合わせれば7割程度を占めるものの、J ターン、I ターンに注目すると、長男に比べてJ ターン、I ターンをしている割合がやや高いのが特徴である。長女の場合、定住者が52.8%で半数以上を占めている。一方、長女はない場合でも定住者の割合が54.0%でもっとも高く、出生順位による差であるよりは女性であることが県外での生活経験の少なさに影響しているのではないかと推測される。また、長男で20代、30代は自分の親と同居する人の割合が他の年齢階層より多いことが特徴的である。長男ではない場合でも同様であった。この結果は、子育てに対する支援をうけるなど、子世代のニーズによって親との同居を選択した可能性も伺わせる。すなわち、若い世代、特に子育て世代にとって親から生活および子育てへのサポートがあることが定住するあるいはUJI ターンしてくる要因になることであろう。これらから、都会では成し遂げない子育てサポートの仕組みを確立させることによって、若い世代が地域移動および地域に定着できる環境を整えることは今後の課題であろう。

【参考文献】

- 玄田有史・大井方子・篠崎武久（2005）「地域別に見た労働市場－労働移動と賃金格差の視点から」『経済社会の構造変化と労働市場に関する調査研究報告書』、雇用能力開発機構・統計研究会。
- 日本創成会議人口減少問題検討分科会（2014）「ストップ少子化・地方元気戦略」、
<http://www.policycouncil.jp/pdf/prop03/prop03.pdf>
- 樋口美雄（1991）『日本経済と就業行動』東洋経済新報社

第2章 中南津軽地域住民の仕事と生活実態

李 永 俊・杉 浦 裕 晃

1. はじめに

本章では、中南津軽地域住民の仕事と生活実態について述べる。地方の小地域において、その就業状況や生活実態を統計データから知ることは困難である。その理由は、国が行う調査の多くが地域ブロック単位（東北や関東など）の集計に留まり、地方の小地域についてのデータが存在しないからである。

国が行っている大規模かつ詳細な調査として、国勢調査や就業構造基本調査があるが、5年に一度行われるということもあり、きめ細かく住民の仕事と生活実態を知るには不十分となっている。このような意味からも、今回の調査は中南津軽地域の住民生活を知る上で貴重なデータである。

2. 仕事の状況

(1) 全体の状況

最初に、サンプル全体の仕事の状況を概観しよう。調査対象は20～70歳の者であるが、住民の仕事と生活実態を知るために、在学中の21名をここでの分析対象から取り除いた。雇用形態を(1)会社役員、(2)正規の職員・従業員、(3)パート・アルバイト、(4)派遣社員、(5)契約社員、(6)家業の手伝い、(7)自営業または会社経営、(8)その他、(9)無業者、の9つに分類することにする。サンプル全体で見た就業状況は表2-1の通りである。

表2-1 就業状況の概観（全体）

就業形態	度数	構成比	構成比 (就調)
会社役員	5	0.5	3.6
正規の職員・従業員	341	36.7	39.6
パート・アルバイト	150	16.1	15.6
派遣社員	9	1.0	1.4
契約社員	52	5.6	3.5
家業の手伝い	29	3.1	1.2
自営業または会社経営	98	10.5	5.5
その他	2	0.2	2.8
無業者	244	26.2	26.8
計	930	100.0	100.0

有業者に注目すると、正規の職員・従業員が最も多く、全体の 36.7%を占めている。続いて、パート・アルバイトが 16.1%、自営業または会社経営が 10.5%、契約社員が 5.6%、家業の手伝いが 3.1%、派遣社員が 1.0%という順になっている。無業者は全体の 26.2%を占めている。

全国調査である就業構造基本調査（平成 24 年＝2012 年）から、今回の調査とほぼ同様に 20 歳以上 70 歳未満にサンプルを絞って、就業状態を見たものを図表 2-1 の右端に掲示した。調査時点の違いに留意しつつ、この全国平均の値と比較して分かることは、正規の職員・従業員（39.6%）もパート・アルバイト（15.6%）も比率的に大きく変わらないということである。

逆に、比率に違いが見られるのは自営業または会社経営で、中南津軽地域は全国平均より 5.0 ポイントも高かった。青森県は就業機会に乏しいことから、自営業が比較的盛んな地域となっており、今回の調査でも改めて確認できた。また、中南津軽地域の無業者の割合は全国平均よりも 0.6 ポイント低いことが分かる。就業機会が乏しいと言われる中で、生計を立てるためにも就業している者は多いのである。

今回の調査では、分析対象として年齢層が高い者や有配偶の女性が多く含まれている。そこで、一般的に労働力として期待されている層に注目してみよう。年齢を一般的な定年年齢である 60 歳以下に設定し、有配偶の女性を除いて就業状況を概観する（表 2-2）。

表 2-2 就業状況の概観（60 歳以下、有配偶女性を除く）

就業形態	度数	比率	有業者比率	有業者比率(就調)
会社役員	5	1.1	1.3	4.2
正規の職員・従業員	246	56.0	64.1	70.8
パート・アルバイト	39	8.9	10.2	9.9
派遣社員	6	1.4	1.6	2.0
契約社員	32	7.3	8.3	4.3
家業の手伝い	7	1.6	1.8	0.5
自営業または会社経営	49	11.2	12.8	6.2
無業者	55	12.5		<13.5>
計	439	100.0		

（注）右端の値は就業構造基本調査（平成 24 年）に基づく。カッコ内の値は、20 歳以上 60 歳未満で有配偶女性を除いた者に対する無業者の割合で、それ以外は有業者に対する各雇用形態の者の割合である。

分析対象を 60 歳以下で有配偶女性を除く形で絞ると、中南津軽地域における無業者の割合は 12.5%となった。ほぼ同様の条件（20 歳以上 60 歳未満で有配偶女性を除く）で、就業構造基本調査（平成 24 年）の全国平均（13.5%）と比較すると、無業者の割合は 1.0 ポイント低いことになる。この結果は想定を下回るものであるが、その理由を検討してみよう。

第1に、比較時点に差があることが挙げられる。ここ最近では、アベノミクスと呼ばれる経済政策が功を奏して、全国的な景気回復が見られている。比較時点に約2年の差があり、不況時である平成24年の全国調査と比較することに限界がある。また、その2年間に中南津軽地域においても景気回復の影響が見られたのかもしれない。第2に、先程のサンプル全体の概観でも見られたように、中南津軽地域では無業率は低く、積極的に就業しなければならない理由があることも考えられる。

第2に、有業者に注目して特徴を確認していこう。正規の職員・従業員の割合は64.1%で、有業者の約3分の2を占めている。一見すると高い値を示しているが、全国平均(70.8%)と比較すると6.7ポイント低い値となっている。パート・アルバイトの割合は10.2%で、全国平均(9.9%)よりもやや高い。比率に違いが見られるのは自営業または会社経営で、中南津軽地域は全国平均より6.6ポイントも高かった。契約社員の割合も高く、中南津軽地域は全国平均より4.0ポイント高かった。

(2) 高齢者の就業状況

続いて、高齢者の就業状況を確認してみよう。分析対象については、有配偶女性を除いた上で、60歳以上70歳以下の者に限定する。高齢者の就業状況をまとめたものが表2-3である。

表2-3 高齢者の就業状況

就業形態	度数	比率	有業者比率	有業者比率(就調)
正規の職員・従業員	14	11.5	19.7	22.7
パート・アルバイト	16	13.1	22.5	15.4
派遣社員	1	0.8	1.4	1.0
契約社員	9	7.4	12.7	9.0
家業の手伝い	6	4.9	8.5	0.6
自営業または会社経営	25	20.5	35.2	24.3
無業者	51	41.8		<41.5>
計	122	100.0		

(注) 右端の値は就業構造基本調査(平成24年)に基づく。カッコ内の値は、60歳以上70歳未満で有配偶女性を除いた者に対する無業者の割合で、それ以外は有業者に対する各雇用形態の者の割合である。

60歳以上70歳未満で有配偶女性を除いた者に限定すると、無業者の割合は41.8%で、4割以上の高齢者が仕事を持っていないことになる。一見すると高い値を示しているが、ほぼ同様の条件(60歳以上70歳未満で有配偶女性を除く)で、就業構造基本調査(平成24年)の結果と比較すると、実は全国平均(41.5%)とほぼ同じ値であった。

正規の職員・従業員の割合は19.7%で、全国平均よりも3.0ポイント低い。パート・アル

バイトの割合は 22.5%と高く、全国平均よりも約 10 ポイントも高い。高齢者の就業は全国並みに活発である一方で、パート・アルバイトとして就業する者が多いことが指摘できる。

全国平均と比較して大きな違いが見られるのは、自営業または会社経営である。有業者の 35.2%を占めており、中南津軽地域は全国平均より約 9 ポイントも高いことになる。家業手伝いの割合も有業者の 8.5%でかなり高く、全国平均よりも約 8 ポイントも高かった。高齢者に注目すると、中南津軽地域は自営業および家族従業者が多いことが指摘できる。

(3) 有配偶女性の就業状況

有配偶女性に注目して就業状況を見てみよう。分析対象を 60 歳以下の有配偶女性とする。有配偶女性の就業状況をまとめたものが表 2-4 である。

表 2-4 有配偶女性の就業状況

雇用形態	度数	比率	有業者比率	有業者比率(就調)
正規の職員・従業員	71	27.1	38.8	34.9
パート・アルバイト	79	30.2	43.2	45.7
派遣社員	1	0.4	0.6	2.3
契約社員	9	3.4	4.9	4.3
家業の手伝い	10	3.8	5.5	2.7
自営業または会社経営	12	4.6	6.6	3.8
その他	1	0.4	0.6	3.6
無業者	79	30.2		<35.6>
計	262	100.0		

(注) 右端の値は就業構造基本調査(平成 24 年)に基づく。カッコ内の値は、20 歳以上 60 歳未満の有配偶女性に対する無業者の割合で、それ以外は 20 歳以上 60 歳未満の未婚ではない有業者に対する各雇用形態の者の割合である。

有配偶女性全体(60 歳以下)に占める無業者の割合は約 3 割(30.2%)となっている。全国調査(就業構造基本調査)では、有配偶女性(20 歳以上 60 歳未満)の無業者割合は 35.6%であることから、全国平均と比べると無業者の割合は低いことが分かる。

有業者に注目して就業形態を見てみると、有配偶女性全体(60 歳以下)の有業者のうち、正規の職員・従業員は 38.8%、パート・アルバイトは 43.2%であった。主にパート・アルバイトとして活躍している一方で、正規の職員・従業員の割合は全国平均よりもやや高いことが指摘できる。全国調査では、未婚ではない女性有業者(20 歳以上 60 歳未満)のうち、正規の職員・従業員は 34.9%、パート・アルバイトは 45.7%である。中南津軽地域において正規の者の比率が高い理由は、正規・パート・アルバイト以外の雇用形態の比率が全国平均よりも低いことが影響している。また、自営業または会社経営の割合も全国平均よりも高い。

3. 所得からみる生活実態

就業形態別の年間所得（年収）を通して生活実態をみる。所得については、平均値のみで所得分布の全体像を捉えることは困難である。なぜなら、分布が低所得層に偏っている、あるいは高所得者が少数存在するだけで、平均値が上下してしまうからである。そのため、年収の低い順に並べたときにちょうど中央（50%点）に位置する中央値と、低い順に並べたときの百分位点（%点）について、5、10、25、75、90、95%の各点を確認する。

就業形態を3区分で表した上で、年収にどのような差があるのか見ることにする。ここで、就業形態の3区分は、(1)正規雇用者（9区分における1および2）、(2)非正規雇用者（9区分における3,4,5,8）、(3)自営業・家族従業者（9区分における6および7）、の3つとする。

表2-5は、正規雇用者（以下、正規）、自営業・家族従業者（自営業）、非正規雇用者（非正規）の所得分布を比較したものである。平均値で見ると、自営業・家族従業者（366.1万円）と正規雇用者（362.6万円）の値はほぼ同じであるが、非正規雇用者（129.9万円）はそれらに比べると約250万円も低くなっている。

分布の散らばりを表す標準偏差で見ると、自営業・家族従業者（489.1万円）、正規雇用者（210.3万円）、非正規雇用者（79.3万円）の順で大きい。自営業・家族従業者では事業のリスクもリターンも大きいことから、平均値の散らばりも大きくなることが確認できる。ただし、標本数が小さいことも標準偏差を押し上げる要因になる。一方、非正規雇用者では平均値は低く、散らばりも小さいことが分かる。

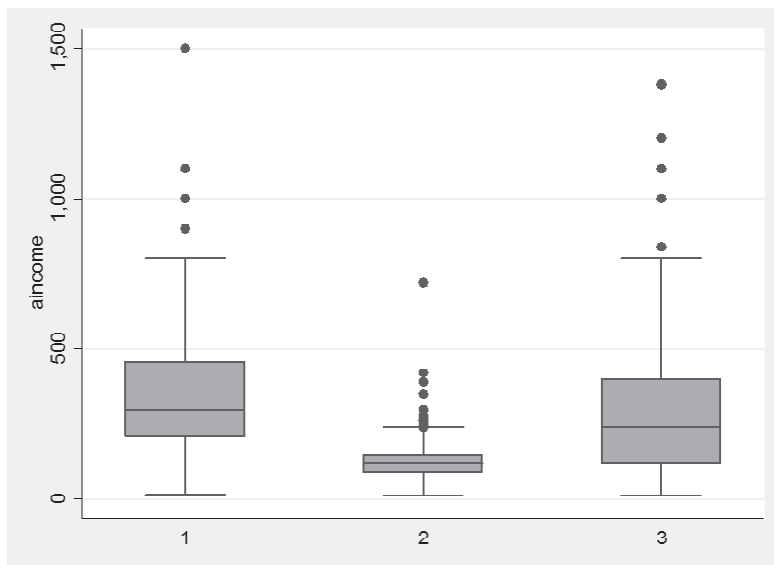
表 2-5 就業形態と年収

正規雇用者		非正規雇用者		自営業・家族従業者	
N	328	N	197	N	108
平均	362.6	平均	129.9	平均	366.1
標準偏差	210.3	標準偏差	79.3	標準偏差	489.1
5%	140	5%	40	5%	36
10%	160	10%	60	10%	60
25%	213	25%	90	25%	120
50%	300	50%	120	50%	240
75%	460	75%	150	75%	410
90%	670	90%	200	90%	700
95%	730	95%	260	95%	1100

（注）単位は万円である。

分布の特性を示す中央値（50%点）で比較すると、高い順に正規、自営業、非正規となる。上位10%点（90%点）で比較すると、自営業と正規はあまり変わらないが、非正規は大きく下回り、その差は約500万円になる。逆に下位10%点（10%点）で見ると、自営業と非正規はあまり変わらないが、正規はそれらよりも約100万円高くなる。

図 2-1 就業形態と年収（グラフ）



(注) 1 正規雇用者、2 非正規雇用者、3 自営業・家族従業者

図 2-1 において、太い帯の両端はそれぞれ 25%点と 75%点で、その中央にある線は中央値 (50%点) である。細い線で示された上限と下限は分布の幅を見る目安である。それぞれ 75%点と 25%点から四分位レンジ (75%点と 25%点の差) の 1.5 倍離れた値に最も近い観測値で定義される。黒い点は外れ値を示している。この図を見れば、正規と非正規の所得水準の極端な違い、自営業の所得の大きな散らばりなどがよく分かる。

4. 就業形態と性別からみる生活実態

次に、就業形態別および男女別に、年収と週間労働時間を見ることにしよう。

(1) 正規雇用者

男女別正規雇用者の年収と週間労働時間について、詳しい値で見たものが表 2-6、図示したものが図 2-2 である。正規雇用者の年収について、平均値は男性 409.2 万円、女性 295.2 万円であった。中央値 (50%点) で見ると、男性 350 万円、女性 250 万円で、いずれで見ても男女間の所得格差は約 100 万円であった。年収の標準偏差は男性の方が大きく、散らばりがより大きいことを示している。

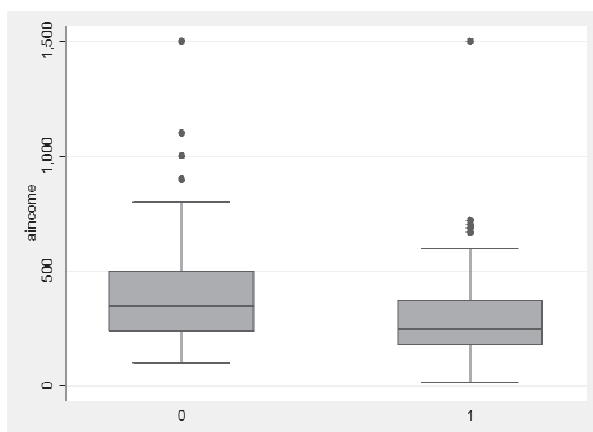
正規雇用者の週間労働時間について、平均値は男性 46.0 時間、女性 42.8 時間であった。中央値 (50%点) で見ると、男性 45 時間、女性 40 時間である。男女間の労働時間の格差は週 3~5 時間で、散らばりについても男性の方が大きいことが分かった。

表 2-6 男女別正規雇用者の年収と週間労働時間

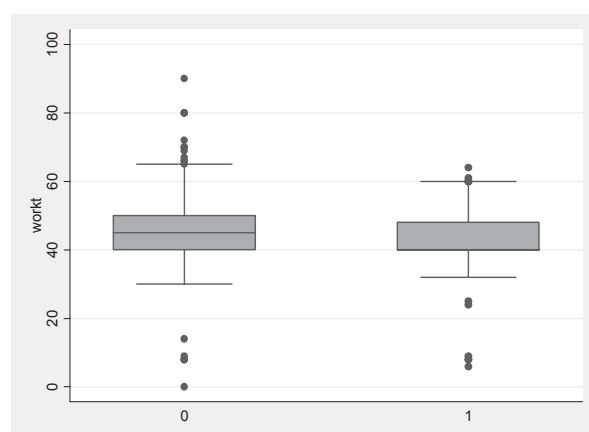
年収 (単位:万円)				労働時間 (単位:時間)			
正規雇用者				正規雇用者			
男性		女性		男性		女性	
N	195	N	132	N	200	N	139
平均	409.2	平均	295.2	平均	46.0	平均	42.8
標準偏差	217.5	標準偏差	179.3	標準偏差	11.7	標準偏差	8.8
5%	180	5%	120	5%	34	5%	32
10%	200	10%	140	10%	40	10%	38
25%	240	25%	180	25%	40	25%	40
50%	350	50%	250	50%	45	50%	40
75%	500	75%	375	75%	50	75%	48
90%	700	90%	500	90%	60	90%	50
95%	800	95%	600	95%	66	95%	55

図 2-2 男女別正規雇用者の年収と週間労働時間 (グラフ)

①年収



②週間労働時間



(凡例) 0:男性、1:女性

(2) 非正規雇用者

男女別非正規雇用者の年収と週間労働時間について、詳しい値で見たものが表 2-7、図示したものが図 2-3 である。非正規雇用者の年収について、平均値は男性 182.3 万円、女性 115.7 万円であった。中央値 (50%点) で見ると男性 170 万円、女性 108 万円で、中央値で見た男女間の所得格差は 62 万円であった。年収の標準偏差は男性の方が大きかった。

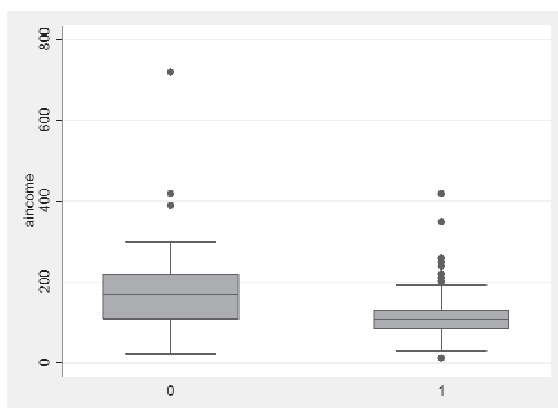
非正規雇用者の週間労働時間について、平均値は男性 46.0 時間、女性 30.5 時間であった。中央値 (50%点) で見ると、男性 40 時間、女性 30 時間である。非正規雇用者における労働時間の男女間格差は週 10 時間以上の開きがある一方で、散らばりについては女性の方が大きいことが分かった。男性非正規雇用者の労働時間は正規労働者と変わらない水準にありながら、年収では 220 万円も異なるという事実は衝撃である。

表 2-7 男女別非正規雇用の年収と週間労働時間

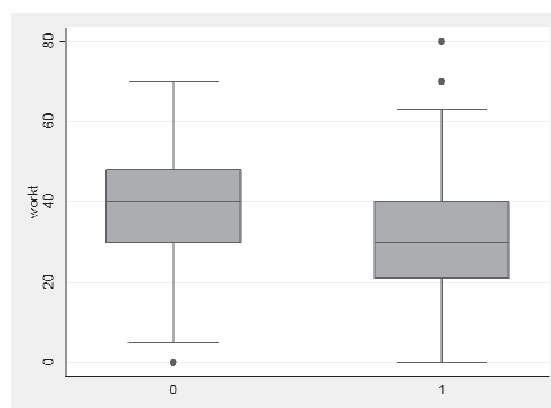
年収 (単位:万円)		労働時間 (単位:時間)	
非正規雇用者			
男性		女性	
N	42	N	155
平均	182.3	平均	115.7
標準偏差	123.2	標準偏差	54.8
5%	50	5%	40
10%	70	10%	60
25%	110	25%	85
50%	170	50%	108
75%	220	75%	130
90%	300	90%	190
95%	390	95%	204

図 2-3 男女別非正規雇用の年収と週間労働時間 (グラフ)

①年収



②週間労働時間



(凡例) 0:男性、1:女性

(3) 自営業・家族従業員

男女別自営業・家族従業者の年収と週間労働時間について、詳しい値で見たものが表 2-8、図示したものが図 2-4 である。自営業・家族従業者の年収について、平均値は男性 416.1 万円、女性 270.2 万円であった。中央値 (50%点) で見ると、男性 300 万円、女性 150 万円で、いずれで見ても男女間の所得格差は約 150 万円もあり、正規雇用者よりも大きな格差が見られる。正規雇用者と異なり、年収の標準偏差は女性の方が大きいことが分かる。

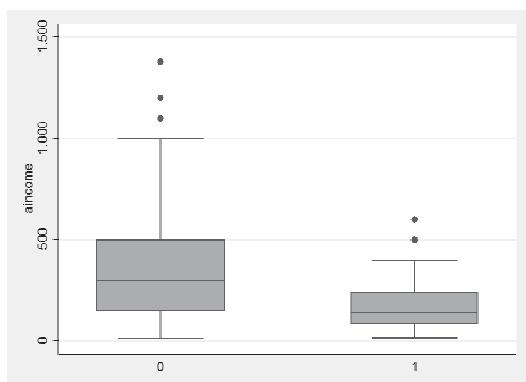
自営業・家族従業者の週間労働時間について、平均値は男性 37.8 時間、女性 31.7 時間であった。中央値 (50%点) で見ると、男性 42 時間、女性 30 時間である。中央値で見た男女間の労働時間の格差は週 12 時間もある。散らばりについては女性の方が大きいことが分かった。自営業・家族従業者については、女性において年収および労働時間に大きなばらつきがあることが示された。

表 2-8 男女別自営業・家族従業員の年収と週間労働時間

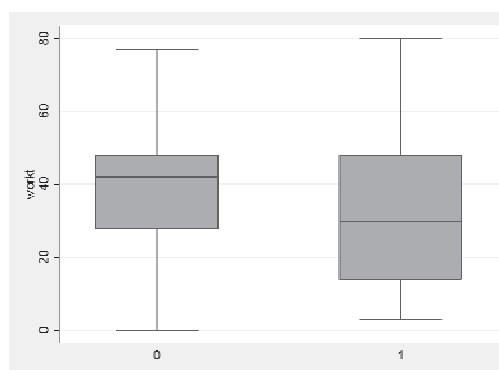
年収 (単位:万円)		労働時間 (単位:時間)	
自営業・家族従業者			
男性		女性	
N	71	N	37
平均	416.1	平均	270.2
標準偏差	431.8	標準偏差	578.0
5%	60	5%	16
10%	96	10%	30
25%	150	25%	90
50%	300	50%	150
75%	520	75%	240
90%	800	90%	400
95%	1200	95%	600

図 2-4 男女別自営・家族従業員の年収と週間労働時間 (グラフ)

①年収



②週間労働時間



(凡例) 0:男性、1:女性

5. 中核市部と周辺部との仕事と生活実態の差

ここでは、地域内の中核となっている市とその周辺部との差を仕事と生活実態面で概観する。中南津軽地域は、弘前市、黒石市、平川市の3市からなる市部と、西目屋村、藤崎町、大鰐町、田舎館村、板柳町の5町村からなる町村部で構成されている。

仕事と生活実態の差を見るため、就業状況を4区分で表した上で、その構成比に差が見られるか統計的に検証する。ここで、就業状況の4区分は、(1)自営業・家族従業者(9区分における6および7)、(2)正規雇用者(9区分における1および2)、(3)非正規雇用者(9区分における3,4,5,8)、(4)無業者(9区分における9)、の4つとする。

最初に、市部と町村部との差を見てみたい。表 2-9 から、市部と町村部では差がほとんど見当たらないことが分かる。カイ二乗検定において、差があるとする仮説が棄却できないからである(chi2(3) = 3.6841, Pr=0.298)。また、弘前市のみを中核都市として独立させ、それ以外の市町村をまとめて 1 つの地域と見た場合、構成比の差の検定を試みたが、同様に統計的な差は見当たらなかった(chi2(3) = 2.8004, Pr=0.423)。このことから、中南津軽地域は一体として一つの生活圏となっており、地域住民は当該市町村間をまたいで生活していることが分かる。

表 2-9 中南津軽地域内の就業状況の比較

	自営・ 家族従業	正規	非正規	無業者	計
市部	15 11.8	54 42.5	32 25.2	26 20.5	127 100.0
町村部	112 14.0	292 36.4	181 22.5	218 27.2	803 100.0
計	127 13.7	346 37.2	213 22.9	244 26.2	930 100.0

Pearson chi2(3) = 3.6841 Pr = 0.298

	自営・ 家族従業	正規	非正規	無業者	計
弘前市	50 15.1	120 36.3	82 24.8	79 23.9	331 100.0
弘前市 以外	77 12.9	226 37.7	131 21.9	165 27.6	599 100.0
計	127 13.7	346 37.2	213 22.9	244 26.2	930 100.0

Pearson chi2(3) = 2.8004 Pr = 0.423

6. 小括

この章では、調査対象地域である中南県民局管内の仕事と生活実態をデータから概観した。仕事の状況においては、無業者の割合が 60 歳以下で有配偶者を除いても、1 割を超えており、厳しい就業状況を反映している。また、健康寿命において重要な要因と考えられている高齢者の有業率にみても、無業者の割合が 4 割強となっており、高齢者層においても、働く場を作ることが重要な課題であることがよく分かる。所得においては、正規雇用者の年収が非正規雇用者の 2 倍以上となっており、雇用形態間の所得格差が大きいことが明らかになった。

第3章 U・J・I ターン者の仕事と生活実態

李 永 俊・杉 浦 裕 晃

1. はじめに

本章では、移動パターン別に仕事や生活状況がどのように異なっているのかを明らかにする。人々が生活場所を選択して移動するには、さまざまな目的がある。両親や親戚と多くの時間を過ごしたいから、あるいは生まれ育った場所から離れたくないから、あるいはその地域の自然環境や暮らしの環境に魅せられてなど、さまざまな理由が考えられる。そのため、所得が下がっても、あるいは現在の職を失っても、移動を選択する場合がある。

しかし、従来の経済学では、移動に伴う便益がそのコストを上回っている場合、経済合理的観点から個人は移動を選択することと考える。つまり、

(賃金(移動先) × 就業確率(移動先)) - 移動コスト >

賃金(出身地) × 就業確率(出身地)

が成り立てば移動し、逆の場合は移動しないとされている。

上記の式から地方と都市の間の賃金格差や有効求人倍率の差が、地方の若者たちが都市部に移動する大きな要因となっていることが分かる。太田(2010)、樋口(1991)、勇上(2010)、李(2013)などの研究はデータを用いて上記のモデルを実証している。

しかし、UターンやJターン、Iターンについては、上記の経済モデルが成り立っているのかに関する実証的な研究はなされていない。そこで、本章では上記の経済モデルがU・J・Iターンの選択において、有効に機能しているのかをデータを用いて明らかにしてみたい。

2. U・J・Iターンの定義

U・J・Iターンは、主に大都市圏に居住している者が、地方に移住する地域間移動を指す。「Uターン」は出身地に戻ることに、「Jターン」は出身地の近くの地方都市に移住する形態、「Iターン」は出身地以外の地方へ移住する形態を指している。

そこで、移動のパターンによって次の9タイプに分類する(表3-1)。①弘前定住(弘前市に住み続ける者)、②近郊定住(弘前市近郊に住み続ける者。ただし、弘前市近郊とは黒石市、平川市、西目屋村、藤崎町、大鰐町、田舎館村を指す)、③域内移動(弘前市とその近郊との相互移動で、中南津軽地域内の移動となる)、④弘前へのUターン(弘前から県外を経由して弘前へ)、⑤近郊へのUターン(近郊から県外を経由して近郊へ)、⑥弘前へのJターン(近郊から県外を経由して弘前へ)、⑦近郊へのJターン(弘前から県外を経由して

近郊へ)、⑧Iターン(県外から域内へ)、⑨県内からの流入(県内かつ域外から域内へ)、の9つである。

また、移動時の年齢が14歳未満の者については、自発的な移動とみなされないことから、④は①として、⑤は②として、⑥と⑦は③として分類することにした。

表 3-1 U・J・Iターンの9タイプ分類

5タイプ分類		9タイプ分類		卒業地	現住地	県外経験	度数	構成比
1	定住者	1	弘前定住	弘前	弘前(卒業地)	なし	237	24.9
		2	近郊定住	近郊	近郊(卒業地)	なし	141	14.7
		3	域内移動	域内(=弘前+近郊)	域内(卒業地以外)	なし	95	10.0
2	Uターン者	4	弘前へのUターン	弘前	弘前	あり	164	17.2
		5	近郊へのUターン	近郊	近郊	あり	113	9.1
3	Jターン者	6	弘前へのJターン	近郊	弘前	あり	28	2.9
		7	近郊へのJターン	弘前	近郊	あり	19	2.0
4	Iターン者	8	Iターン	県外	域内		65	6.8
5	県内流入者	9	県内からの流入	県内(域外)	域内		117	12.3
							979	100.0

(注) 卒業地とは卒業した中学校の所在地である。

表 3-1 から、弘前市に定住する者は全体の 24.9%、弘前市近郊に定住する者は同 14.7%、中南津軽地域内を移動した者は同 10.0%であった。弘前市への U ターン者は全体の 17.2%、弘前市近郊への U ターン者は同 9.1%であることから、中南津軽地域への U ターン者は定住者の割合から見て比較的多いことが分かる。弘前市への J ターン者は全体の 2.9%、弘前市近郊への J ターン者は同 2.0%であるのに対して、中南津軽地域への I ターン者は全体の 6.8%を占めている。県内からの流入者は全体の 12.3%となっている。

前章の分析で明らかにしたように、中南津軽地域においては、市部と町村部の間に統計的に有意な就業状況の差が見られない。そのため、以下の分析では、弘前定住、近郊定住、域内移動をまとめて①定住者、弘前への U ターンと近郊への U ターンを②U ターン者、弘前への J ターンと郊外への J ターン者を③J ターン者、I ターンは④I ターン者、県内からの流入は⑤県内流入者の 5 つのタイプに再分類し、仕事と生活状況を明らかにする(表 3-2)。

表 3-2 U・J・Iターンの5タイプ分類

5タイプ分類		度数	構成比
1	定住者	473	48.3
2	Uターン者	277	28.3
3	Jターン者	47	4.8
4	Iターン者	65	6.6
5	県内流入者	117	12.0
		979	100.0

5タイプ分類によると、もっとも多いのは域内移動者を含む定住者で、全体のほぼ半数

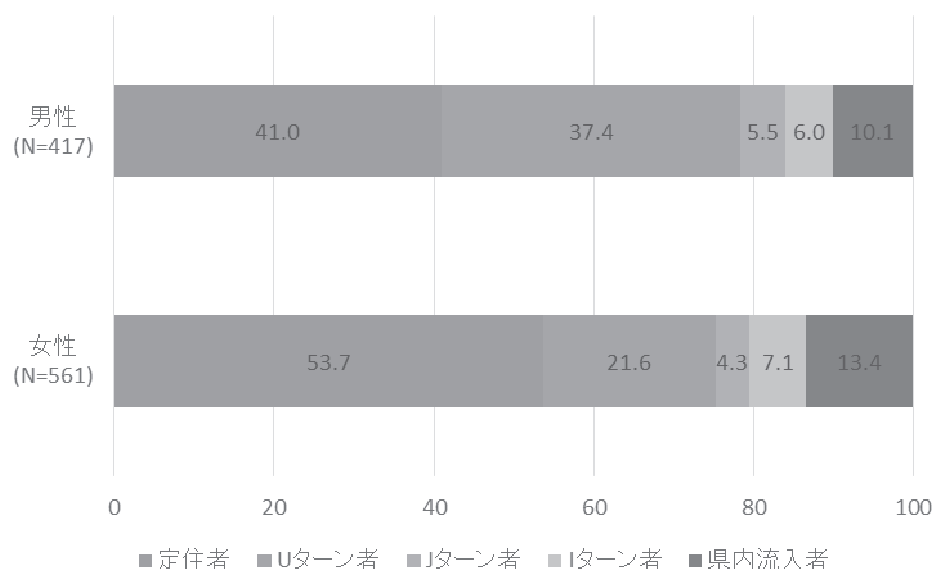
(48.3%)である。域内へのUターン者は全体の約4分の1に当たる28.3%を占めており、大きなウェイトを占めていることが分かる。Jターン者は全体の4.8%であるのに対して、Iターン者の割合は同6.6%であり、県内流入者は同12.0%であることが分かる。U・Jターンを合わせることで、県外への移動を経験している中南津軽地域出身者は全体の33.1%に上がることが分かる。

中南津軽地域の住民の約4割がU・J・Iターンを経験していたという事実は、想定を超えるインパクトであった。U・J・Iターンに関して、まとまった調査報告はあまり例がなく、感覚的にU・J・Iターンが語られるような側面があった。今回の調査は、リアルなデータとして実態を抽出したという意味で、非常に画期的なものである。

(1) 男女別の移動パターン

男女別によって移動パターンが異なるのか見てみよう(図3-1)。

図3-1 男女別の移動パターン



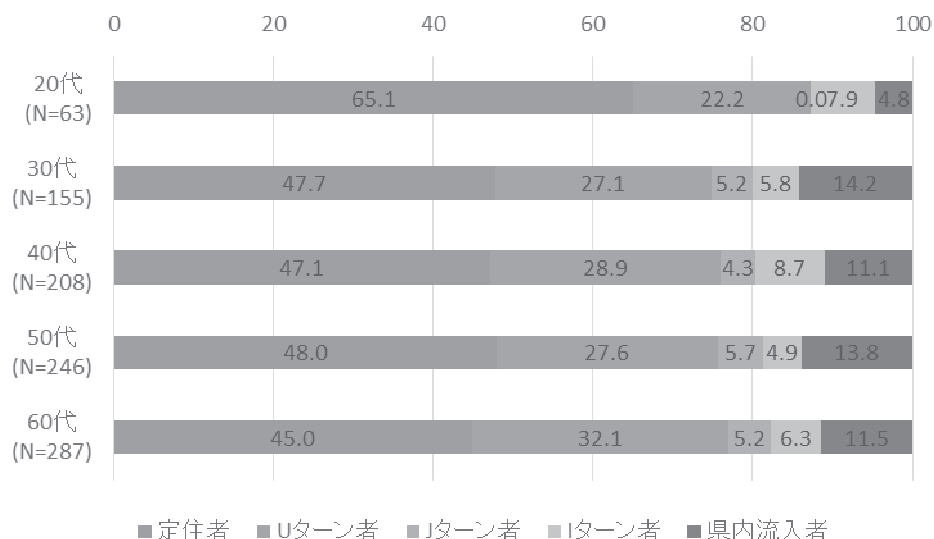
男女別に移動パターンを見ると、統計的に有意な差が確認された($\chi^2(4) = 33.2487, Pr = 0.000$)。グラフからも明確に異なっていることが分かる。男性では移動経験者の割合が高く、女性では定住者が多いことが分かる。男女間でJターン者、Iターン者、県内流入者の割合に大きな差は見られない。女性におけるIターン者の割合がやや高くなっており、婚姻などを理由に移動していることがわかる。

(2) 年齢階級別の移動パターン

20代から60代の年齢階級に分けて、移動パターンに違いが見られるのか確認してみよ

う（図 3-2）。この年齢階級区分による移動パターンの違いについて、統計的に有意な差は見られなかった($\chi^2(16) = 17.4811, Pr = 0.355$)。

図 3-2 年齢階級別の移動パターン



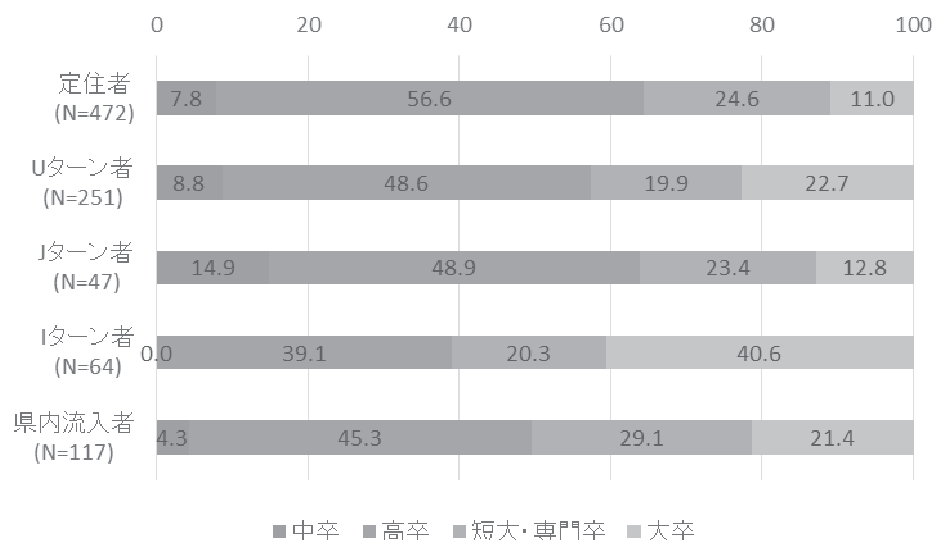
20代では定住者が多く、UターンおよびIターンは見られたが、Jターンは見られなかった。20代のIターン者の割合が高くなっているのは、弘前大学の存在によって県外からの進学者が多いためと思われる。UターンやJターンは30代以降から多く行われるようになることが確認できる。30代以降において、移動パターンの構成比に大きな違いは見られず、定住者の割合は概ね5割弱となっている。Uターンは3割弱、Jターンは約5%、Iターンは約6%、県外からの流入者が約1割となっている。したがって、U・J・Iターン者は4割程度存在している。また、40代において、Iターン者が多いことが注目される。

(3) 移動パターン別の学歴分布

学歴を中学校卒、高校卒、短大・専門学校卒、大学・大学院卒に4分類し、移動パターンによって学歴の分布が異なるのか見てみよう（図 3-3）。移動パターンによって、学歴の分布に有意な差が見られた($\chi^2(12) = 59.2641, Pr = 0.000$)。

特徴的なのは、Uターン者とIターン者において、高学歴者の割合が他のグループと比較して高くなっていることである。特にIターン者においては、中学校卒が見られない一方で4割が大学・大学院卒となっており、他のグループと比較して高学歴者の割合が高くなっている。

図 3-3 移動パターン別の学歴分布



石黒他（2012）の研究において、高学歴の者ほど移動する傾向が観察されていたが、今回の調査によっても同様の結果が見られた。高学歴の者ほど様々な職業を選択できることから、より有利な条件で就業できることにより移動が活発になると考えられる。十分な地縁がないIターン者にとって、高い学歴は大きな競争力の源泉となっているようである。

3. 仕事と生活実態

ここでは、移動パターンによって 5 タイプに分けた場合、就業状況や生活状況にどのような差異が見られるのか、比較検討してみよう。以下の分析では、表 3-2 で示した 5 タイプを移動タイプと呼ぶことにする。

(1) 就業状況

移動タイプ別に就業状況がどのように異なっているのかを見てみよう（表 3-3）。

表 3-3 移動タイプ別の就業状況

	自営業・ 家族従業	正規	非正規	無業者	計
定住者	68 15.2	168 37.5	97 21.7	115 25.7	448 100.0
Uターン者	39 14.6	98 36.6	65 24.3	66 24.6	268 100.0
Jターン者	7 16.3	17 39.5	11 25.6	8 18.6	43 100.0
Iターン者	7 11.7	18 30.0	15 25.0	20 33.3	60 100.0
県内流入者	6 5.4	45 40.5	25 22.5	35 31.5	111 100.0
計	127 13.7	346 37.2	213 22.9	244 26.2	930 100.0

（注）上段は度数、下段は構成比である。

タイプ間の就業状況においては、統計的に有意な差は見られない($\chi^2(12) = 2.5022$, $Pr = 0.406$)。このような結果から、就業については移動経験の有無によって大きな差は見られず、地域内の労働市場環境に左右されていることが分かる。Iターン者と県内からの流入者において、無業者の割合が3割程度と高く、移動してみても就業は容易ではない実態が見える。

(2) 職種

移動タイプ別に見て、職種の分布に違いがあるのか確認してみよう（表 3-4、図 3-4）。移動タイプによって、職種の分布に統計的な差異があることが分かった($\chi^2(44) = 57.2530$, $Pr = 0.087$)。表 3-4 を用いて詳細を確認できるが、全体的な様子を知るには図 3-4 のようなグラフが優れている。

表 3-4 移動パターン別の職種分布

	管理職	専門・ 技術職	事務職	販売職	営業職	サービス 職	技能職	保安職	製造・ 生産職	農林水産 関係	運輸業	その他	計
定住者	17 5.2	69 21.1	52 15.9	26 8.0	13 4.0	38 11.6	13 4.0	2 0.6	47 14.4	41 12.5	8 2.5	1 0.3	327 100.0
Uターン者	11 5.7	34 17.5	23 11.9	13 6.7	4 2.1	32 16.5	18 9.3	5 2.6	28 14.4	21 10.8	4 2.1	1 0.5	194 100.0
Jターン者	2 5.9	4 11.8	4 11.8	2 5.9	2 5.9	9 26.5	2 5.9	1 2.9	3 8.8	3 8.8	1 2.9	1 2.9	34 100.0
Iターン者	3 7.5	14 35.0	4 10.0	4 10.0	1 2.5	7 17.5	0 0.0	2 5.0	3 7.5	2 5.0	0 0.0	0 0.0	40 100.0
県内流入者	6 8.0	18 24.0	16 21.3	4 5.3	5 6.7	9 12.0	3 4.0	0 0.0	4 5.3	7 9.3	1 1.3	2 2.7	75 100.0
計	39 5.8	139 20.8	99 14.8	49 7.3	25 3.7	95 14.2	36 5.4	10 1.5	85 12.7	74 11.0	14 2.1	5 0.8	670 100.0

（注）上段は度数、下段は構成比である。

図 3-4 移動タイプ別の職種分布（グラフ）

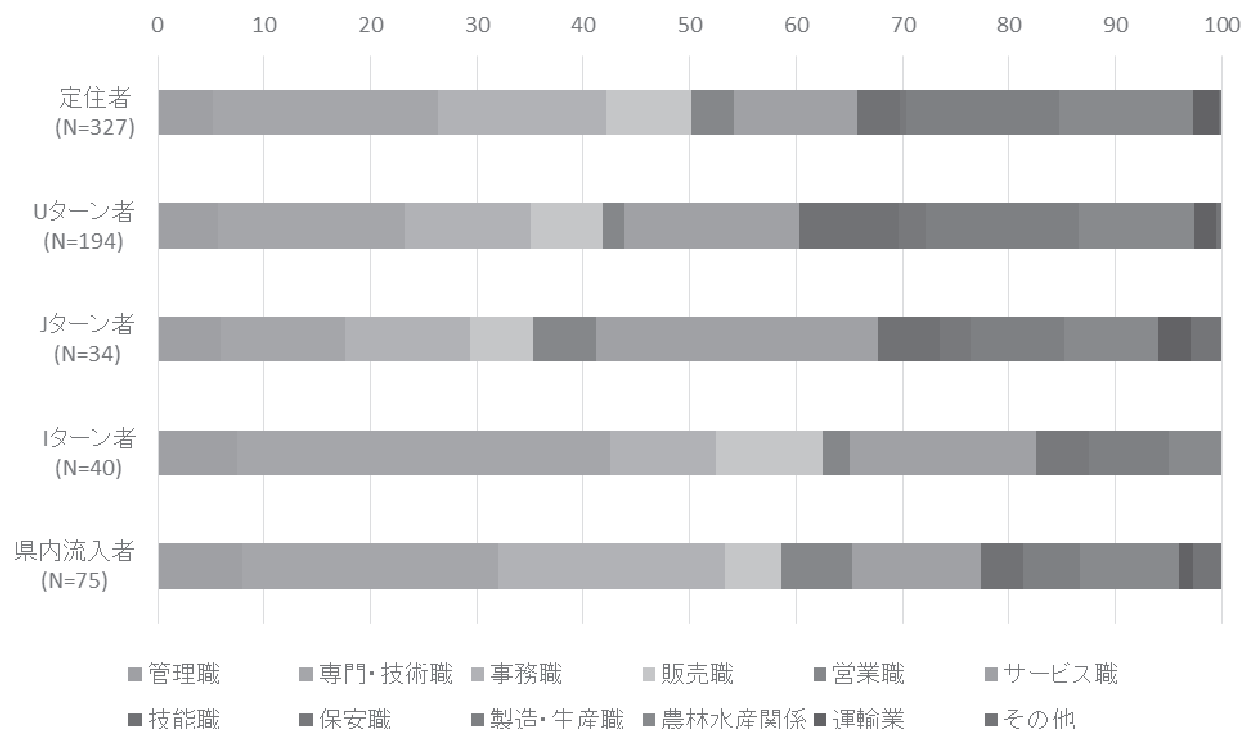


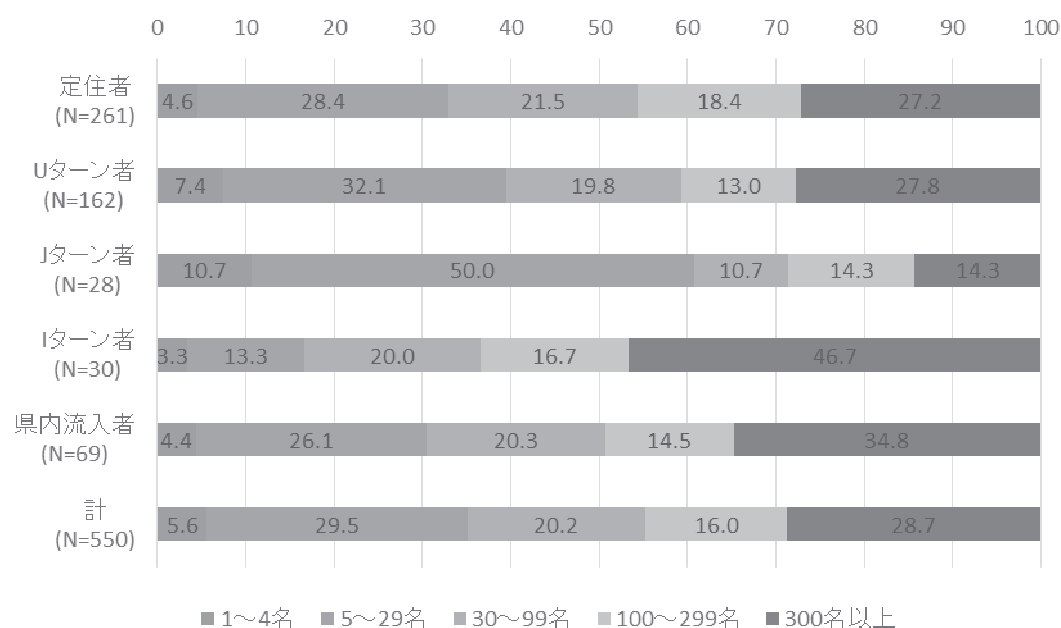
図 3-4 から I ターン者においては、専門・技術職が多く存在していることが注目される。石黒他（2013）で指摘しているように、専門・技術職の場合は地域間の移動に伴う経済的な収益の差がほとんど見られず、技能を生かして比較的自由的な移動ができることがこの結果につながっているように思われる。

また、I ターン者を除く全ての移動タイプにおいて、農林水産業関連の職種が 1 割程度存在していることから、農林水産業がこの地域において重要な基幹産業であることが分かる。

(3) 勤め先の企業規模

移動タイプ別に勤め先の企業規模に違いが見られるのか検討しよう。図 3-5 は移動タイプ別の勤め先の企業規模を示したものである。

図 3-5 移動タイプ別に見た勤め先の企業規模



移動タイプ別に見て、統計的に有意な差は認められない(chi2(16)=20.6146, Pr = 0.194)。Jターン者において、従業員5~29名の企業に勤めている者の割合が高い。また、Iターン者と県内流入者において、従業員300人以上の企業に勤めている人の割合が他の移動パターンと比較して高くなっている。

(4) 収入

年間収入について、移動タイプ別に確認しよう(表3-5、図3-6)。平均値で見ると、高い方からIターン者、Uターン者、県内流入者、Jターン者、定住者の順である。中央値で見ると、高い方からIターン者、県内流入者、Uターン者およびJターン者、定住者の順である。収入の散らばりを測る標準偏差を見ると、Iターン者が最も高く、Jターン者や県内流入者は低くなっている。

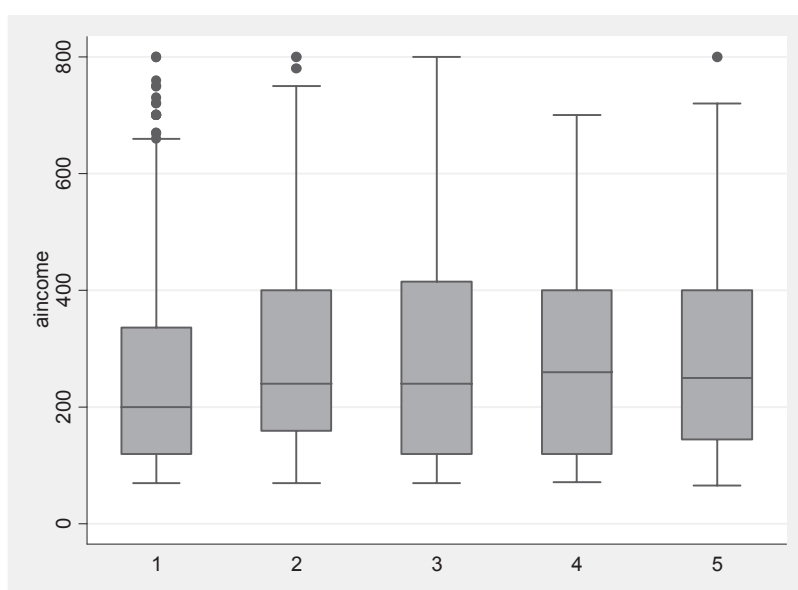
表 3-5 移動タイプ別の収入

(単位: 万円)

	N	平均値	中位値	下位10%点	下位25%点	上位25%点	上位10%点	標準偏差
定住者	304	261.4	200	90	120	325	500	263.9
Uターン者	192	307.9	240	84	140	400	600	296.8
Jターン者	33	284.4	240	84	120	400	700	209.6
Iターン者	39	392.3	260	60	110	460	1000	379.9
県内流入者	71	305.7	250	100	135	400	600	216.7
計	639	289.5	220	84	120	360	600	276.7

定住者と U ターン者を比較すると、平均値も中位値も U ターン者の方が約 40 万円高い。下位ではあまり大きな差はないが、上位に行くほど大きな差となっている。I ターン者の所得は他の移動タイプと比較して平均所得が高くなっている。その大きな理由は、上位 25% 点以上の所得が他のタイプと比較して高くなっているためである。先に見たように、I ターン者の多くが専門・技術職で従事していることも影響していると思われる。一方で、I ターン者の下位 25% 点の所得は他のタイプよりも低いことから、よりハイリスク・ハイリターンとなっていることが分かる。

図 3-6 移動タイプ別の収入（グラフ）



(凡例) 1: 定住者, 2: U ターン者, 3: J ターン者, 4: I ターン者, 5: 県内流入者

(注) 年間収入 60 万円以上 800 万円以下の者に限定して図示している。

太い帯の両端はそれぞれ 25% 点と 75% 点で、その中央にある線は中央値 (50% 点) である。細い線で示された上限と下限は分布の幅を見る目安である。それぞれ 75% 点と 25% 点から四分位レンジ (75% 点と 25% 点の差) の 1.5 倍離れた値に最も近い観測値で定義される。黒い点は外れ値を示す。

(5) 労働時間

移動タイプ別に労働時間を見たものが表 3-6 である。

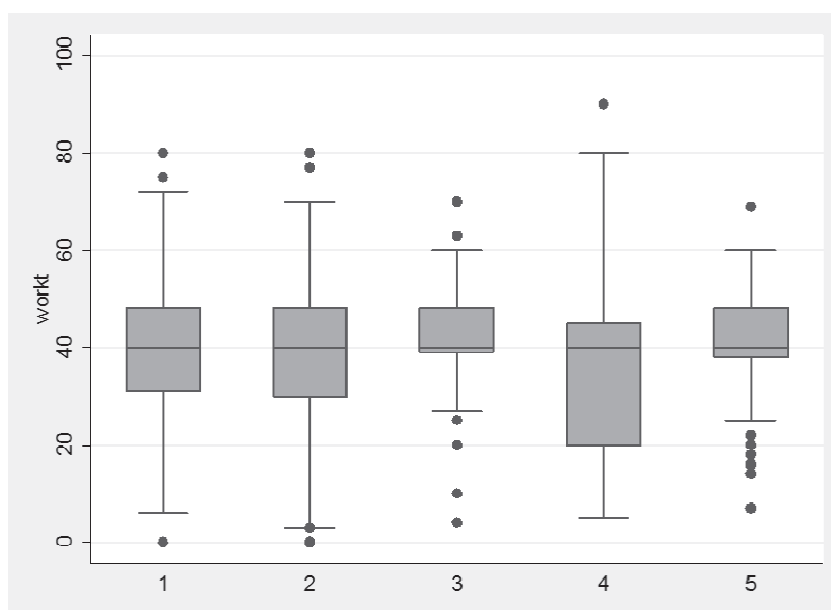
表 3-6 移動タイプ別の労働時間

(単位:時間)

	N	平均値	中位値	下位10%点	下位25%点	上位25%点	上位10%点	標準偏差
定住者	312	39.1	40	17	31	48	55	14.7
Uターン者	195	38.9	40	16	30	48	54	14.9
Jターン者	35	40.0	40	20	39	48	54	13.3
Iターン者	41	36.8	40	15	20	45	60	18.6
県内流入者	74	40.4	40	22	38	48	50	11.3
計	657	39.1	40	18	30	48	54	14.6

労働時間について(図 3-7)、中位値は移動タイプ間で全く同じことから分かるように、タイプ間の大きな違いは見当たらない。平均値で見ると、短い方から I ターン者、U ターン者、定住者、J ターン者、県内流入者の順となった。J ターン者と県内流入者の散らばりが小さいのに対して、I ターン者の散らばりは大きい。

図 3-7 移動タイプ別の労働時間 (グラフ)



(凡例) 1: 定住者, 2: U ターン者, 3: J ターン者, 4: I ターン者, 5: 県内流入者

太い帯の両端はそれぞれ 25%点と 75%点で、その中央にある線は中央値 (50%点) である。細い線で示された上限と下限は分布の幅を見る目安である。それぞれ 75%点と 25%点から四分位レンジ (75%点と 25%点の差) の 1.5 倍離れた値に最も近い観測値で定義される。黒い点は外れ値を示す。

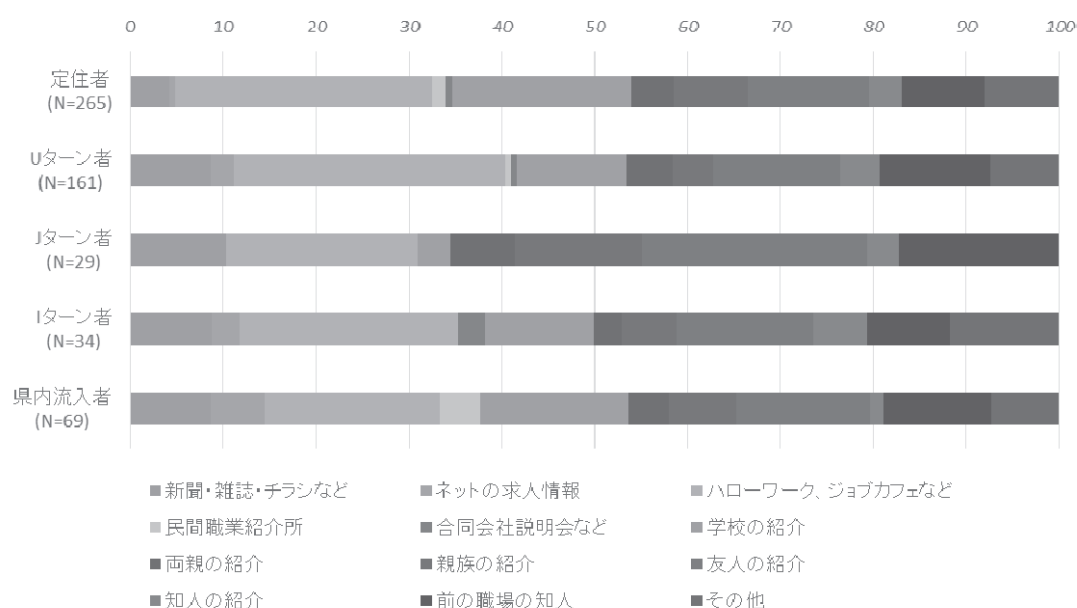
I ターン者の労働時間が比較的短いように見えるが、これは非正規雇用において I ターン者の労働時間が他のタイプより短くなっていることを反映している。先程の収入の分析と

あわせて考えると、Iターン者は収入で見ても労働時間で見ても散らばりが大きいことが分かる。定住者とUターン者は労働時間に大きな違いはないが、収入で見るとUターン者の方が大きいことが確認できる。

(6) 職探しの方法

最後に、移動タイプ別に見て、職探しの方法に違いが見られるのか検討しよう。移動タイプ別に職探しの方法を集計した結果が図3-8である。

図3-8 職探しの方法



移動タイプ間の統計的に有意な差は見られない(chi2(44)=44.8014, Pr = 0.438)。注目されるのは、ハローワークやジョブカフェなどの公的職業紹介所を経由して職を探している割合が全てのタイプにおいて、最も大きいという点であるが、これは地方の大きな特徴となっている。公的職業紹介所に続いて、入職への大きな経路となっているのが、学校の紹介と友人の紹介である。ただし、Jターン者においては学校の紹介の割合は小さい代わりに、友人の紹介の割合が大きい。県内流入者では、ネットや民間職業紹介所の割合がやや大きいという特徴も見られる。両親や親戚などの親族のほか、友人、知人などの縁故による職業紹介も大きな役割を果たしていることが良く分かる。

4. 賃金関数の推計

ここでは、賃金関数を推計して、移動が賃金に与える影響を明らかにする。ここで用いる賃金関数は次のようなものである。

被説明変数は、年収の対数をとったものを用いた。説明変数には、男子ダミー、年齢、年齢の二乗、中卒ダミー、短大・専門学校卒ダミー、大学・大学院卒ダミー、自営業ダミー、非正規社員ダミー、管理職ダミー、専門・技術職ダミー、事務職ダミー、労働時間、Uターン者ダミー、Jターン者ダミー、Iターン者ダミー、県内流入者ダミーを用いた。

推定結果から男性ダミーは正で有意で、年齢と年齢二乗については正と負で一般的な年功的な賃金の推定結果と一致している。教育については、有意な変数が見当たらない。ただし、職種を取り除くと大学・大学院卒が正で有意となっており、職種と強く相関していることがわかる。

このような結果は、この地域においては高学歴者向けの就業機会が不十分であることを示していると思われる。教育投資を十分に回収できるような高学歴者向けの就業の場を確保することが急務であることがよく分かる。他方、職種においては管理職、専門・技術職、事務職ともに係数が正で有意となっており、これらの職種に関しては十分な収入が得られていることがよく分かる。

最後に、移動タイプ別の違いについては、Iターン者ダミーのみが有意で、Uターン者やJターン者、そして県内流入者においては、定住者と収入においては差が見られないことがわかる。序論で述べたように、従来の経済学においては、移動は経済的な便益を伴うものであると考えられてきた。しかし、賃金関数の推定結果からすると、この地域出身者においては、Uターン、Jターンなどが経済的な便益を伴うものではないことが明らかになった。それでは、なぜUターンやJターンを選択するのであろうかその理由については次の章で検討したい。

表 賃金関数			
変数	係数		標準偏差
男性ダミー	0.3460	***	0.0534
年齢	0.0720	**	0.0150
年齢×年齢	-0.0008	*	0.0002
中学卒ダミー	-0.0654		0.1145
短大・専門学校卒ダミー	-0.0637		0.0624
大学・大学院卒ダミー	-0.0068		0.0712
自営業ダミー	-0.1048		0.0727
非正規雇用ダミー	-0.5808	***	0.0604
管理職ダミー	0.6488	***	0.1026
専門・技術職ダミー	0.3929	***	0.0690
事務職ダミー	0.3157	***	0.0701
労働時間	0.0165	***	0.0017
Uターン者ダミー	0.0891		0.0550
Jターン者ダミー	0.0494		0.1069
Iターン者ダミー	0.1680	*	0.0985
県内流入者ダミー	0.0342		0.0768
サンプルサイズ	612		
自由度修正済決定係数	0.5365		

注： *は10%水準、**は5%水準、***は1%水準で有意であることを意味する。

5. 小括

この章では、移動パターン別に仕事と生活実態を比較分析した。第一に注目されるのは、UJIターン者の割合である。Uターン者が28.3%、Jターン者4.8%、Iターン者6.6%で全体の4割弱に上っているという点である。また、県内の他地域からの流入者も含めると全人口の半数は他の地域への居住経験をもっていることがわかる。これは、執筆者たちが予想していたよりもはるかに高い数値となっている。UJIターン者の特徴としては、定住者より高学歴者の割合が高いということがいえる。ただ、就業状況や所得においてはUJターン者と定住者間の統計的に有意な差は見られなかった。他方、Iターン者においては、所得にプラスの影響を与えており、Iターン者の所得が他のタイプより有意に高くなっていることが注目される。

【参考文献】

- 太田聡一（2007）「労働市場の地域間格差と出身地による勤労所得への影響」樋口美雄・瀬古美喜編『日本の家計行動のダイナミズム[Ⅲ]』慶應義塾大学出版会。
- 勇上和史（2010）「賃金・雇用の地域間格差」樋口美雄編『労働市場と所得分配』慶應義塾大学出版会。
- 李永俊（2013）「地域間移動から若者が得る経済的な利益」石黒他『「東京」に出る若者たち—仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房。
- 樋口美雄（1991）『日本経済と就業行動』東洋経済新報社

第4章 U・J・I ターンの理由とそのきっかけ

李 永 俊・杉 浦 裕 晃

1. はじめに

本章では、UJI ターン者と県内の他地域からの流入者に分析対象を絞って、この地域に引っ越ししてきた理由とそのきっかけについて分析を行う。経済学において、地域間の移動は地域間の労働市場の格差と関連して研究が進められてきた。その代表的な理論が、ハリスとドタロ (Harris and Todaro 1970) の「補償賃金仮説 (Compensated wage hypothesis)」である。彼らは低賃金地域の労働者はより高い賃金を求めて高賃金地域へと移動する。高賃金地域では労働供給が増え、賃金が低下し、失業率が上昇する。他方、労働力が流出した低賃金地域では失業率が低下し、賃金が上昇する。その結果、両地域の賃金と失業率は均等化し、地域間の移動が低下すると考えている。このような地域間の移動は地方から都市への一方向の移動を想定していたもので、都市から地方への地方回帰のような現象は含まれていない。

また、日本の地域間移動に関する研究には、太田・大日 (1996)、玄田・大井・篠崎 (2005)、太谷・井川 (2011) などがあり、多くの研究は地域間の経済格差と地域間移動に焦点を当てており、有効求人倍率や平均賃金などのマクロデータを用いて分析を行っているものが多い。また、そのような移動においては、ハリスとドタロモデルと同様、都市部から地方への移動を前提としている研究が主である。

そこで、本章では、都市から地方への移動に焦点を当てて、マクロデータによる分析ではなく、個人の移動選択理由とそのきっかけに注目して分析を行う。このような分析は、移動の理由を、より個人の社会経済生活環境と移住先地域の特性に照らし合わせて分析することが可能となり、特定地域に特化したピンポイントの UJI ターンの推進策を模索する上で欠かすことの出来ない基礎資料となる。本章はそのような役割を果たすことを目的としている。

2. 移動時期

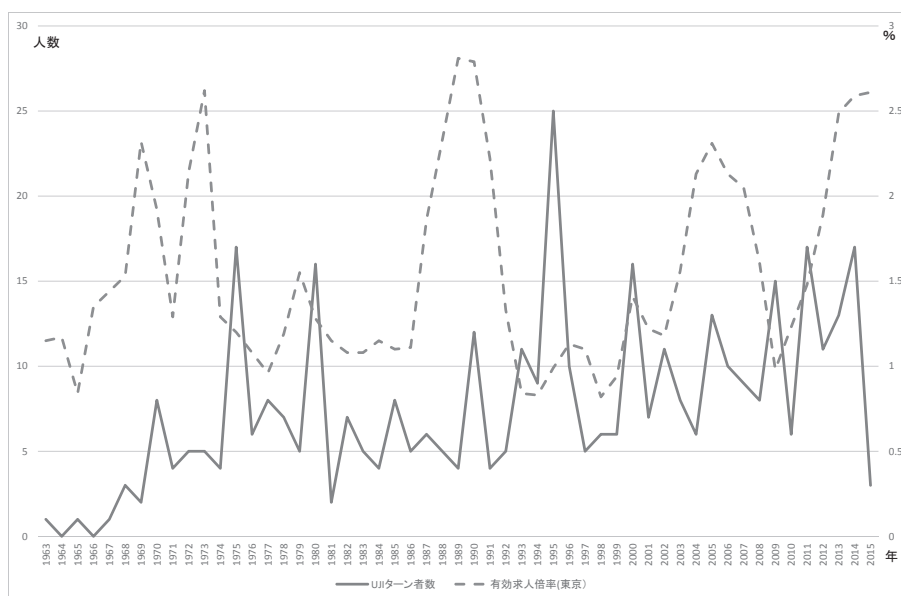
移動の理由を具体的に見る前に、移動がどのような個人のライフステージやマクロ経済環境の中で行われているのかについて、移動時期に注目して見てみる。

図 4-1 は、東京の有効求人倍率とこの地域の U・J・I ターン者数の推移を図示したものである。図からは東京の有効求人倍率が低下したときに U・J・I ターン者数が増加してい

るかのように見えるが、相関係数を見ると 0.0526 で逆相関関係にあるといえない。ほとんど無相関であるといえる。

次に各個人はどのようなライフステージで移動しているのだろうか。図 4-2 は U・J・I ターンの移動時年齢の分布を図示したものである。図から U・J・I ターンの場合も県外へ

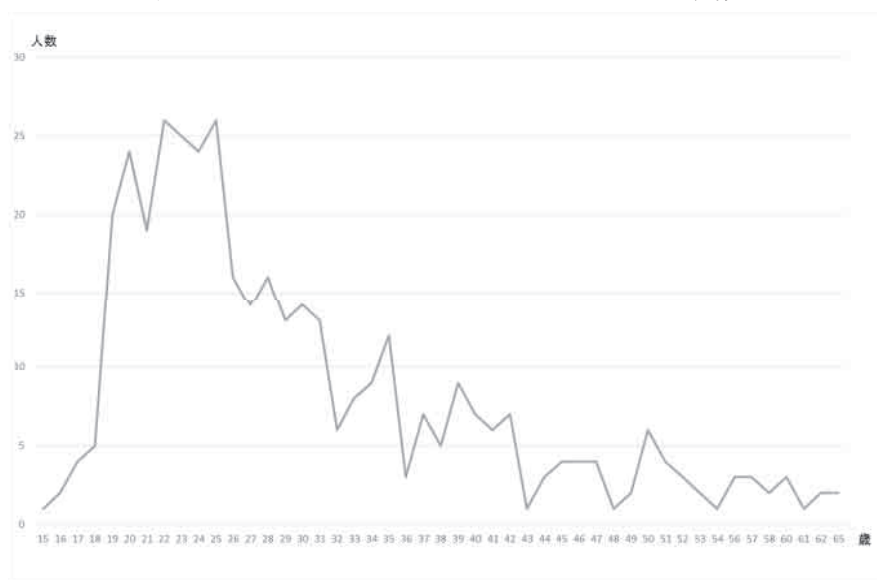
図 4-1 U・J・I ターン者数と有効求人倍率



出典：厚生労働省「職業安定業務統計（一般職業紹介状況）」

注：有効求人倍率は東京の季節調整値で、各年の 10 月の値を用いた。2015 年については 3 月の値である。

図 4-2 ライフステージ別 U・J・I ターン者数



の流出と同様に、18～25歳までの若年期に移動が活発に行われていることがわかる。また、移動は40代前半にほぼ収束し、それ以降の移動はさほど一般的でないことが良くわかる。この点は、U・J・Iターンの促進策を検討するうえで大変重要な点であると思われる。U・J・Iターン促進策のターゲットを絞り込むことは政策の効率性を高めるためにも非常に重要な視点となりうる。

3. 移動元の都道府県

中南津軽地域への移動は、どの都道府県からの移動が多いのかという点について見てみよう。表4-1は移動元の都道府県について、移動タイプ別に比率を見たものである。

表4-1 移動元の都道府県

	Uターン者	Jターン者	Iターン者	県内流入者	計
N	266	46	60	53	425
北海道	4.9	8.7	20.0	13.2	8.5
岩手県	3.8	4.4	8.3	11.3	5.4
宮城県	9.0	6.5	11.7	9.4	9.2
秋田県	4.1	0.0	8.3	9.4	4.9
山形県	0.4	2.2	0.0	1.9	0.7
福島県	0.4	2.2	3.3	1.9	1.2
茨城県	1.1	2.2	1.7	0.0	1.2
栃木県	1.1	4.4	0.0	0.0	1.2
群馬県	1.9	0.0	0.0	0.0	1.2
埼玉県	7.1	6.5	11.7	3.8	7.3
千葉県	5.3	6.5	3.3	1.9	4.7
東京都	33.1	34.8	15.0	24.5	29.7
神奈川県	14.3	15.2	6.7	9.4	12.7
新潟県	1.5	0.0	1.7	1.9	1.4
富山県	0.0	2.2	0.0	0.0	0.2
石川県	0.8	0.0	0.0	1.9	0.7
福井県	0.0	0.0	0.0	1.9	0.2
長野県	0.4	0.0	1.7	0.0	0.5
静岡県	2.6	0.0	5.0	1.9	2.6
愛知県	4.1	2.2	0.0	5.7	3.5
三重県	0.4	0.0	0.0	0.0	0.2
京都府	1.1	2.2	1.7	0.0	1.2
大阪府	1.5	0.0	0.0	0.0	0.9
兵庫県	0.4	0.0	0.0	0.0	0.2
奈良県	0.4	0.0	0.0	0.0	0.2
佐賀県	0.4	0.0	0.0	0.0	0.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

中南津軽地域への移動について移動元の都道府県を見ると、比率の高い順に東京都 29.7%、神奈川県 12.7%、宮城県 9.2%、北海道 8.5%、埼玉県 7.3%、岩手県 5.4%、秋田県 4.9%、愛知県 3.5%となっている。中南津軽地域への移動は、主として首都圏（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）からの移動であり、全体の約 5 割を占めている。続いて多いのが近隣の道県であり、全体の約 3 割を占めている。

I ターン者に注目すると、比率の高い順に北海道、東京都、宮城県・埼玉県、岩手県・秋田県となっている。I ターンは近隣の道県からの者が多いが、東京都や埼玉県などの首都圏からの移動も多い。I ターン以外の移動と比べて、様々な都道府県からの移動が見られる点は、今後の移住促進策を考える上でのヒントになるであろう。

4. U・J・I ターンの理由

ここでは、U・J・I ターンの理由について注目する。表 4-2 は、U・J・I ターン者に限定し、現在の地域に引っ越してきた理由を尋ねたものである。割合がもっとも高いのは、「実家に戻ったから」となっている。実家と関連している項目である「配偶者の実家に同居するから」「実家に近いから」「配偶者の実家に近いから」を合計すると、340 名に上っており、複数回答者が含まれているものの、U・J・I ターン者の 8 割に上っている。その次に多いのは、「仕事場・通学先に近いから」、「配偶者の仕事場・通学先に近いから」が多くなっている。また、その次には自然環境や住居環境と関連しているものが続いている。他方、地域の活動や行事、あるいは地域の魅力などで移動しているものは 1%にも満たない状況である。U・J・I ターンの促進策として、よく用いられるのが地域の魅力をアピールするというセリフであるが、この地域においては、有効な促進策となりうるとはいえないと思われる。

次に、この地域の出身であるか否かによって U・J・I ターンの理由が異なることが大いに予想される。図 4-3 はこの地域の出身者である U・J ターン者、この地域外の出身者である I ターン者、県内他地域からの移動者に分けて、この地域への引越しの理由を尋ねた結果である。

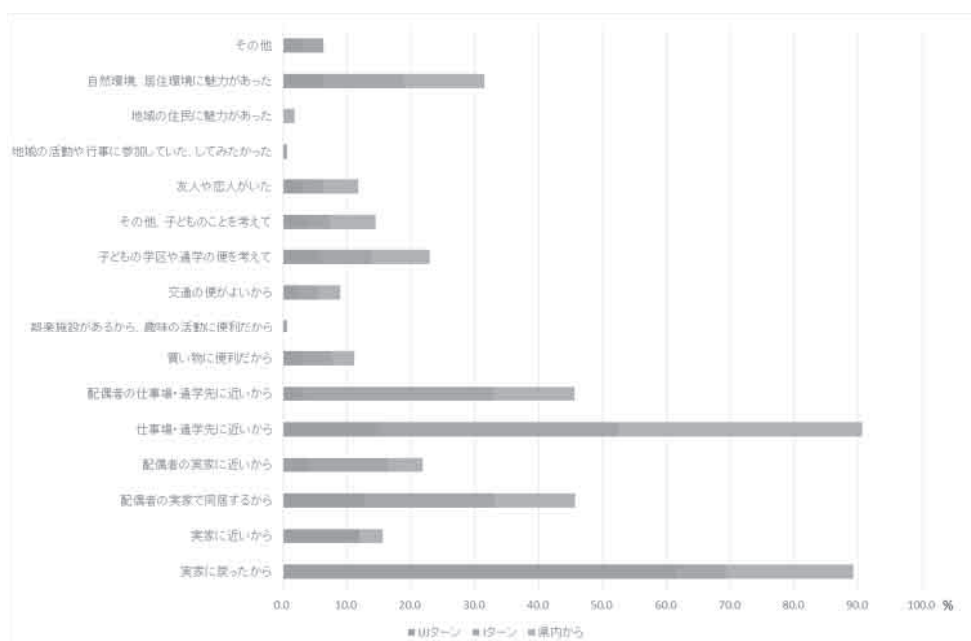
図から出身者か否かによって移動理由が大きく異なることが分かる。この地域の出身者においては、「実家に戻ったから」が最も多く、61.4%に上っている。他方、出身者ではない I ターン者と県内他地域からの流入者は、「仕事場・通学先に近いから」がもっとも多く約 4 割が仕事や就学のことでこの地域への引越しを選択している。その他、注目されるのは、「自然環境・居住環境に魅力があった」が出身者か否かを問わず 1 割弱存在している点である。居住環境の充実が U・J・I ターン者にとって重要な理由となっていることが分かる。

次にこの地域へ引っ越してくることになった直接のきっかけをみてみよう。表 4-3 は引越しの直接のきっかけを集計したものである。U・J・I ターン者の 5%以上が回答したもの

表 4-2 U・J・I ターンの理由

UJIターンの理由	人数	割合
実家に戻ったから	215	48.5
仕事場・通学先に近いから	93	21.0
配偶者の実家で同居するから	62	14.0
実家に近いから	40	9.0
配偶者の仕事場・通学先に近いから	36	8.1
自然環境、居住環境に魅力があった	35	7.9
子どもの学区や通学の便を考えて	29	6.6
配偶者の実家に近いから	23	5.2
その他、子どものことを考えて	19	4.3
友人や恋人がいた	15	3.4
買い物に便利だから	14	3.2
その他	13	2.9
交通の便がよいから	11	2.5
娯楽施設があるから、趣味の活動に便利だから	2	0.5
地域の活動や行事に参加していた、してみたかった	2	0.5
地域の住民に魅力があった	1	0.2

図 4-3 出身者か否かで見た引越し理由



注) 複数回答である。

のみを集めた。一番大きなきっかけは、転勤や配置転換となっており、その他にも就業と関わる理由が高い割合を示しており、U・J・Iターンの直接のきっかけは、この地域内で仕事が見つかったことが移動の決め手となっていることが分かる。その次には、親からの要望や介護などの家族的な理由がきっかけとなっていることが分かる。

引越しを可能にした条件としては、表 4-4 が示しているように、県内の出身者の U・J ターンについては、実家に住むことが出来たことや、家族からの経済的な援助が大きな条件となっている。他方、Iターン者や県内他地域からの移動者については、勤務先の条件が大きな要因となっていることが分かる。これは、U・J・Iターンの理由とも合致している条件となっており、一貫した理由で移動が決定されていることが分かる。

表 4-3 引越しの直接のきっかけ

直接のきっかけ	(単位: %)		
	UJターン	Iターン	県内から
家族が怪我や病気をした	7.6	3.2	3.9
家族の介護が必要になった	4.8	9.5	3.9
特に問題はないが、親に実家に戻るよう言われた	15	3.2	11.5
自分が結婚した	4.8	27	3.9
学校を卒業した	11.2	3.2	15.4
今の地域、またはそこから通える範囲に就職した	8.3	4.8	11.5
転勤や配置転換	15.3	33.3	34.6
転職先が青森県内で見つかった	7.6	11.1	15.4
仕事を自分から辞めた	25.5	6.4	7.7
解雇された／契約が切れた	6.7	1.6	1.9

表 4-4 引越しの条件

可能にした条件	(単位: %)		
	UJターン	Iターン	県内から
実家に住むことが出来た	65.8	12.7	35.9
実家以外に、住む家や土地があった	11	12.7	13.2
家族から、生活について援助が受けられた	11.6	14.5	5.7
引っ越すことについて、家族の理解があった	10.3	11.1	17
勤務先に、支店や支部があった	12.6	30.2	28.3
転職して、定職に就く見込みがあった	15	14.3	9.4
定職に就けなくても、生活していける見込みがあった	7.3	6.4	3.8

5. 移動にともなう変化

ここでは、移動によって収入にどのような変化が現れているのかを確認する。表 4-5 は、「この地域に引っ越してくるときに収入の変化がありましたか」という問いへの回答を移動タイプ別に集計したものである。まず注目したいのは、全ての移動タイプにおいて、収入が減ったと回答した者の割合が、増えたと回答した者の割合よりも圧倒的に多いという事実である。このような結果は、この地域の賃金水準が他の地域に比べ低くなっていることに起因していると思われる。また、移動タイプ間の差をみると、この地域出身者である U・J ターン者のほうが I ターン者や県内他地域からの流入者より所得が減少している人の割合が高いということである。U・J ターン者の多くは家族の事情によって移動を選択するケースが多いため、収入の減少を覚悟の上で移動を選択している実態がうかがえる。

表 4-6 は、移動元の都道府県別に収入の変化を見たものである。首都圏からの移動者の過半数以上が「かなり下がった」と回答しており、地域間所得格差が大きい地域間の移動には大きな犠牲が伴うことが改めて示された。その一方で、近隣の道県からの移動者については多くが「ほとんど変わっていない」と回答しており、近隣間の移動においては収入の変動も大きくならないことが分かる。

そのような収入の変化は、生活満足度においても現れている。表 4-7 は、「あなたは、生活全般に満足していますか、それとも不満ですか」の回答を移動タイプ別に集計したものである。表から「満足している」と回答した者が U ターン者で少なくなっていることが分かる。また、「不満だが、これ以上はあきらめている」の割合においては、県内の出身者の割合が高くなっている。本県の所得水準は、戦前から続いている傾向で必ずしも高いとは言えず、本県出身者の多くにあきらめがうかがえる結果となった。

表 4-5 移動と収入の変化

収入の変化	(単位: %)			
	Uターン	Jターン	Iターン	県内から
かなり上がった	5.5	2.6	1.9	4.4
少し上がった	2.1	2.6	13.0	4.4
ほとんど変わっていない	24.4	23.1	29.6	42.2
少し下がった	18.5	18.0	18.5	20.0
かなり下がった	49.6	53.9	37.0	28.9

表 4-6 移動元の都道府県と収入の変化

	N	かなり 上がった	少し 上がった	ほとんど 変わって いない	少し 下がった	かなり 下がった
北海道	25	8.0	8.0	52.0	16.0	16.0
岩手県	22	4.6	0.0	59.1	13.6	22.7
宮城県	32	6.3	3.1	50.0	15.6	25.0
秋田県	20	0.0	5.0	50.0	30.0	15.0
山形県	3	33.3	33.3	0.0	0.0	33.3
福島県	5	0.0	40.0	20.0	20.0	20.0
茨城県	5	0.0	0.0	60.0	0.0	40.0
栃木県	4	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
群馬県	5	20.0	0.0	0.0	20.0	60.0
埼玉県	26	0.0	3.9	19.2	23.1	53.9
千葉県	18	0.0	5.6	22.2	16.7	55.6
東京都	103	4.9	3.9	19.4	19.4	52.4
神奈川県	48	6.3	0.0	12.5	22.9	58.3
新潟県	4	0.0	0.0	25.0	0.0	75.0
石川県	3	0.0	33.3	33.3	0.0	33.3
静岡県	11	0.0	9.1	18.2	9.1	63.6
愛知県	13	0.0	0.0	0.0	23.1	76.9
京都府	3	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
大阪府	4	25.0	0.0	25.0	25.0	25.0
計	361	4.4	4.2	26.9	18.6	46.0

(注) 回答者が3以上の都道府県のみを示している。したがって、表中の各都道府県の回答者数を足しても合計に一致しない。

表 4-7 移動タイプ別生活満足度

	(単位: %)			
生活全般の満足度	Uターン	Jターン	Iターン	県内から
満足している	36.3	44.4	56.9	49.1
不満だが、これ以上はあきらめている	36.7	37.8	23.1	35.1
不満なので、なんとか改善しようとしている	27.0	17.8	20.0	15.8

移動元の都道府県によって、生活満足度が変わるのか見たものが表 4-8 である。近隣の北海道と秋田県からの移動者はおおむね生活満足度が高いことが分かる。首都圏からの移動について、埼玉県からの移動者は生活満足度が高い。最も数が多い東京都からの移動者については、満足している者が 44.4%、「不満だが、これ以上はあきらめている」者が 30.7%、「不満なので、なんとか改善しようとしている」者が 25.0%となっている。やや気になるのは、千葉県および神奈川県からの移動者の生活満足度は低く、反対に「不満だが、これ以上はあきらめている」者の割合は高いという点である。同じ首都圏からの移動者でも、生活満足度の面では温度差が見られるようである。

表 4-8 移動元の都道府県と生活満足度

	N	満足して いる	不満だが、 これ以上は あきらめて いる	不満なの で、なんと か改善しよ うとしている
北海道	36	61.1	16.7	22.2
岩手県	23	43.5	34.8	21.7
宮城県	38	42.1	36.8	21.1
秋田県	22	59.1	18.2	22.7
山形県	3	66.7	0.0	33.3
福島県	5	40.0	40.0	20.0
茨城県	5	60.0	20.0	20.0
栃木県	5	20.0	60.0	20.0
群馬県	5	0.0	60.0	40.0
埼玉県	29	51.7	37.9	10.3
千葉県	20	35.0	55.0	10.0
東京都	124	44.4	30.7	25.0
神奈川県	54	37.0	40.7	22.2
新潟県	6	33.3	33.3	33.3
石川県	4	50.0	25.0	25.0
静岡県	11	36.4	27.3	36.4
愛知県	14	28.6	42.9	28.6
京都府	5	20.0	40.0	40.0
大阪府	4	25.0	50.0	25.0
計	421	43.7	33.5	22.8

(注) 回答者が3以上の都道府県のみを示している。したがって、表中の各都道府県の回答者数を足しても合計に一致しない。

6. 小括

この章では、UJI ターン者に分析対象を絞って、移動の動機ときっかけについて分析を行った。

最初に注目したのは移動の時期であった。事前の予測とは異なり、景気動向を示す有効求人倍率と UJI ターンとは統計的に認められる逆相関関係は見られなく、流出の動向とは異なり、景気動向とは無関係に UJI ターンが行われていることがわかった。また、UJI ターンの主な理由としては、「実家に戻ったから」などの家族関係の理由と答えた人の割合が高く、次に「仕事場・通学先が近いから」などの仕事関連の理由となっていることが興味深い。一方、UJI ターンの決め手となった直接のきっかけは、「転勤や配置転換」や「仕事を自分から辞めた」などの仕事関連のきっかけが直接的なきっかけになっていることが分かった。また、UJI ターンを可能にした条件としては、UJ ターン者は実家に住むことが出来た」をあげているのに対し、I ターン、県内の他の地域からの流入者は「勤務

先に、「支店や支部があった」を挙げており、出身地であるか否かによって移動の条件が異なっていることが良くわかる。本章から、UJI ターン希望者の属性に応じたきめ細かな支援政策が求められていることが良くわかる。注目されるのは、就業先が決まらないまま移動したものが4割に上っている点である。UJI ターンの促進策などにおいては、働く場作りが何よりも重要であると議論される場合が多いが、移動しているものにとっては移動決定の最重要要因にはなっていないことがデータから分かる。

【参考文献】

太田聡一・大日唐史（1996）「日本における地域間労働移動と賃金カーブ」『日本経済研究』No.32、pp. 46-59。

大谷剛・井川静恵（2011）『非三大都市圏へのU・Iターンの促進とU・Iターン者を活用した内発的雇用創出活性化に係る研究』労働政策研究報告書、No. 134、労働政策研究・研修機構。

玄田有史・大井方子・篠崎武久（2005）「地域別に見た労働市場－労働移動と賃金格差の視点から」『経済社会の構造変化と労働市場に関する調査研究報告書』、雇用能力開発機構・統計研究会。

Blanchflower, D. and A. Oswald (1994) *The wage curve*, Massachusetts: MIT Press.

Harris, J.R. and M. P. Todaro(1970) "Migration, Unemployment and Development: A two sector analysis," *American Economic Review* 60: 126-142.

第5章 UJI ターン者の社会関係

石 黒 格

1. はじめに

この章では、県外出身者ならびに県外での生活を経験したUターン者と、県内に留まった県内定住者の社会関係について、結果の概要をまとめる。ここで検討を行う視点は4つである。

第一の視点は、県内出身者の、地域ネットワークである。石黒(2013)が明らかにしたように、若い世代に限定するなら、東北出身者は高校以前に知り合った、主として出身地近辺で形成される社会関係を強固に維持しており、出身県内に留まり続けた者と、Uターン者とで、関係性は量的には等しい石黒(2012)。しかし、学校を離れてからの期間が長くなる年長者でも、同じことが言えるとは限らない。Uターンまでに、どれだけの期間を県外で過ごすかは異なり、長期間を県外で過ごした者は、地元での、青年期に形成した社会関係を失いがちであるかもしれない。本調査の回答者は若年者に限られていないため、県内の幅広い年代に対して調査を行ったときに、それでもなお、出身地近辺で形成される「地元関係」が維持されているのかを検討できる。

第二の視点として、上記の第一の視点と関係しつつ、回答者の地域への社会的統合を考える。特に重要視するのは、Uターン者を含む、県外からの流入者の社会的統合である。豊かでポジティブな社会関係は、人の幸福感の源泉であるし、それが得られない地域は、居住地域として魅力的でもない。

Iターン者やJターン者は、第一の視点で検討される、学校に由来する関係を地域にはもたないだろうが、地域活動やボランティアを通して、地域社会に統合されていく道は存在する。すでに述べたように、地域の活性化やボランティア活動などで、県外出身者の果たす役割が非常に大きいことはよく知られているが、そうした県外出身者の果たす機能も、ある程度は、流入者が地域社会に統合されていてこそ、意味を持つものだろう荻谷(2014)。地域の活力を考えたとき、流入者がどれだけの期間をかけて、どのような経緯で地域社会に統合されるのかを検討する意義は大きい。

第三の視点は、ここまでとは逆の、広域のネットワークである。「弱い絆の強さ(Granovetter(1973))」や、「橋渡し型紐帯(Putnam(2000); Putnam, Leonardi, & Nanetti(1992))」を有する者は、より多様な情報を獲得し、流通させることができるという点で、個人的に利益を得るだけでなく、社会集団に外部から異質な、それゆえに有益な情報をもたらすことができる。県外での生活経験のある者が、そうした経験のない

者よりも、県外に社会関係を有していることは、直観的には予測できる。そして、全国的な傾向として、地域外部からの流入者が、様々な地域活動の主体となりやすいことが明らかになっている(荻谷(2014); 狭間 & 吉川(2014))。このことから、県外生活経験のある者は、物理的距離という意味で、より拡散したパーソナル・ネットワークを形成しており、より多くの橋渡し型紐帯を持つと予測される。

しかし、ここでも上記の出身地ネットワークと同様の疑問がある。遠距離の関係は接触頻度を保ちにくく、従って、関係を維持するのは難しい(Burt(2002); Festinger, Schachter, & Back(1950); Hipp & Perrin(2009); Kossinets & Watts(2009); Mok, Wellman, & Carrasco(2010); Pollet, Roberts, & Dunbar(2013); Roberts & Dunbar(2011))。それは、情報通信技術が発達した近年でも、変わることはない(Mok et al.(2010))。出身地域において、強固な社会関係を築いている東北出身者でさえ、首都圏に移動することで、高校以前の、出身地での関係は減少するのである(石黒(2012))。

もちろん、県内に移動して日が浅い人々は、県内での社会関係が十分ではなく、そのために県外の、長距離の社会関係を維持している可能性がある。しかし、移動後、長い時間が経過した後にも、そうした社会関係が維持されるのかは明らかではない。人が維持できる社会関係の量には上限があるから(Lewis, Rezaie, Brown, Roberts, & Dunbar(2011); Roberts, Wilson, Fedurek, & Dunbar(2008))、県内での社会関係が構築されていくに連れて、県外の社会関係は減少していく可能性がある。

第四の視点は、これまでと重複する点もあるが、ソーシャル・サポートの有無である。ソーシャル・サポートは、人の幸福感や健康の源泉である。県外からの流入者が、十分なサポートを受けられる状況にあるのか、検討する必要がある。また、現在の幸福感、生活満足度との関係を通して、どのようなサポートが県外からの流入者に対して有効なのかを検討する。

本調査では、社会関係について、出会ったきっかけ別の人数、近距離／遠距離のサポート・ネットワーク、地域的な集団への参加、SNSの利用、携帯情報端末の「アドレス帳」への登録人数を回答者に尋ねている。これらの質問項目の分析から、以上の観点について概観する。

2. 地元関係は強固か

まず、回答者が出身地近辺で形成した社会関係を「地元関係」と捉え、その有無や地元関係からなるネットワークのサイズを検討する。何をもちいて地元関係と呼ぶかには議論がありうるが、ここでは、高校時代までに知りあった他者を、地元関係と定義する。

本調査では、国勢調査などの大規模な官公庁調査での定義にならない、卒業した中学校の所在地を、回答者の出身地と定義する。そのため、必然的に、中学校と、それ以前に

知りあった知人は、地元関係に含まれることになる。もちろん、私立学校に通学していれば、中学校はおろか、小学校でさえ、居住地の近隣にあるとは言えない。しかし、私立学校の受験が多い一部地域を除けば、ほとんどの日本人は現在でも公立の中学校を卒業するし、本研究が対象とする成人、特に中高年にとっては、私立小学校、中学校への進学者は、現在よりもさらに少数派だった。転校などによる居住地と通学先の変化はありうるため、測定誤差は生じるが、全体像を把握するのに問題はないと考えられる。

高校時代に知りあった知人は、中学以前に知りあった相手よりも、地理的には拡散しがちである。とはいえ、大学や職業に就いてから知りあった相手と比較すれば、その拡散の度合いは小さい。青森県の出身者を視野に入れた場合には、大都市の出身者よりも、高校の通学者が地理的に狭い範囲に集中する程度、同じ中学から進学した同級生が多い程度が強い。そこで、高校での知り合いも、地元関係として扱う。その上で、地元関係の有無と、地元関係からなるネットワーク（地元ネットワーク）のサイズを検討する。

（表 5-1～3）に、小学校以前、中学校、高校で知りあった、「今でも仕事以外の理由で月に一度は会ったり連絡したりする人」の人数を順にまとめた。この関係性の定義は、第1回、第2回 EPRC 移動調査でも用いられたもので、私的で、かつアクティブな社会関係を抽出するために用いられている。そこで、以下ではこの関係性をアクティブ友人と呼ぶ。

（表 5-1）からわかるように、小学校のアクティブ友人数は、すべてのグループで p25 がゼロであり、およそ、4人に1人はこうした社会関係がない。存在確率を見てもわかるように、多いグループでは半数程度は、小学校のアクティブ友人がいない。しかし、後に見るように、他のきっかけで知り合った関係に比べれば、小学校のアクティブ友人は多いと言える。特に、郊外定住と郊外Uターン、つまり、弘前郊外の自治体出身で、現在も同じ自治体に居住している回答者では、メディアンまでが1であり、少なくとも半数の回答者は1人以上を有している。

逆に、少ないのは中南津軽内移動、Jターン、Iターン、その他の県内出身者であり、弘前定住と弘前Uターンが中間に落ちる。つまり、出身自治体に住んでいない場合には、小学校のアクティブ友人は少ない。また、都市的な環境である弘前よりも、郊外地域で、もともと地縁的な小学校を介した社会関係が多いことになる。

表 5-1 小学校のアクティブ友人数

	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	回答者数
弘前定住	0.00	0.00	2.00	3.00	1.23	0.41	209
郊外定住	0.00	1.00	2.00	5.00	1.80	0.52	122
中南津軽内移動	0.00	0.00	0.00	2.00	0.49	0.24	83
弘前Uターン	0.00	0.00	1.00	3.00	0.96	0.31	143
郊外Uターン	0.00	1.00	3.00	5.00	2.28	0.51	72
Jターン	0.00	0.00	0.00	3.00	0.79	0.21	43
Iターン	0.00	0.00	0.00	2.00	0.48	0.17	52
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	2.00	0.54	0.24	104
合計	0.00	0.00	1.00	3.00	1.13	0.36	828

このパターンは、弘前Uターンと郊外Uターンとの差が小さいことを除けば、中学校のアクティブ友人でも同じである（表 5-2）。冒頭で述べたように、近年でこそ、地域外の中学校に進学する者もいるが、歴史的に見れば、出身地近辺の公立学校に通った者が大半であり、小学校同様、中学校で形成した社会関係は地縁的なものになる。そのために、出身自治体に留まっているほうが、関係を維持しやすいのだと考えられる。ただし、IターンとJターンでも、p90は弘前定住とほぼ同じか、上回る。少数の、おそらくは社会関係についてアクティブな回答者について言えば、Iターンであっても、中学時代に得た社会関係を維持している。

表 5-2 中学校のアクティブ友人数

	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	回答者数
弘前定住	0.00	0.00	2.00	3.00	1.18	0.36	206
郊外定住	0.00	0.00	2.00	5.00	1.91	0.47	119
中南津軽内移動	0.00	0.00	1.00	3.00	0.70	0.32	87
弘前Uターン	0.00	0.00	2.00	5.00	1.40	0.39	145
郊外Uターン	0.00	0.50	2.00	4.00	1.54	0.50	70
Jターン	0.00	0.00	0.00	4.00	0.89	0.23	44
Iターン	0.00	0.00	0.00	3.00	0.67	0.24	54
その他の県内出身者	0.00	0.00	1.00	2.00	0.65	0.27	103
合計	0.00	0.00	2.00	3.00	1.19	0.36	828

一方、高校でのアクティブ友人では、p50がほぼすべてのグループでゼロとなり、半数程度の回答者には、高校時代から続くアクティブ友人はいないことがわかる（表 5-3）。ただし、p75とp90の値は小中のアクティブ友人数を上回る場合がほとんどで、そのために平均値は全体として高くなっている。

中学校以前のアクティブ友人数と比較して、グループ間の差は小さくなる。弘前定住と郊外定住のパターンの分布がおおよそ等しくなり、弘前Uターンのほうが、郊外Uターンよりも、値が大きくなる傾向にある。おそらくは、進学先、通学先が弘前市内にあ

った回答者が含まれるためだろう。その他の県内出身者では、小中よりも多くのアクティブ友人を維持していることも、同じ理由によると考えられる。このグループには中南津軽地域ではないものの、弘前市周辺の、都市度の低い自治体の出身者が含まれるからである。

全体として、小学校から高校までに知り合ったアクティブ友人の数は少ない。ほとんどのグループで、少なくとも半数が、高校以前に知りあったアクティブ友人がいない。アクティブ友人がいないという回答に注目すると、回答者全体の小学校以前で 64.55%、中学校で 63.88%、高校で 57.45%と、いずれも過半数である。この結果は、石黒(2012)と一貫しているが、より「いない」とする回答が多い。加齢とともに、幼少から若年期の友人関係は、少なくとも接触頻度という意味では減少すると考えられる。

表 5-3 高校のアクティブ友人数

	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	回答者数
弘前定住	0.00	0.00	2.00	5.00	1.69	0.48	199
郊外定住	0.00	0.00	2.00	5.00	1.46	0.44	109
中南津軽内移動	0.00	0.00	2.00	4.00	1.29	0.46	82
弘前Uターン	0.00	0.50	3.00	5.00	1.72	0.50	138
郊外Uターン	0.00	0.00	2.00	3.00	1.28	0.44	64
Jターン	0.00	0.00	1.00	4.00	1.08	0.41	39
Iターン	0.00	0.00	1.00	3.00	0.75	0.26	53
その他の県内出身者	0.00	0.00	2.00	3.00	1.22	0.38	103
合計	0.00	0.00	2.00	5.00	1.43	0.44	787
高校に通った経験のある者のみ							

表 5-4 高校以前のアクティブ友人数のゼロ過剰ポアソン回帰分析

	小学校以前		中学校		高校	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン						
弘前定住(ref)						
郊外定住	-0.24	0.20 *	-0.21	0.32 **	0.11	-0.10
中南津軽内移動	0.32	-0.45 *	-0.06	-0.38 +	-0.02	-0.14
弘前Uターン	0.23	-0.25 +	-0.06	0.05	-0.19	-0.05
郊外Uターン	-0.22	0.29 *	-0.33 +	0.04	0.01	-0.14
Jターン	0.67 ***	0.26	0.55 *	0.31	-0.01	-0.41 *
Iターン	0.77 ***	-0.12	0.23	-0.30	0.48 *	-0.29
その他の県内出身者	0.39 +	-0.56 **	0.19	-0.38 *	0.19	0.00

年齢	0.02 ***	0.00	0.01 **	0.00	0.01 **	-0.01 **
性別(女性=1)	0.10	-0.39 ***	0.10	-0.18 *	-0.20 +	-0.10

学歴						
高校(ref)						
専門・短大・高専	0.08	0.24 *	0.15	0.24 **	0.15	0.04
大学・大学院	-0.09	0.35 ***	-0.16	0.23 *	0.22	0.18 +

就業形態						
無職(ref)						
正規雇用	0.26 +	-0.02	0.05	-0.10	0.02	-0.04
非正規雇用	0.06	0.21 +	-0.02	0.27 *	0.05	-0.01
自営業・自由業	-0.44 *	-0.18	-0.51 **	-0.03	-0.18	0.36 **

配偶者あり	-0.16	0.19 +	-0.10	0.28 ***	-0.17	0.17 +
子供あり	0.05	-0.06	0.05	-0.35 ***	0.13	-0.18 +
定数	-0.93 **	0.86 ***	-0.35	1.24 ***	-0.51 +	1.62 ****

尤度比カイ二乗値(16)	81.45***		78.44***		43.85***	
Vuongテストのz値	7.75***		7.45***		7.99***	
回答者数	787		786		752	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

以上のパターンの有意性を、性別、年齢、学歴、就業形態、婚姻状態、子供の有無を統制して検討したのが（表 5-4）である。目的変数がカウント変数であり、しかもゼロの値が多いため、ゼロ過剰ポアソン・モデル **zero-inflated poisson model** を用いた。このモデルは、目的変数がゼロとなる確率を予測するプロビット回帰分析¹の推定式と、目的変数の値（カウント数の条件付き期待値）を予測するポアソン回帰分析の推定式を同時推定することで、分析におけるゼロ過剰の問題を低減する。また、セレクション・モデルと同様に、各説明変数について、それぞれのきっかけで知り合ったアクティブ友人がいないことへの予測力と、人数を増やすことの予測力の双方を推定できる。

また、（表 5-5）には推定された回帰式を用いて算出した、移動パターン以外の説明変数が平均値をとるときの、アクティブ友人の平均数を示した。また、弘前定住と郊外定住のそれぞれを参照カテゴリとしたときの、各グループとの平均値の差を示した。グループ間の差は、主としてこの予測値を用いて解釈する。

表 5-5 高校以前のアクティブ友人数の存在確率と期待カウント数の予測値

移動パターン	小学校						中学校						高校					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測
弘前定住	0.57	1.25	ref	ref		-	0.63	1.10	ref	ref		---	0.52	1.57	ref	ref		
郊外定住	0.47	1.86		+	ref	ref	0.56	1.81		+++	ref	ref	0.55	1.31			ref	ref
中南津軽内移動	0.69	0.57		--	+++	---	0.61	0.79		-		---	0.52	1.34				
弘前Uターン	0.66	0.77		-	+++	---	0.60	1.22				--	0.45	1.71				
郊外Uターン	0.48	2.00		++			0.50	1.53		-		--	0.52	1.33				
Jターン	0.80	0.75	+++		+++		0.81	0.76	++		+++		0.52	1.04		--		
Iターン	0.83	0.44	+++		+++		0.71	0.63			+	---	0.70	0.73	++			
その他の県内出身者	0.71	0.48	+	---	+++	---	0.69	0.61		--	+	---	0.59	1.32				

＋と－の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。
0予測の＋は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

小学校以前のアクティブ友人は、JターンとIターンで、弘前定住者よりもゼロである確率が高い。（表 5-1 や 5）から読み取れる、これらのグループの小学校のアクティブ友人数の少なさは、小学校からの友人関係が、アクティブさを完全に失っている回答者が多いという事実起因することがわかる。つまり、アクティブ友人が存在する回答者に限れば、弘前定住と比較して、アクティブ友人数が少ないわけではない。孤立はしやすいが、そうでなければ、定住者と同等の関係性を有するのである。出身自治体と居住自治体の距離や都市度といった環境要因の他に、関係性維持の動機などによると考えられる。この傾向は郊外定住と比較したときも同様である。

その他の県内出身者は、ゼロとなる確率はやや高いだけだが、人数が少ない。つまり、

¹ ゼロの確率は、ロジスティック回帰分析でも推定可能だが、ここでは、より仮定として自然なプロビットを用いる。

小学校からのアクティブな関係を失いやすく、完全に失っていないとしても、その数は少ない。

弘前Uターンと中南津軽内移動は、小学校以前のアクティブ友人数が弘前定住よりも少ない。郊外定住を参照カテゴリとしたときには、中南津軽内移動、弘前Uターン、その他の県内出身者のいずれとも有意な差があり、これらのグループは、郊外定住と比較すると、小学校のアクティブ友人が1人もいないという確率が高く、いたとしてもその数が少ない。郊外定住と郊外Uターンの間には有意な差はなく、郊外出身者が、出身自治体で居住している場合には、小学校からの友人関係が、アクティブな状態に維持される傾向が強い。

中学でのアクティブ友人数では、ゼロとなる確率について、弘前定住と有意な差があるのはJターンだけで、有意に高い。人数では、郊外定住のほうが弘前定住よりも有意に多い。

郊外定住を参照カテゴリとしたときには、多くの係数が有意となる。ゼロとなる確率では、異なるのはJターンだけだが、人数を予測したときには、Jターン以外のすべてのグループよりも、郊外定住のほうが多いという結果になる。弘前市郊外で定住する回答者は、県内で移動した回答者よりも、中学校で形成したネットワークをアクティブに、より大きなサイズのまま保っていると言える。郊外Uターンは、ここでは友人数が郊外定住よりも少なくなるが、その差はもともと小さい。

全体として、小中ともに、郊外定住の場合にアクティブ友人数が多いことになる。ローカル性の強い、かつ古い関係は、都市度の低い地域に定住しているか、地域を一度は出ても、同じ自治体に戻っている人々でアクティブさが保たれやすい。EPRC第2回移動調査の結果からは、これが東北出身者全体の傾向と見られていたが石黒(2012)、中南津軽地域内部で詳細に見たときは、特に都市度の低い地域に、強くこうした特徴が見られることになる。弘前市は、その郊外と比較すれば、都市的なのである。

逆に、高校のアクティブ友人数には、移動パターンによる差がほとんどない。弘前定住を参照カテゴリとしたとき、IターンとJターンで少ないのみである。両者のメカニズムが異なることが、(表5-4と5)からわかる。県外から流入したIターンでは、関係性がまったくないという確率が高いが、関係性があれば、ネットワークのサイズは変わらない。一方、県外に出て、出身地とは異なる自治体にJターンしたときには、関係性が完全に失われることはないものの、ネットワークのサイズが小さくなる。

小学校、中学校に見られた郊外定住の優位性が失われたのは、高校進学時には、県内でも進学先がより地理的に拡散するためだと考えられる。また、進学先として弘前市内の高校を選ぶ傾向が、中南津軽地域全域にあるのも、弘前定住者と郊外定住者の差を小さくする要因だろう。中南津軽内移動者でもアクティブな社会関係が維持されるのも、進学先が弘前市や青森市となっているケースがあることが、1つの要因となっていると考えられる。

3. 居住年数と地元関係

以上の分析からは、中南津軽地域、特に郊外地域では、県外に転出した経験がある者でも、高校以前、特に中学以前に知りあった地元関係が維持されやすいことがわかる。続いて、この傾向が、居住年数と関わりがあるのかを検討しよう。郊外定住と郊外Uターンとに有意な差がないということは、県外転出後にUターンした人々が、地元関係に再び組み込まれるということの意味している。では、その再組み込みは速やかになされるのだろうか、時間がかかるのだろうか。それは、弘前市の出身者とどのように異なるのだろうか。

表 5-6 に中南津軽地域外での生活の経験者に対象を限定した、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を示した。説明変数に現住地の居住年数と、移動パターンと居住年数の交互作用を追加することで、移動パターンによって、居住年数の効果が異なるのか、逆に、居住年数によって、移動パターンの効果が異なるのかを検討している。

表 5-6 現住地への転居からの年数と移動パターンの地元関係への効果

	小学校以前		中学校		高校	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン						
弘前Uターン(ref)						
郊外Uターン	-0.31	0.51 **	-0.20	-0.12	0.24	-0.10
Jターン	0.53 +	0.49 +	0.59 *	0.29	0.20	-0.28
Iターン	0.67 +	0.28	0.31	-0.31	0.61 +	-0.25
その他の県内出身者	0.35	0.01	0.30	-0.93 *	0.40	-0.09
居住年数(中心化)	-0.02	-0.03 **	-0.01	-0.02 **	-0.01	0.00
居住年数×移動パターン						
弘前Uターン(ref)						
郊外Uターン	0.03	0.06 ***	0.00	0.04 ***	-0.01	0.03 **
Jターン	0.01	0.05 **	0.02	0.04 +	0.01	-0.02
Iターン	0.02	0.04	0.01	0.01	-0.01	-0.04 +
その他の県内出身者	0.02	0.06 *	0.02	0.00	0.02	0.02
年齢	0.02 +	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01
性別(女性=1)	0.23	-0.82 ***	0.39 *	-0.41 **	0.16	-0.07
学歴						
高校(ref)						
専門・短大・高専	0.16	0.19	0.24	-0.18	-0.21	-0.56 ***
大学・大学院	-0.13	0.70 ***	-0.13	0.31 *	0.09	-0.43 *
就業形態						
無職(ref)						
正規雇用	0.47 +	-0.40 +	0.31	-0.38 *	0.27	-0.40 **
非正規雇用	0.20	-0.09	0.25	0.02	0.25	-0.57 **
自営業・自由業	-0.08	-0.62 *	-0.24	-0.49 *	-0.57	-0.35 +
配偶者あり	0.03	0.57 **	-0.04	0.52 **	-0.11	0.20
子供あり	-0.10	-0.41 +	0.07	-0.42 **	-0.22	-0.94 ***
定数	-0.96	0.91 +	-0.58	1.19 ***	-0.74	1.66 ***
尤度比カイ二乗値(18)	80.87***		60.44***		79.92***	
Vuongテストのz値	5.51***		5.39***		5.95***	
回答者数	316		320		306	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

交互作用を含む分析は、説明変数の傾きまで含めて、予測値を算出しなければ、その意味を理解することが難しい。順に、その値を示す。(表 5-7) に小学校以前、(表 5-8) に中学、(表 5-9) に高校それぞれのアクティブ友人数について、予測値と、弘前Uターンまたは郊外Uターンとの差の検定結果ならびに、居住年数の効果の検定結果を示した。

表 5-7 小学校以前のアクティブ友人数に対する移動パターンと居住年数の効果の予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
弘前Uターン	0.69	0.80	ref	ref	+		0.52	0.64	ref	ref		---		---
郊外Uターン	0.47	1.26	-		ref	ref	0.50	1.94		+++	ref	ref		+++
Jターン	0.82	0.44			++		0.75	0.89	+	+++	++			
Iターン	0.83	0.40			+++		0.82	0.45	+		+			
その他の県内出身者	0.73	0.39			+		0.73	0.63			+			

＋と－の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の＋は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 5-8 中学校のアクティブ友人数に対する移動パターンと居住年数の効果の予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
弘前Uターン	0.63	1.37	ref	ref		++	0.54	1.08	ref	ref				---
郊外Uターン	0.57	0.98		--	ref	ref	0.45	1.62			ref	ref		
Jターン	0.75	0.83					0.82	0.80	++	++	+++	+		
Iターン	0.70	0.73		-			0.70	0.57						
その他の県内出身者	0.68	0.45		--			0.71	0.28				-		

＋と－の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の＋は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 5-9 高校のアクティブ友人数に対する移動パターンと居住年数の効果の予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
弘前Uターン	0.44	1.58	ref	ref			0.40	1.57	ref	ref				
郊外Uターン	0.56	0.82			ref	ref	0.48	1.69			ref	ref		++
Jターン	0.49	1.37					0.50	0.79		-		--		
Iターン	0.73	0.88	+++			+	0.59	0.59				-		-
その他の県内出身者	0.52	1.02					0.63	1.06						

＋と－の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の＋は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

ここで関心が強いのは、居住年数の効果である。比較的明確なパターンを示すのは、郊外Uターンである。このグループでは、小学校以前と高校の2つの関係について、居住年数が長くなるにつれて、アクティブ友人数が増加している。中学のアクティブ友人数については傾きが有意にはならないが、 $p=.1087$ 程度であり、一貫したパターンを示している。郊外出身者が、出身自治体にUターンした場合、年月を経るごとに、古い、地縁性の強い関係を活性化していくことがわかる。そのために、移住10年後には、相対的に大きいとは言えなかった、中学、高校のアクティブ友人ネットワークが、移住30年後には、突出して大きくなるまでになる（小学校のアクティブ友人は、移住10年後からもっとも多い）。郊外出身者は、旧知の友人たちのネットワークに、次第に統合されていくのである。なお、アクティブ友人数がゼロとなる確率は、居住年数によっては変化しない。最低限の人数は定住者と同様に持ちつつ、時間の経過とともにネットワークが拡大していくことがわかる。

一方、同じUターンでも、弘前出身者のパターンは異なる。弘前Uターンは、小学校以前と中学のアクティブ友人数が、居住年数が長くなるにつれて減少する。むしろ、Uターン後に、ゆっくりとではあるが、これらの、もっとも地縁性の強い、古い関係から離脱していくのである。高校のアクティブ友人数については、ゼロとなる確率まで含めて変化しない。弘前Uターンの回答者にとっては、中学以前の友人と、高校での友人は、持つ意味が異なる可能性がある。弘前市は相対的に都市度が高いため、市内にUターンしたといっても、生家の近辺に居住していないケースが多くなることが、ひとつの要因だと考えられる。すでに考察したように、高校の友人は、もともと地縁性が弱くなっているために、移動があっても個々人に継続の意志がある限り、関係性が継続しやすい可能性がある。

出身自治体以外に居住するJターン、Iターン、その他の県内出身者は、移住後、時間が経過しても、高校以前のアクティブな友人関係は変化しない。これらの回答者の多くは、居住地近辺に高校以前の知人はいないことが多いと考えられるため、こうした人々との関係は、移動によって距離が開いたにもかかわらず、変わらずに維持されるのだと言うべきだろう。

4. 祭、青年団、ボランティアでの関係性

居住地近辺に存在する社会関係は、もちろん、学校に由来するものばかりではない。むしろ、その後に形成される関係性のほうが主となる人々も多いだろう。長じてから形成される、地域社会に関わる社会関係は、学生時代の友人同様、人々にとって重要な存在である。そうした関係が存在することは、地域社会に人々が統合されていることを示すし、県外の出身者にとっては、地域への流入後に社会関係が形成できていることを意

味する。地域にとっては、流入者を社会的に統合できていることになる。

この節と次節では、祭や青年団などの地域活動（以下、「祭・青年団」）とボランティア活動という2つの社会的文脈について、アクティブ友人の数を検討し、中南津軽地域住民の、地域社会への統合を検討する。7節と8節では、測定の方法を変えて、30分以内の移動で会うことのできる、地理的に近接したサポートについて検討する。

（表5-10）に、祭・青年団またはボランティアで知り合ったアクティブ友人数の分布を示した。すぐにわかるのは、その数がきわめて少ないことである。いずれのグループでも、2種類のアクティブ友人数は、p75までが0である。存在確率は、もっとも高いところで21%にすぎない。つまり、移動パターンを問わず、これらの社会関係を有する中南津軽地域住民は、多いグループでも5人に1人にすぎない。p90では、0以外の値が確認されるが、それさえも、Jターン、Iターン、その他の県内出身者では、どちらの関係も0である。

つまり、これら中南津軽地域外からの移住者のグループでは、地域的な文脈でアクティブ友人を得ている者は非常に少ない。地域的な活動に、県外出身者を取り込めているとは言いがたいし、その他の県内出身者の値からわかるように、県内出身者でも、中南津軽地域外が出身地であれば同様である。

とはいえ、特にボランティアで顕著であるが、中南津軽地域出身者であったとしても、地域活動からアクティブな友人関係を得ている回答者は、非常に少ない。もちろん、それぞれの少なさの理由は異なる可能性がある（たとえば、定住者にとっては、地域活動やボランティアに関わる友人ではなく、小学校や中学校からの友人として認識されている、など）が、いずれにしろ、これらの関係は、大多数の中南津軽地域住民にとっては、アクティブな関係のきっかけにはなっていない。

表5-10 地域活動に関するアクティブ友人数

	祭・青年団						ボランティア						回答者数
	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	0.00	0.00	3.00	0.80	0.14	0.00	0.00	0.00	0.00	0.33	0.05	194
郊外定住	0.00	0.00	0.00	3.00	0.99	0.20	0.00	0.00	0.00	1.00	0.46	0.11	104
中南津軽内移動	0.00	0.00	0.00	2.00	0.79	0.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.08	0.03	76
弘前Uターン	0.00	0.00	0.00	2.00	1.03	0.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.37	0.07	134
郊外Uターン	0.00	0.00	0.00	3.00	1.62	0.17	0.00	0.00	0.00	3.00	1.14	0.14	63
Jターン	0.00	0.00	0.00	0.00	0.13	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	2.31	0.03	39
Iターン	0.00	0.00	0.00	0.00	0.24	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	50
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	0.00	0.30	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.49	0.08	97
合計	0.00	0.00	0.00	2.00	0.80	0.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.50	0.07	757

（表5-10）に示されたパターンの統計的有意性を検討するため、回帰分析を行った。ただし、祭・青年団、ボランティアともに、アクティブ友人がいる回答者が非常に少数

であり、グループによっては1名であること、しかも、この1名を取り除くだけで結論が変わることから、目的変数をアクティブ友人の有無とし、プロビット回帰分析を行うこととした（次節に見るように、居住年数と移動パターンの交互作用を投入した分析では、これでもなお分析が不安定になる）。（表 5-11）に結果を、（表 5-12）に回帰式を用いた予測値と、弘前定住、郊外定住との予測値の差の検定の結果を示した。以下、関係別に検討する。

表 5-11 地域活動のアクティブ友人の有無のプロビット回帰分析

	祭・青年団	ボランティア
移動パターン		
弘前定住 (ref)		
郊外定住	0.10	0.26
中南津軽内移動	-0.03	-0.53
弘前Uターン	-0.17	-0.02
郊外Uターン	-0.14	0.39
Jターン	-1.26 *	-0.61
Iターン	-1.12 *	-0.34
その他の県内出身者	-0.53 *	0.14
年齢	0.00	0.03 ***
性別（女性 = 1）	-0.62 ***	-0.29 †
学歴		
高校 (ref)		
専門・短大・高専	-0.10	0.35 *
大学・大学院	-0.33	-0.10
就業形態		
無職 (ref)		
正規雇用	-0.26	-0.33
非正規雇用	-0.11	0.06
自営業・自由業	0.34 †	-0.01
配偶者あり	0.34 †	-0.03
子供あり	0.26	-0.06
定数	-1.02 **	-2.63 ***
尤度比カイ二乗値(16)	85.25 ***	48.94 ***
分散説明率	.15	.12
回答者数	732	735

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表 5-12 地域活動のアクティブ友人数の存在確率

移動パターン	祭・青年団			ボランティア		
	予測値	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	予測値	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住
弘前定住	0.15	ref		0.06	ref	
郊外定住	0.17		ref	0.10		ref
中南津軽内移動	0.14			0.02		--
弘前Uターン	0.11			0.06		
郊外Uターン	0.12			0.13		
Jターン	0.01	--	---	0.02		-
Iターン	0.02	--	---	0.03		
その他の県内出身者	0.06	--	--	0.08		

+-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

まず、祭・青年団のアクティブ友人については、Jターン、Iターン、その他の県内出身者の係数が有意となった。これらの回答者は、弘前定住、郊外定住のどちらと比べても、祭や青年団活動を介したアクティブな友人関係を持つ確率が低い。

ボランティアのアクティブ友人については、郊外定住と比較したときに、中南津軽内移動で存在確率が低い。全体として、郊外定住と郊外Uターンという、弘前市郊外出身で、現在も同じ自治体に居住している回答者は、ボランティアに由来するアクティブ友人がいる確率が高いようである。

5. 祭、青年団、ボランティアでの関係性と、居住年数

ここでも、地域外での生活の経験者に分析を絞り、移住してからの居住年数と、ネットワーク・サイズとの関係性を検討する。(表 5-13) に、プロビット回帰分析の結果を示した。(表 5-13) からわかるように、参照カテゴリを弘前Uターンとしたとき、祭・青年団、ボランティアともに、移動パターンの主効果は有意ではない(JターンとIターンでは、10%水準の負の効果はある)。ボランティアについては、Jターンの係数と誤差が非常に大きく、分析結果が不安定であるし、交互作用も有意にはならないため、これ以上の検討は不要である。

交互作用が有意なのは祭・青年団に基づくアクティブ関係の有無を目的変数としたときで、このとき、その他の県内出身者と居住年数の交互作用が有意である。郊外Uターンも10%水準の弱い効果だが、やはり交互作用がある。

(表 5-14) に、回帰モデルの予測値を示した。その他の県内出身者は、移住後10年では、祭・青年団ネットワークを持つ者が1%に過ぎないのに対して、30年を経過した者では、23%にも達する。その他の県内出身者97名の中で、このネットワークを持つ者は6名に過ぎないが、そのほとんどが、移住からかなりの時間を経た人々だということになる(やはり、少数回答ゆえに、解釈には慎重であるべきだが)。

一方、有意傾向の郊外Uターンと居住年数の交互作用は、弘前Uターンでは、居住年数によって、祭り・青年団ネットワークを持つ者の比率に変化がないのに対して、郊外Uターンでは増加していることにある。いずれのグループでも居住年数の主効果は有意にならない(郊外Uターンの居住年数の傾きが、 $p=.1059$ 程度)ものの、両者の差が拡大する傾向にあるのは示唆的である。弘前市内出身者は、Uターン後、祭や青年団を通じて社会的に統合されるかどうかは、Uターン後、早期に決まり、その後は変化しないのに対して、郊外Uターンでは、移住後、時間の経過とともに社会的統合が進む可能性が示唆されるからである。都市度の低い郊外地域の社会関係の強固さは、このようなかたちでも、Uターン者の社会的統合に寄与する。

表 5-13 地域ネットワークの有無に対する居住年数と移動パターンの交互作用を含めたプロビット回帰分析

	祭・ 青年団	ボラン ティア
移動パターン		
弘前Uターン(ref)		
郊外Uターン	0.19	0.48
Jターン	-1.11 ⁺	-6.73
Iターン	-0.88 ⁺	-0.38
その他の県内出身者	-0.17	-0.03
居住年数(中心化)	-0.01	-0.02
居住年数×移動パターン		
弘前Uターン(ref)		
郊外Uターン	0.04 ⁺	0.04
Jターン	0.04	0.29
Iターン	0.02	0.01
その他の県内出身者	0.09 ^{**}	0.03
年齢	-0.01	0.04 ^{**}
性別(女性=1)	-0.98 ^{**}	-0.06
学歴		
高校(ref)		
専門・短大・高専	0.30	0.54 ⁺
大学・大学院	0.11	0.10
就業形態		
無職(ref)		
正規雇用	-0.39	-1.04 ^{**}
非正規雇用	0.14	-0.14
自営業・自由業	0.18	-0.17
配偶者あり	0.61	-0.07
子供あり	0.41	-0.22
定数	-1.13	-3.13 ^{***}
尤度比カイ二乗値(18)	51.14 ^{***}	49.64 ^{***}
分散説明率	.25	.27
回答者数	297	301

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-14 移動パターンによる、祭・青年団ネットワークの存在確率の予測値

移動パターン	移住後10年			移住後30年			居住年数の傾き
	予測値	vs. 弘前Uターン	vs. 郊外Uターン	予測値	vs. 弘前Uターン	vs. 郊外Uターン	
弘前Uターン	0.11	ref		0.08	ref	-	
郊外Uターン	0.07		ref	0.19	+	ref	
Jターン	0.00			0.02		--	
Iターン	0.01	--		0.02		-	
その他の県内出身者	0.01	-		0.23	+		++

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

なお、ここで示したアクティブな関係の有無や数が、地域的な活動の活発さを常に示すとは言えないことに、注意が必要である。本調査で測定したのは、あくまでも私的で、頻繁に接触がある関係だけである。地域的な活動をきっかけとする関係を、私的な関係と見なさなければ、活発に活動をし、多くの仲間を得ている回答者でも、アクティブ友人数は小さくなる。

このことを示唆する分析を、ひとつあげておく。本調査では、調査直前の一週間に「自治会、PTA、町おこしなどの地域活動」に関わった時間を尋ねている。これらの活動は、上記した祭・青年団やボランティアとは完全に一致しないが、地域的な活動という意味では共通する。この時間数を目的変数として、ゼロ過剰ポアソン回帰分析を行った結果が、(表 5-15)、予測値を算出した結果が(表 5-16)である。この分析から明らかになるのは、まず、弘前定住と郊外定住を比較したときには、郊外定住のほうがなんらかの活動を行った回答者の比率がやや多いことである。そして、弘前定住と比較すると、郊外Uターンは、ゼロである確率が低い。郊外定住と比較すると有意とはいえなくなるが、参加率が郊外Uターンで高いことが示唆される。弘前Uターンは、弘前定住、郊外定住と比較して活動時間が長い傾向があるが、郊外定住と比較したときには、ゼロの確率も高い。特定の人が長時間の活動を行っているのである。回答者にも30時間とした回答者が1人おり、この回答者を取り除くと、弘前Uターンの活動時間は弘前・郊外定住と変わらなくなる。Iターンでは、活動時間が短い。

表 5-15 直近一週間の自治会、PTA、町おこしなどの活動時間のゼロ過剰ポアソン回帰分析

	0予測	時間予測
移動パターン		
弘前定住(ref)		
郊外定住	-0.41 ⁺	-0.08
中南津軽内移動	-0.01	-0.41 ⁺
弘前Uターン	0.14	0.34 ⁺
郊外Uターン	-0.74 ^{***}	-0.03
Jターン	0.25	-2.70
Iターン	-0.23	-0.63 [*]
その他の県内出身者	0.27	0.21
年齢	0.01	0.01
性別(女性=1)	0.30 ⁺	-0.22 ⁺
学歴		
高校(ref)		
専門・短大・高専	0.07	-0.07
大学・大学院	0.17	0.73 ^{***}
就業形態		
無職(ref)		
正規雇用	0.696 ^{***}	0.255
非正規雇用	0.564 ^{**}	-0.034
自営業・自由業	0.090	0.335 [*]
配偶者あり	-0.375 ⁺	0.332
子供あり	-0.701 ^{**}	0.287
定数	0.793 ⁺	0.432
尤度比カイ二乗値(16)	89.96 ^{***}	
Vuongテストのz値	5.61 ^{***}	
回答者数	565	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-16 直近一週間の自治会、PTA、町おこしなどの活動時間と、活動時間がゼロとなる確率の予測値

移動パターン	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	時間	0予測	時間	0予測	時間
弘前定住	0.85	0.52	ref	ref	+	
郊外定住	0.73	0.83	-		ref	ref
中南津軽内移動	0.85	0.35		-		
弘前Uターン	0.88	0.58		+	++	++
郊外Uターン	0.61	1.26	---			
Jターン	0.90	0.02				
Iターン	0.79	0.38		--		--
その他の県内出身者	0.90	0.40			++	

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

つまり、これらの分析からは、県外出身者やUターン者が、積極的に活動をしている

とは言えないことがわかる。地域活動のネットワークが大きいことが、活動時間とかならずしも一致しないのである。逆に、中南津軽内移動やJターンでボランティアのアクティブ友人がいない傾向にあるとしても、それが、それらの回答者でボランティア活動自体が少ないことを意味するわけでもない。

ボランティア組織・社会奉仕団体への参加を、非加入・加入・積極的に参加の3カテゴリで尋ねた質問を目的変数とした他項プロビット分析の結果も、移動パターンの効果を示さない(表略)。地域的な活動への参加と、その活動を通しての社会的統合については、質問項目の対応をより精密にとりながら、さらに検証する必要があるだろう。

6. 近距離のサポート・ネットワーク

この節では、回答者が地域社会に統合されている程度を、回答者が近距離に在住している他者から得ているソーシャル・サポートという視点から検討する。前節までで検討した関係のアクティブさ(ここでは、過去一ヶ月以内の接触)は、関係の質と量の指標のひとつではあるが、それが常に重要とは限らない。親族などは、接触頻度が低くても、危機に際しては重要なサポート源として機能するだろう。接触があることだけでなく、社会関係を資源として利用できてこそ、社会的に適応ができていると考える視点もあるし、何らかのかたちで援助を依頼できる程度の関係ができていてこそ、社会的に統合されていると考えることもできる。

そこで、以下では、いくつかのサポートについて、得ることが期待できる知人の数、すなわちサポート・ネットワークの存在確率と、サイズを検討する。

サポートは、その内容によっては、距離に依存しない。愚痴を聞いてもらう、慰めてもらうといった情緒的なサポートは、電話やメールでも、一定の効果を得られるだろうし、道具的サポートであっても、必要としているのが情報であれば、何らかの手段でコンタクトがとれている限り、距離は問題とはなりにくい。

それでもなお、ここでは、サポート・ネットワークを、その供給源との距離別に分析する。UIJターナー者の、地域社会への統合が、ここでの関心だからである。近距離からサポートを得られているのであれば、きわめて重要な一側面について、回答者が地域社会に統合されていると見なすことができるからである。

一方で、遠距離のサポートも、地域社会への統合とは別の側面で、個人的、社会的に重要である。近距離に、必要とするサポート資源がすべて存在するとは限らない。すでに述べたように、遠距離の、接触頻度の低い関係にこそ、必要な資源が存在することもあるのである(Granovetter(1973); Putnam(2000))。そして、遠距離に関係を有する個人がそこから資源を得るとき、それが地域社会に欠けていた、決定的に重要な資源となることもある。

この節では、まず近距離のサポート・ネットワークについて検討する。その後、次節で遠距離のサポート・ネットワークについて検討し、合わせて考察する。

本調査では、4種類8つのサポートについて、回答者にそれを提供してくれる人物の有無と人数を尋ねた。相談ネットワークとしての「困ったときに相談に乗ってくれる人（相談）」「個人的な悩みを話せる人（悩み）」、具体的な道具的サポート・ネットワークとしての「生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人（手助け）」「必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人（オカネ）」、共行動ネットワークとしての、「同じ目標を目指して一緒に何かしている人（目標共有）」「一緒に遊ぶ人（娯楽共有）」、就職援助ネットワークとしての「必要なら就職の世話をしてくれる人（就職の世話）」「必要なら就職活動についてアドバイスしてくれる人（就職アドバイス）」である。そして、それらのサポート源が、30分以内に会える範囲という近距離と、会うのに一時間以上かかるという長距離に、それぞれ何人ずついるのかを尋ねた。

以下では、サポートのタイプごとにまとめて結果を記述する。

(1) 相談ネットワーク

(表 5-17) に、近距離の相談ネットワークに関する集計を示した。アクティブ友人とは異なり、どちらの関係でも、ほぼすべてのグループで p25 から 1 以上となり、4人に3人の回答者が相談ネットワークを有している。値が2つの関係に一貫して低いのはその他の県内出身者であり、ここでのみ p25 が0となる。このグループには、孤立した人々が多い。その他のグループには、それほど大きな差がない。

表 5-17 相談に関わるネットワークのサイズ（近距離）

	困ったときに相談					悩みを話せる					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
弘前定住	1.00	2.00	4.00	3.09	0.84	1.00	2.00	3.00	2.09	0.79	229
郊外定住	2.00	3.00	5.00	3.55	0.91	1.00	2.00	3.00	2.13	0.83	128
中南津軽内移動	1.00	2.00	4.00	2.93	0.89	1.00	2.00	3.00	2.07	0.80	89
弘前Uターン	1.00	2.00	4.00	3.36	0.87	1.00	1.00	2.00	1.99	0.77	151
郊外Uターン	1.00	2.00	3.00	2.76	0.82	1.00	2.00	3.00	1.93	0.78	76
Jターン	1.00	2.00	4.00	2.73	0.86	0.50	1.00	2.00	1.64	0.75	44
Iターン	1.00	2.00	3.00	2.34	0.80	1.00	2.00	3.00	1.81	0.80	59
その他の県内出身者	0.00	2.00	3.00	2.12	0.74	0.00	1.00	2.00	1.47	0.67	111
合計	1.00	2.00	4.00	2.97	0.84	1.00	2.00	3.00	1.94	0.77	887

以上のグループ差の、属性を統制した状態での統計的有意性を検討するため、ゼロ過剰ポアソン回帰分析を行った。(表 5-18) にゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を、(表 5-19) に予測値を、それぞれ示した。以下では、主として予測値を元に議論する。ただし、予測値と実測値は、特にゼロの確率が大きく異なる点には注意がいる。

表 5-18 相談ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（近距離）

	相談		悩み	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住(ref)				
郊外定住	-0.81 *	0.03	-0.50	-0.03
中南津軽内移動	-0.18	-0.05	-0.07	-0.05
弘前Uターン	-0.46 +	0.05	-0.52 +	-0.08
郊外Uターン	-0.11	-0.06	-0.41	-0.08
Jターン	-0.28	-0.19 +	-0.29	-0.27 +
Iターン	-0.11	-0.44 ***	-0.39	-0.32 **
その他の県内出身者	0.26	-0.32 ***	0.24	-0.35 ***
年齢	0.00	-0.01 ***	0.03 **	0.00
性別（女性 = 1）	-0.98 ***	-0.16 ***	-1.72 **	-0.11 +
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	0.06	0.14 ***	0.29	0.19 **
大学・大学院	-0.26	0.20 ***	-0.12	0.31 ***
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	0.11	-0.05	0.42	-0.05
非正規雇用	0.13	-0.14 *	1.09 **	-0.04
自営業・自由業	-0.57 *	0.26 ***	0.21	0.29 ***
配偶者あり	0.15	0.16 **	-0.15	0.14 +
子供あり	-0.41 *	0.05	-0.60 *	-0.04
定数	-0.67	1.62 ***	-1.90 **	0.87 ***
尤度比カイ二乗値(16)	141.78***		62.15***	
Vuongテストのz値	4.68***		3.27***	
回答者数	865		847	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-19 相談ネットワーク・サイズの予測値（近距離）

	相談						悩み					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
弘前定住	0.11	3.10	ref	ref	++		0.06	2.23	ref	ref		
郊外定住	0.02	3.51	--		ref	ref	0.02	2.26			ref	ref
中南津軽内移動	0.08	3.04					0.06	2.15				
弘前Uターン	0.04	3.49	-				0.02	2.14	-			
郊外Uターン	0.09	2.99			+		0.03	2.15				
Jターン	0.06	2.69		-		--	0.04	1.75		--		-
Iターン	0.09	2.04		---	+	---	0.03	1.67		---		---
その他の県内出身者	0.16	2.12		---	+++	---	0.10	1.51		---	+	---

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

（表 5-18 と 19）からわかるように、相談、悩みのいずれについても、Jターン、Iターン、その他の県内出身者で、サイズが小さい傾向がある。参照カテゴリが弘前定住、郊外定住のどちらでも、この結論は変わらない。相談について言えば、平均サイズの予

測値が、弘前定住、郊外定住と比較したときに、最大で 1.5 人違うため、その差は比較的大きい。悩み相談については、もともとのネットワーク・サイズが小さいこともあり、差は最大でも 0.7 程度である。

J ターンと I ターンは、ゼロの確率が定住者と変わらないため、相談相手がいないという孤立した状況が生じやすいわけではない。家族とともに移動している人々も多いからだろう。その他の県内出身者は、郊外定住者と比較したときには、困りごとや悩みの相談相手がいない確率が高い傾向にある。ただし、そうした人は少数派である。

相談については、弘前定住と、郊外定住に、ゼロの確率に差がある。弘前定住が相談相手を持たない確率は、全体的に見ても相対的に高い。この結果は解釈が難しい。弘前 U ターンが、それほど高い値を示さないことから、単純に都市度の問題ではない。有意水準が 10% 程度ということもあり、ここでは、これ以上は踏み込まない。

ここでも、居住年数と移動パターンとの交互作用を分析することを通して、地域での生活期間がサポート・ネットワークに与える効果を検討する。ただし、相談ネットワークについては、相談、悩みのいずれも分析結果が安定しなかったため、相談ネットワークの有無を目的変数とするプロビット回帰分析のみを行った。回帰分析の結果を（表 5-20）に、予測値を（表 5-21）に、それぞれ示した。ただし、交互作用が 10% 水準でも示唆されたのは悩みだけだったため、予測値は、そちらのみを示している。交互作用を取り除いたモデルで分析しても、相談については居住年数の効果はない。

表 5-20 相談ネットワークの有無を目的変数としたプロビット回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	相談	悩み
移動パターン		
弘前Uターン(ref)		
郊外Uターン	-0.17	0.15
Jターン	-0.24	-0.22
Iターン	-0.49 ⁺	-0.03
その他の県内出身者	-0.69 ^{**}	-0.41
居住年数(中心化)	0.01	0.03 [*]
居住年数×移動パターン		
弘前Uターン(ref)		
郊外Uターン	-0.01	-0.03 ⁺
Jターン	0.02	-0.01
Iターン	0.00	0.00
その他の県内出身者	-0.01	-0.03
年齢	-0.02 [*]	-0.02 [*]
性別(女性=1)	0.70 ^{***}	0.75 ^{***}
学歴		
高校(ref)		
専門・短大・高専	0.17	0.07
大学・大学院	0.34	0.49 ⁺
就業形態		
無職(ref)		
正規雇用	-0.08	0.20
非正規雇用	-0.43	-0.31
自営業・自由業	0.22	0.38
配偶者あり	-0.09	0.27
子供あり	0.49 [*]	0.14
定数	1.71 ^{**}	1.21 [*]
尤度比カイ二乗値(18)	40.18 ^{**}	43.68 ^{***}
分散説明率	.13	.12
回答者数	345	338

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-21 居住年数別の悩み相談相手の存在確率の予測値

移動パターン	移住後10年			移住後30年			居住年数の傾き
	予測値	vs. 弘前Uターン	vs. 郊外Uターン	予測値	vs. 弘前Uターン	vs. 郊外Uターン	
弘前Uターン	0.73	ref		0.87	ref		++
郊外Uターン	0.86		ref	0.84		ref	
Jターン	0.70			0.78			
Iターン	0.72			0.86			
その他の県内出身者	0.68		-	0.68	--		

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

(表 5-21) から明らかのように、居住年数が増えたときに、悩み相談の相手がいる確率が固まるのは、弘前Uターンだけである。郊外Uターンは、アクティブ友人とは異なる結果だが、もともとの存在確率が高いためだと考えられる。県外、地域外の出身者は、

このサポート・ネットワークについて深刻な孤立状態にあるとは言えないものの、移住から時間が経過しても、地域社会へと相談ネットワークを拡大はしていない。

(2) 道具的ネットワーク

続いて、(表 5-22、23、24) に、近距離の道具的サポート・ネットワーク・サイズの集計、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を示した。まず(表 5-22) からわかるのは、相談ネットワークと比較して、道具的サポートを得られる相手の存在確率が低く、ネットワーク・サイズも小さいことである。当然のことであるが、まとまったオカネを借りられる相手が 30 分以内の近距離にいる回答者は多数派ではない。唯一郊外定住が、52%と半数に達する。具体的な手助けについても、過半数がそうした関係を保持しているものの、ほとんどのグループで p25 がゼロとなっており、存在確率が 8 割を超えることもない。相談とは異なり、手助けもオカネも、提供にはコストがかかるため、より関係性が強くなければ、援助を求めることは難しいためだろう。

表 5-22 道具的ネットワークのサイズ (近距離)

	手助け					オカネ					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	2.00	3.00	2.01	0.73	0.00	0.00	2.00	0.81	0.44	222
郊外定住	1.00	2.00	3.00	2.26	0.76	0.00	1.00	2.00	1.09	0.52	123
中南津軽内移動	0.00	2.00	3.00	1.64	0.75	0.00	0.00	2.00	0.83	0.47	83
弘前Uターン	0.00	1.00	2.00	2.31	0.75	0.00	0.00	1.00	0.77	0.47	146
郊外Uターン	0.00	2.00	3.00	1.80	0.68	0.00	0.00	2.00	0.93	0.47	75
Jターン	0.00	1.00	2.00	1.23	0.65	0.00	0.00	1.00	0.51	0.30	43
Iターン	0.00	1.00	2.00	1.29	0.57	0.00	0.00	1.00	0.61	0.30	56
その他の県内出身者	0.00	1.00	2.00	1.20	0.56	0.00	0.00	1.00	0.65	0.40	110
合計	0.00	1.00	2.00	1.85	0.70	0.00	0.00	1.00	0.81	0.44	858

回帰分析の結果は、手助けとオカネで大きく異なる。(表 5-23) からわかるように、手助けについては、移動パターンによる差が明瞭である。現住地が出身地と異なる回答者、すなわち中南津軽内移動、Jターン、Iターン、その他の県内出身者は、ネットワーク・サイズが小さい。また、地域外からの流入者であるIターンとその他の県内出身者で、飛び抜けてネットワーク・サイズがゼロとなる確率が高く、逆にゼロである確率が低い郊外定住と比較したときには、この差が有意となっている。

「具体的な手助け」という言葉で回答者が何を想定したかはあいまいだが、中南津軽内移動でもサイズが小さくなりがちなこと合わせて考えると、中南津軽地域では、流入者は具体的な援助を期待できるほどの社会関係を、地域住民と形成しにくいことが示唆される。

統制変数として用いた年齢の効果が、ゼロの予測に正の係数を示すことも、重要な論

点である。高齢となるほど、手助けを得られる相手が近隣にいる確率が下がっていくのである。ただし、予測値のレベルでは、もっとも存在確率が低いグループでも、7割の回答者が手助けの相手を有していることには注意がいる。地域外出身者は孤立しやすいとはいえ、それは相対的なもので、地域内出身者のネットワーク保持率が、きわめて高いためにそのように見える側面も強い。一方、本調査のサポート・ネットワークは家族と親戚も含んでいることを考えれば、3割が手助けを受けられない状況は、等閑視できないものである。

表 5-23 道具的ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（近距離）

	手助け		オカネ	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住(ref)				
郊外定住	-0.34	-0.03	-0.22	0.19
中南津軽内移動	-0.48	-0.23 *	0.19	0.05
弘前Uターン	-0.25	0.11	-0.46 +	-0.23
郊外Uターン	-0.03	-0.04	-0.17	0.15
Jターン	-0.21	-0.56 **	0.20	-0.35
Iターン	0.47	-0.48 **	0.64 +	-0.08
その他の県内出身者	0.47 +	-0.29 *	0.07	-0.19
年齢	0.03 ***	0.00	0.02 **	0.00
性別（女性=1）	-0.77 ***	-0.28 ***	-0.92 ***	-0.34 **
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	0.13	0.08	0.29	0.43 **
大学・大学院	-0.19	0.15 +	-0.25	0.24
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.10	-0.15 +	0.02	-0.04
非正規雇用	-0.16	-0.11	0.25	-0.11
自営業・自由業	0.00	0.57 ***	0.14	-0.05
配偶者あり	0.04	0.12	0.02	0.25 +
子供あり	-0.46 *	-0.01	-0.23	-0.37 **
定数	-1.53 **	1.13 ***	-0.85 +	0.28
尤度比カイ二乗値(16)	171.12***		30.78*	
Vuongテストのz値	2.65**		5.11***	
回答者数	834		831	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

オカネについては、もともとの存在確率が手助けよりも低く、しかもネットワーク・サイズも小さいため、グループ間の差も小さくなっている。ほとんどのグループで、過半数がお金を借りられる相手がいると回答するなかで、Iターンでゼロとなる確率が突出して高いことが目立った特徴だと言えるだろう。

（表 5-25）に居住年数と移動パターンの交互作用を投入した回帰分析の結果を示した。手助けについては、問題を引き起こすことが明らかになっている、100人とした回答者を除外した。オカネについては、推定結果が不安定なため、ネットワークの有無を目的変数とするプロビット回帰分析を行った。

表 5-24 道具的ネットワーク・サイズの予測値（近距離）

移動パターン	手助け						オカネ					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
弘前定住	0.16	2.03	ref	ref			0.36	0.84	ref	ref		
郊外定住	0.09	2.13			ref	ref	0.29	1.14			ref	ref
中南津軽内移動	0.07	1.79		--			0.44	0.78				
弘前Uターン	0.11	2.41					0.21	0.83	-			--
郊外Uターン	0.15	1.97					0.30	1.07				
Jターン	0.11	1.22		---		---	0.44	0.52				
Iターン	0.30	1.05		---	--	--	0.61	0.47	+		++	
その他の県内出身者	0.30	1.27	+	--	---	--	0.39	0.67				-

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

まず、手助けネットワークについては、人数予測について、Iターンに交互作用がある。しかし、顕著なのは弘前Uターンである。このグループでのみ、手助けネットワークのサイズに対する、居住年数の効果が有意となる。弘前Uターンだけが、移住後、年数を経るにつれて、具体的な手助けをしてくれる相手を増やしているのである。他のグループでは増加は見られないため、移住後30年経つと、その他の県内出身者を除く3つのグループよりも、弘前Uターンが有意に大きな手助けネットワークを形成している。

一方、オカネネットワークについては、やはりIターンに交互作用が確認される。(表5-27)に示した予測値から明らかになるのは、Iターンだけが、居住年数が長くなるにつれて、オカネを借りられる相手の存在確率が上昇することである。Iターンは近隣に娯楽などの関係性は少ないが、経済的な支援関係は形成していくことができている。

表 5-25 手助けネットワークのサイズを目的変数としたゼロ過剰ポアソン回帰分析とオカネネットワークの存在確率を目的変数としたプロビット回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	手助け		オカネ
	0予測	人数予測	
移動パターン			
弘前Uターン(ref)			
郊外Uターン	0.37	0.31 *	0.06
Jターン	0.44	-0.25	-0.68 *
Iターン	1.11 *	-0.18	-0.42 +
その他の県内出身者	1.11 *	0.02	-0.26
居住年数(中心化)	-0.01	-0.01	0.00
居住年数×移動パターン			
弘前Uターン(ref)			
郊外Uターン	0.05	0.01	-0.02
Jターン	-0.04	-0.01	-0.04 +
Iターン	0.04	0.05 ***	0.05 **
その他の県内出身者	0.00	0.01	0.03
年齢	0.03	-0.01	-0.02 *
性別(女性=1)	-2.08 +	-0.29 **	0.45 **
学歴			
高校(ref)			
専門・短大・高専	0.22	0.22 +	-0.04
大学・大学院	-0.69	0.41 **	0.49 *
就業形態			
無職(ref)			
正規雇用	-0.59	-0.13	0.04
非正規雇用	-0.63	-0.18	-0.29
自営業・自由業	-0.61	-0.05	-0.17
配偶者あり	0.83	0.50 ***	0.36 +
子供あり	-0.96 +	-0.36 **	-0.38 +
定数	-1.87 +	1.00 **	0.77
尤度比カイ二乗値(18)	55.19***		60.10***
Vuongテストのz値	3.30***		
分散説明率			.13
回答者数	332		331

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-26 居住年数別の手助けネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの前測値

	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン														
弘前Uターン	0.05	1.66	ref	ref			0.07	3.25	ref	ref		++		+++
郊外Uターン	0.04	1.98			ref	ref	0.14	2.12		--	ref	ref		
Jターン	0.14	1.34					0.03	0.97		---		---		
Iターン	0.22	0.92	+	-	+	--	0.15	1.37		---		-		
その他の県内出身者	0.34	1.51	+++		++		0.31	1.90	--					

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 5-27 居住年数別のオカネネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年			移住後30年			居住年数の傾き
	予測値	vs. 弘前Uターン	vs. 郊外Uターン	予測値	vs. 弘前Uターン	vs. 郊外Uターン	
弘前Uターン	0.50	ref		0.49	ref		
郊外Uターン	0.61		ref	0.43		ref	-
Jターン	0.39			0.14	---	--	-
Iターン	0.16	---	---	0.53			+++
その他の県内出身者	0.30	-	--	0.48			

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

(3) 共行動ネットワーク

続いて、(表 5-28、29、30)に、近距離の共行動ネットワーク・サイズの集計、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を示した。目標共有と娯楽共有では、存在確率もネットワーク・サイズも大きく異なり、娯楽は存在確率が高く、サイズも大きい一方、目標共有はいずれも低い。ほとんどのグループで平均は1人を超えるものの、メディアンは0であり、半数の回答者は、目標を共有した他者を近距離にはもたない。

回帰分析と、その予測値からは、以下のことが言える。

表 5-28 共行動に関わるネットワークのサイズ (近距離)

	目標共有					娯楽共有					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	0.00	2.00	1.86	0.40	1.00	2.00	4.50	2.92	0.76	220
郊外定住	0.00	0.00	1.50	1.44	0.34	0.00	3.00	5.00	3.93	0.74	120
中津軽内移動	0.00	0.00	1.00	0.80	0.35	0.00	2.00	4.00	2.79	0.73	85
弘前Uターン	0.00	0.00	1.00	1.51	0.32	0.00	2.00	5.00	3.77	0.71	150
郊外Uターン	0.00	0.00	1.00	1.07	0.26	0.00	2.00	5.00	3.08	0.71	73
Jターン	0.00	0.00	0.00	2.86	0.21	0.00	2.00	5.00	2.93	0.65	43
Iターン	0.00	0.00	2.00	1.98	0.40	1.00	2.00	5.00	3.75	0.75	57
その他の県内出身者	0.00	0.00	1.00	2.22	0.31	0.00	2.00	3.00	2.49	0.61	109
合計	0.00	0.00	1.00	1.67	0.34	0.00	2.00	5.00	3.21	0.72	857

まず、目標共有は、Jターンとその他の県内出身者で、サイズがゼロになる確率が高いと同時に、ネットワーク・サイズが大きい。祭・青年団や、ボランティアのアクティブ友人数などと同様の、二極化する結果である。ただし、それぞれのグループに含まれる、サイズが90、100と特異的に高い回答者1名ずつを取り除いて分析すると、ゼロの確率が高いだけとなる。あるいは、地域活動を通して関係が維持されている他者が、目

標共有の相手としてあげられたのかもしれないし、地域振興を考えるのであれば、こうした特異的な人々の働きにこそ注意すべきであるのかもしれないが、全体的な動向を把握することを目的とする計量調査においては、解釈には慎重さが必要である。逆に、郊外Uターンと中南津軽内移動では、単にネットワーク・サイズが小さい。どちらかといえば、移動経験者が、近距離の目標共有ネットワークを持たなかったり、そのサイズが小さかったりする傾向があると考えたほうが妥当であろう。

表 5-29 共行動ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（近距離）

	目標共有		娯楽共有	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住(ref)				
郊外定住	0.17	0.07	0.10	0.26 ***
中南津軽内移動	0.07	-0.52 ***	0.05	0.04
弘前Uターン	0.20	-0.01	0.17	0.29 ***
郊外Uターン	0.38 +	-0.31 *	0.07	0.08
Jターン	0.67 **	1.10 ***	0.26	0.14
Iターン	0.01	0.07	0.07	0.20 *
その他の県内出身者	0.38 *	0.56 ***	0.41 *	0.10
年齢	0.01 +	0.03 ***	0.02 ***	-0.01 **
性別（女性=1）	-0.07	-0.12 +	-0.33 **	-0.24 ***
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.13	0.20 **	0.03	0.11 *
大学・大学院	-0.24	0.05	-0.35 *	0.03
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	0.02	0.13 +	-0.01	-0.12 *
非正規雇用	0.00	-0.69 ***	0.21	-0.05
自営業・自由業	-0.48 **	-0.20 *	-0.49 **	0.29 ***
配偶者あり	-0.02	0.54 ***	0.16	0.15 **
子供あり	-0.16	-0.89 ***	-0.23	0.00
定数	0.07	0.23	-1.36 ***	1.62 ***
尤度比カイ二乗値(16)	532.13***		167.76***	
Vuongテストのz値	5.30***		8.03***	
回答者数	823		847	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

娯楽共有は、ゼロの確率にはグループ差はなく、人数に差がある。弘前定住は、相対的に値が低く、逆に値が高い郊外定住、弘前Uターン、Iターンと差がある。後に見るように、弘前定住は、遠距離の娯楽共有も多くはなく、弘前市内の定住者は、娯楽を中心とした関係性がやや弱いようである。

一方、郊外定住はもっともサイズが大きく、弘前定住、中南津軽内移動、郊外Uターンと有意な差がある（サイズが50を超える回答者を除くと、弘前Uターンとも有意な差がある）。Jターン、Iターンにおいて、ネットワーク・サイズが小さいとか、サイズがゼロになりやすいといった傾向は確認できない。すでに見たように、県外出身者からなるIターンは、むしろネットワーク・サイズが大きく、娯楽の共有相手を、近距離

に確保できている。

表 5-30 共行動ネットワーク・サイズの予測値 (近距離)

移動パターン	目標共有						娯楽共有					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
弘前定住	0.57	1.58	ref	ref			0.21	2.96	ref	ref		---
郊外定住	0.64	1.43			ref	ref	0.24	3.71		+++	ref	ref
中南津軽内移動	0.60	0.88		---		---	0.22	3.03				---
弘前Uターン	0.65	1.29					0.26	3.68		+++		
郊外Uターン	0.71	0.78	+	--		--	0.23	3.12				--
Jターン	0.80	2.19	+++	+++	+	+++	0.29	3.04				
Iターン	0.58	1.68					0.23	3.52		++		
その他の県内出身者	0.71	1.87	++	+++		+++	0.34	2.72	++			--

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 5-31 共行動ネットワークのサイズを目的変数としたゼロ過剰ポアソン回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	目標共有		娯楽共有	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前Uターン(ref)				
郊外Uターン	0.14	-0.07	-0.15	0.09
Jターン	0.35	-0.37	0.19	-0.03
Iターン	-0.24	0.34 *	-0.19	0.22 *
その他の県内出身者	0.03	-0.16	0.45 +	0.07
居住年数(中心化)	-0.02	0.01	-0.02 +	0.00
居住年数×移動パターン				
弘前Uターン(ref)				
郊外Uターン	-0.03	-0.02 *	0.02	0.02 ***
Jターン	0.01	0.04	0.01	0.01
Iターン	0.00	0.04 ***	0.02	0.02 **
その他の県内出身者	-0.01	-0.01	0.00	0.01
年齢	0.03 *	0.01	0.03 **	-0.01 *
性別(女性=1)	-0.34 +	-0.65 ***	-0.41 *	-0.27 ***
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.30	-0.10	0.17	0.16 +
大学・大学院	-0.70 **	-0.09	-0.43	0.31 ***
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.48 *	-0.20	0.09	-0.06
非正規雇用	-0.26	-0.45 *	0.64 **	-0.09
自営業・自由業	-0.59 *	-0.10	-0.43	0.09
配偶者あり	0.05	0.82 ***	0.24	0.14
子供あり	-0.21	-1.38 ***	-0.13	-0.02
定数	-0.03	1.55 ***	-1.98 ***	1.84 ***
尤度比カイ二乗値(18)	189.59***		66.84***	
Vuongテストのz値	4.13***		6.91***	
回答者数	331		334	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

(表 5-31) に、居住年数と移動パターンの交互作用を含めた、共行動ネットワークの回帰分析の結果を示した。目標共有については、90 人、100 人と回答した 2 名、娯楽共有については、100 人と回答した 1 名を、分析から除外した。

目標共有の分析結果から計算した予測値を、(表 5-32) に示した。郊外Uターン、Jターン、Iターンの3つのグループは、移住後、時間が経過するとともに、目標共有ネットワークの存在確率が上がるか、サイズが大きくなるという変化がある。特徴的なのはIターンであり、サイズが非常に大きくなっている。半数が目標を共有する他者が近隣にいないとしているものの、残りの半数は、他のグループよりも、そうした知人が多いのである。Iターンが地域活動に参加しているわけでも、地域活動を介したアクティブ友人が多いわけでもないことを考えると、ここで回答者が想定した「目標」が何を指しているのかは、重要な問題となろう。本調査からは、その内容は明らかではない。

表 5-32 居住年数別の目標共有ネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測		
弘前Uターン	0.72	0.93	ref	ref			0.61	1.56	ref	ref				
郊外Uターン	0.84	0.62			ref	ref	0.57	1.30			ref	ref	---	
Jターン	0.80	0.32		-		--	0.76	0.92						+
Iターン	0.63	1.17				-	0.52	3.81		+++		+++		+++
その他の県内出身者	0.76	0.75					0.59	1.28						

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 5-33 居住年数別の娯楽共有ネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測		
弘前Uターン	0.35	2.65	ref	ref			0.22	3.14	ref	ref		---	-	
郊外Uターン	0.24	2.68			ref	ref	0.22	4.21		+++	ref	ref	+++	
Jターン	0.38	2.18					0.31	3.02						
Iターン	0.23	3.18					0.20	4.81		+++			+++	
その他の県内出身者	0.52	1.91				++	0.37	2.95						

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

(表 5-33) には、娯楽共有の分析結果から計算した予測値を示した。ここでも、Iタ

ーンは移住後の経年増加が大きい。娯楽的な側面では、地域に統合されていることがわかる。娯楽については、同様に郊外Uターンも多い。一方で、弘前Uターンは、Jターン、その他の県内出身者と同程度のネットワーク・サイズである。悩みの相談も道具的な手助けも、時間とともに可能な相手が増えているのとは対称的な結果となっている。弘前Uターンの築く近隣関係は、娯楽的なものではないということになる。

(4) 就職援助ネットワーク

(表 5-34、35、36) に、近距離の就職援助ネットワーク・サイズの集計、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を示した。就職の世話という、非常に重要で希少な資源の提供が期待できる相手と関係があり、しかもそれが 30 分以内の距離にいるという回答者は、やはり少ない。就職アドバイスは、内容的には簡単な情報の提供も含むものだが、それでも多いとは言えない。

表 5-34 就職援助ネットワークのサイズ (近距離)

	就職の世話					就職アドバイス					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	0.00	1.00	0.67	0.29	0.00	0.00	2.00	1.15	0.41	221
郊外定住	0.00	0.00	1.00	0.68	0.26	0.00	0.00	2.00	1.25	0.40	122
中南津軽内移動	0.00	0.00	0.00	0.35	0.20	0.00	0.00	1.00	0.56	0.31	84
弘前Uターン	0.00	0.00	0.00	1.19	0.21	0.00	0.00	1.00	1.48	0.34	149
郊外Uターン	0.00	0.00	1.00	0.77	0.32	0.00	0.00	2.00	1.01	0.37	73
Jターン	0.00	0.00	0.00	0.43	0.20	0.00	0.00	1.00	0.68	0.36	44
Iターン	0.00	0.00	0.00	0.35	0.17	0.00	0.00	0.00	0.56	0.19	54
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	0.52	0.21	0.00	0.00	1.00	0.67	0.28	108
合計	0.00	0.00	0.00	0.69	0.24	0.00	0.00	1.00	1.03	0.35	855

(表 5-34) ですでに明らかであるが、回帰分析の結果 (表 5-35 と 36) から、弘前Uターンが、他のグループより就職の世話ネットワークのサイズが大きいことがわかる。ただし、有意性という意味では 10%水準で弱いものの、弘前Uターンは弘前定住と比べたとき、就職の世話をしてくれる相手がいない確率も高い。弘前Uターンの就職の世話ネットワークのサイズが大きいという結果は、このグループの 1 人が 100 名という極端な回答をしたために生じたと考えられる。この回答者を分析から除くと、有意な結果はない。文字通りに読めば興味深い結果ではあるものの、全体に当てはめるのは危険である。

Iターンは、近距離の就職の世話ネットワークが小さい傾向にある。Iターン者は、ここでも地域への統合が弱いことになるが、こうした相手がいる確率自体は、弘前定住、郊外定住のいずれとも変わらない。就職の世話を頼める相手がいたとしても、少数の相手に集中する状況にあるため、その相手がなくなったときの問題は大きいかもしれない

い。ただし、Iターン者には、結婚や配置転換をきっかけとして県内に流入した者が多いため、就職の世話を必要としていない可能性もある。

表 5-35 就職援助ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（近距離）

	就職の世話		就職アドバイス	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住(ref)				
郊外定住	0.04	-0.12	0.04	-0.03
中南津軽内移動	0.24	-0.22	-0.01	-0.72 **
弘前Uターン	0.31 +	0.86 ***	0.20	0.38 ***
郊外Uターン	-0.26	-0.25	-0.03	-0.17
Jターン	0.17	-0.17	0.01	-0.40 +
Iターン	0.10	-0.92 **	0.73 **	-0.19
その他の県内出身者	0.22	-0.05	0.29	-0.33 *
年齢	0.01 *	0.00	0.01 **	-0.01 *
性別（女性 = 1）	-0.27 *	-0.41 ***	-0.26 *	-0.12
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.06	-0.31 *	0.03	-0.01
大学・大学院	-0.12	0.08	-0.12	0.35 ***
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.03	0.09	0.00	0.24 *
非正規雇用	0.27	0.43 *	0.02	-0.01
自営業・自由業	-0.19	0.93 ***	-0.03	0.88 ***
配偶者あり	-0.11	0.09	0.06	0.18 +
子供あり	0.12	0.18	0.03	0.02
定数	-0.08	0.76 **	-0.42	1.00 ***
尤度比カイ二乗値(16)	208.15***		152.02***	
Vuongテストのz値	2.57**		3.16***	
回答者数	816		817	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-36 就職援助ネットワーク・サイズの予測値（近距離）

	就職の世話						就職アドバイス					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
移動パターン												
弘前定住	0.67	0.66	ref	ref			0.56	1.16	ref	ref		
郊外定住	0.68	0.56			ref	ref	0.58	1.08			ref	ref
中南津軽内移動	0.75	0.40					0.56	0.57		---		---
弘前Uターン	0.77	1.07	+	+++		+++	0.63	1.40		+++		+++
郊外Uターン	0.57	0.66					0.55	1.01				
Jターン	0.73	0.45					0.56	0.77		-		
Iターン	0.70	0.23		--		-	0.81	0.41	+++		+++	
その他の県内出身者	0.74	0.48					0.67	0.63		--		-

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

就職アドバイスについては、まず弘前Uターンでネットワーク・サイズが大きい。ただし、この結果も、ただ1人の、サイズを100とした回答者によって引き起こされている。この回答者を分析から除くと、弘前Uターンは、むしろ弘前定住よりもネットワーク・サイズが小さくなる（ただし、有意性は10%水準）。現状では、差はないと解釈すべきだろう。

むしろ、中南津軽内移動、Iターン、その他の県内出身者で、定住者よりもネットワーク・サイズが小さい、またはアドバイスをくれる相手がいない確率が高いという結果が重要である。Jターンでも、わずかではあるが、ネットワーク・サイズが小さいことも考慮に入れると、出身自治体から離れて中南津軽地域に居住している者に対する職業に関わるサポートの提供は、近隣住民からは少ないと結論してよい。

表 5-37 就職援助ネットワークのサイズを目的変数としたゼロ過剰ポアソン回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	就職の世話		就職アドバイス	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前Uターン(ref)				
郊外Uターン	-0.28	0.19	0.13	0.55 **
Jターン	-0.39	-0.84 +	-0.16	-0.34
Iターン	-0.03	-0.39	0.69 *	0.35
その他の県内出身者	0.50	-0.12	0.08	-0.52
居住年数(中心化)	0.01	-0.01	0.02	0.01
居住年数×移動パターン				
弘前Uターン(ref)				
郊外Uターン	-0.01	0.02	-0.02	-0.01
Jターン	0.04	0.02	0.03	0.01
Iターン	-0.04	0.00	0.00	0.02
その他の県内出身者	-0.12 *	-0.05	-0.03	0.02
年齢	0.01	0.01	-0.01	-0.03 *
性別(女性=1)	-0.27	-0.50 *	-0.18	0.03
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	0.28	0.18	0.23	0.01
大学・大学院	0.14	1.08 ***	0.06	0.80 ***
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.13	-0.03	0.04	0.31
非正規雇用	-0.19	-0.70 +	-0.24	-0.43
自営業・自由業	-0.12	0.21	0.09	0.11
配偶者あり	-0.39	0.06	0.09	0.34
子供あり	-0.02	-0.63 *	-0.08	-0.06
定数	0.51	0.79	0.43	1.37 *
尤度比カイ二乗値(18)	41.41**		45.14***	
Vuongテストのz値	4.52***		5.91***	
回答者数	327		327	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-37 に、就職援助ネットワークに対する移動パターンと居住年数の交互作用を検

討した回帰分析の結果を示した。いずれのモデルも、100人と回答した1名を分析から除外している。就職の世話については、その他の県内出身者の有意な交互作用がゼロの予測式に存在する。

(表 5-38) に、就職の世話ネットワークの存在確率と人数の予測値を示した。居住年数の傾きが有意なのは、その他の県内出身者のみであり、このグループでは、就職の世話ネットワークの存在確率が、移住後 10 年では 1 % 程度に過ぎないのに対して、30 年後には半数が持つにいたっている。郊外定住と比較すれば、ネットワーク・サイズは小さいものの、非常に大きな変化が生じていると言えよう。

表 5-38 居住年数別の就職援助ネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 弘前Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
弘前Uターン	0.68	0.59	ref	ref			0.76	0.40	ref	ref				
郊外Uターン	0.63	0.68		-	ref	ref	0.61	0.93			ref	ref		
Jターン	0.38	0.42				-	0.74	0.21						
Iターン	0.81	0.25					0.61	0.43						
その他の県内出身者	0.99	0.03	++			++	0.50	0.45					--	--

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。
0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

(5) 近距離サポート関係のまとめ

近距離のサポート関係は、調査回答者が家族や親族を含む近隣住民から、どれだけのサポートを引き出せるのかの、重要な指標である。どのサポートについて考えるかによって結論は変わるが、全体として見たときには、県外出身者や、Jターン者、さらにはその他の県内出身者が、地域社会に統合されているとは言いがたい。それぞれのグループは、道具的援助、共行動、就職支援のいずれかの側面については多くの社会的資源を有しているが、幅広い領域について、地域社会から援助を受けられているわけではない。

ただし、経済的支援や娯乐的側面については、移動者が、移住後、時間が経過するとともに、近距離にサポート資源を獲得している様子が見えてきた。とはいえ、本報告でシミュレーションしたのは、移住 10 年後と 30 年後の比較であり、10 年後の時点では、Uターン者と比較して、サポート・ネットワークが乏しい傾向が強い。サポート・ネットワークの形成は非常に遅く、あるいは、居住年数以外の変数の効果（世代や、地域社会自体の構造的変化）が、結果に影響していることも疑われる。

中南津軽地域の地域社会は、外来者に対して開放的とは言いがたいと考えられる。外来者のパーソナリティなどの要因もあろうが、地域社会への包摂は、こうした個人要因とは独立になされるよう、制度設計がなされるべきであろう。

7. 遠距離のサポート・ネットワーク

この章の冒頭で述べたように、遠距離の関係は、地域社会に、それ以外の経路では導入が難しい資源をもたらす可能性があるし、個人にとっても、地域社会で希少な資源を獲得する手段として有用である。この節では、回答者の遠距離のネットワークを分析の対象とする。

(1) 遠距離の相談ネットワーク

(表 5-39) に、遠距離の相談ネットワーク・サイズの分布を示した。予測値を用いて、まず相談に関する結果を解釈すると、I ターンが、突出してゼロとなる確率が低く、ネットワーク・サイズも大きいことがわかる。近距離のネットワークとは逆のパターンである。I ターンは、近距離の相談ネットワークの平均サイズが2程度と、弘前・郊外定住と比較して1から1.5低かったが、その差を補ってあまりある相談ネットワークを遠距離に有している。対して、それ以外のグループは、平均すると1人以上の相談ネットワークがあるものの、サイズがゼロとなる確率も3～4割と高く、相談ネットワークが遠距離に広がりにくい。

表 5-39 相談に関わるネットワークのサイズ (遠距離)

	困ったときに相談					悩みを話せる					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	1.00	2.00	1.45	0.53	0.00	1.00	2.00	1.19	0.51	217
郊外定住	0.00	0.00	2.00	1.29	0.48	0.00	0.00	1.00	0.88	0.47	125
中南津軽内移動	0.00	1.00	2.00	1.40	0.55	0.00	1.00	2.00	1.13	0.53	86
弘前Uターン	0.00	1.00	2.00	1.90	0.58	0.00	1.00	2.00	1.41	0.53	151
郊外Uターン	0.00	0.00	1.00	1.21	0.44	0.00	0.00	1.50	1.13	0.46	72
J ターン	0.00	1.00	2.00	1.18	0.57	0.00	1.00	2.00	1.09	0.57	44
I ターン	1.00	2.50	6.00	4.91	0.88	1.00	2.00	5.00	3.33	0.83	58
その他の県内出身者	0.00	1.00	2.00	1.92	0.64	0.00	1.00	2.00	1.47	0.57	110
合計	0.00	1.00	2.00	1.76	0.57	0.00	1.00	2.00	1.35	0.54	863

(表 5-40、41) に、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、そして回帰モデルからの予測値を、それぞれ示した。I ターンは、一貫してネットワークの存在確率が高く、サイズが大きい。また、郊外定住はサイズが小さいため、他のグループのほとんどが、それよりも有意にサイズが大きくなっている。近距離と逆の結果である。J ターンだけは、近距離での少なさが、遠距離を視野に入れても補われない。

郊外定住は弘前定住よりもネットワーク・サイズがやや小さく、都市度の低い環境では、ネットワークが地理的に集中するという、都市社会学的なネットワーク研究の知見

が再現されている。おそらく、相対的に都市度の高い弘前市では、回答者自身に移動経験がない場合でも、知人が移動し、遠距離の関係が形成される確率が高いのだろう。

表 5-40 相談ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（遠距離）

	相談		悩み	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住 (ref)				
郊外定住	-0.04	-0.19 ⁺	-0.21	-0.41 ^{**}
中南津軽内移動	0.16	0.17	0.13	0.01
弘前Uターン	-0.21	0.19 [*]	-0.17	0.16
郊外Uターン	0.10	0.09	0.00	0.16
Jターン	-0.27	-0.26	-0.37	-0.20
Iターン	-1.01 ^{***}	0.65 ^{***}	-0.80 ^{**}	0.63 ^{***}
その他の県内出身者	-0.25	0.10	-0.10	0.11
年齢				
年齢	0.00	-0.02 ^{***}	0.01	-0.02 ^{***}
性別（女性 = 1）				
性別（女性 = 1）	-0.63 ^{***}	-0.23 ^{***}	-0.65 ^{***}	-0.07
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	-0.17	0.21 ^{**}	-0.19	0.20 [*]
大学・大学院	-0.08	-0.16	0.17	-0.04
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	-0.13	-0.17 [*]	-0.02	0.05
非正規雇用	-0.29	-0.39 ^{***}	0.09	-0.10
自営業・自由業	-0.15	0.26 ^{**}	0.02	0.36 ^{**}
配偶者あり				
配偶者あり	-0.06	-0.01	0.10	0.14
子供あり				
子供あり	0.01	0.05	-0.27	0.00
定数				
尤度比カイ二乗値(16)	253.29 ^{***}		131.46	
Vuongテストのz値	5.28 ^{***}		3.39 ^{***}	
回答者数	834		829	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-41 相談ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

	相談						悩み					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
弘前定住	0.40	1.41	ref	ref		+	0.39	1.14	ref	ref		+++
郊外定住	0.38	1.19		-	ref	ref	0.32	0.86		---	ref	ref
中南津軽内移動	0.46	1.49				++	0.44	1.06				++
弘前Uターン	0.32	1.92		++		+++	0.33	1.48				+++
郊外Uターン	0.44	1.43				+	0.40	1.33				+++
Jターン	0.30	1.26					0.26	1.14				
Iターン	0.10	4.02	---	+++	---	+++	0.14	3.05	---	+++	-	+++
その他の県内出身者	0.30	1.79				++	0.36	1.36				+++

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

ただし、弘前UターンとIターンに1人ずつ含まれる、50名と回答した者を分析から除外すると、弘前・郊外定住者との間で差が有意になるのは、Iターンの回答者のネットワーク・サイズの大きさと、存在確率だけとなる。県外出身者が県外の他者に依存するという構造であろう。

悩みネットワークについても、大枠としては相談とパターンは変わらない。外れ値の問題はやはりあるが、移動経験者が郊外定住よりも広い悩みネットワークを有している。Jターンだけが例外となる。Jターンは、近距離のネットワークも小さいが、ゼロとなる確率は、相談、悩みともに定住者と等しいため、孤立の危険があるとは言えない。また、30分と1時間の間、いわば中距離の関係に、相談ネットワークを有している可能性も、本調査の質問項目からは捨てきれない。

(2) 遠距離の道具的ネットワーク

(表5-42)に、遠距離の道具的サポート・ネットワーク・サイズの集計を示した。相談ネットワークと同様、Iターンだけが突出して多く、Uターンやその他の県内出身者がそれに続く。定住と中南津軽内移動は、ほぼ等しい。

表5-42 道具的ネットワークのサイズ (遠距離)

	手助け					オカネ					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	0.00	1.00	0.67	0.30	0.00	0.00	0.00	0.41	0.24	213
郊外定住	0.00	0.00	1.00	0.65	0.30	0.00	0.00	0.00	0.32	0.20	122
中南津軽内移動	0.00	0.00	1.00	0.61	0.36	0.00	0.00	0.00	0.37	0.24	84
弘前Uターン	0.00	0.00	1.00	0.95	0.28	0.00	0.00	0.00	0.45	0.22	149
郊外Uターン	0.00	0.00	1.00	0.95	0.38	0.00	0.00	1.00	0.56	0.26	73
Jターン	0.00	0.00	0.50	0.43	0.25	0.00	0.00	0.50	0.32	0.25	44
Iターン	0.00	2.00	3.00	2.07	0.69	0.00	1.00	2.00	1.47	0.64	55
その他の県内出身者	0.00	0.00	2.00	1.03	0.42	0.00	0.00	1.00	0.70	0.39	108
合計	0.00	0.00	1.00	0.86	0.35	0.00	0.00	1.00	0.52	0.28	848

(表5-43)に、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を、(表5-44)に予測値を、それぞれ示した。まず、手助けネットワークである。弘前定住と比較したとき、Iターンはネットワーク・サイズが大きく、存在確率が高い。一方、Jターンはサイズが小さく、弘前Uターンは大きいという結果になっているが、この2つの結果については、弘前Uターンに含まれる、サイズが50という回答者を除くと有意ではなくなる。これまで同様、解釈には慎重を期す必要がある

オカネネットワークについては、Iターンだけが突出して存在確率が高く、サイズも大きい。郊外Uターンも、郊外定住と比べればサイズが大きい、Iターンほどではな

い。

表 5-43 道具的ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（遠距離）

	手助け		オカネ	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住(ref)				
郊外定住	-0.16	-0.26	-0.06	-0.31
中南津軽内移動	-0.21	-0.08	0.13	0.08
弘前Uターン	0.07	0.39 **	0.03	0.18
郊外Uターン	-0.37 +	-0.07	-0.07	0.37
Jターン	-0.22	-0.72 *	-0.20	-0.43
Iターン	-1.07 ***	0.31 *	-1.13 **	0.48 *
その他の県内出身者	-0.35 +	0.06	-0.35	0.19
年齢	0.01 *	0.00	0.00	-0.02 **
性別（女性=1）	-0.36 **	-0.60 ***	-0.66 ***	-0.65 ***
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	0.13	0.09	-0.10	-0.03
大学・大学院	0.04	0.03	0.11	0.20
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.31 *	-0.38 **	-0.36 +	-0.41 *
非正規雇用	-0.29	-0.48 **	-0.26	-0.50 *
自営業・自由業	0.14	0.46 **	-0.10	-0.15
配偶者あり	-0.05	0.35 *	-0.60 **	-0.27
子供あり	-0.04	0.04	0.45 +	0.60 **
定数	0.15	1.04 ***	0.82 *	1.38 ***
尤度比カイ二乗値(16)	144.75***		52.46***	
Vuongテストのz値	3.20***		4.47***	
回答者数	816		814	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-44 道具的ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

	手助け						オカネ					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
移動パターン												
弘前定住	0.62	0.70	ref	ref			0.63	0.42	ref	ref		
郊外定住	0.56	0.63			ref	ref	0.60	0.33			ref	ref
中南津軽内移動	0.54	0.78					0.68	0.40				
弘前Uターン	0.65	0.95		+++		+++	0.64	0.49				
郊外Uターン	0.47	0.90					0.60	0.65				++
Jターン	0.54	0.42		--			0.55	0.33				
Iターン	0.22	1.94	---	++	---	+++	0.21	1.43	---	++	---	+++
その他の県内出身者	0.48	1.01	-			+	0.49	0.69				

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

以上をまとめると、相談同様、Iターン者は具体的手助けに関して、遠距離の関係に頼っており、それは、おそらくは移動元の地域にいる知人や親族だろう。県外への転出経験のある中南津軽出身者では、Uターンでは定住者と大きな差がないものの、Jターンでは、近距離、遠距離いずれについても、手助けを求められる相手が少ない可能性も示唆された。ただし、孤立しているわけではなく、少数の他者に依存する傾向があるのだと言える。すでに述べたように、この結果については、外れ値に依存している可能性があり、解釈には慎重を期す必要がある。

(3) 遠距離の共行動ネットワーク

(表 5-45) に、遠距離の共行動ネットワークの分布を示した。これらの行動は、なんらかの活動を共同で行う行為を含むこともあり、遠距離の関係は多くはなりにくい。ここまで同様、多いのはIターンだが、それでも、存在確率は35%に過ぎない。他のグループでは、存在確率が高くても2割であり、p75はゼロとなっている。弘前Uターンでは平均値が高いが、これは、100人という回答が1名だけいたからである。この回答者を除けば、平均値は.74と、弘前定住や郊外Uターンと大差ない。

表 5-45 共行動に関わるネットワークのサイズ (遠距離)

	目標共有					娯楽共有					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	0.00	0.00	0.61	0.20	0.00	0.00	2.00	1.43	0.44	215
郊外定住	0.00	0.00	0.00	0.37	0.16	0.00	0.00	1.00	1.20	0.33	120
中南津軽内移動	0.00	0.00	0.00	0.10	0.07	0.00	0.00	1.00	0.87	0.37	83
弘前Uターン	0.00	0.00	0.00	1.41	0.18	0.00	0.00	2.00	2.27	0.47	147
郊外Uターン	0.00	0.00	0.00	0.64	0.20	0.00	0.00	2.00	1.43	0.40	70
Jターン	0.00	0.00	0.00	0.16	0.14	0.00	0.00	2.00	1.23	0.40	43
Iターン	0.00	0.00	3.00	2.25	0.35	0.00	3.00	10.00	5.45	0.73	55
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	0.70	0.19	0.00	1.00	2.00	1.78	0.51	108
合計	0.00	0.00	0.00	0.76	0.19	0.00	0.00	2.00	1.79	0.45	841

娯楽共有については、やや値は高く、存在確率も、倍程度にはなる。ネットワーク・サイズの増加は、さらに大きく、Iターンが突出する。p75が10というのは、4人に1人が10人の娯楽共有相手を、1時間以上の距離にもつということだから、その量的な優位は非常に大きい。高い平均値は、外れ値が原因ではないのである。

(表 5-46、47) に、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果と予測値を、それぞれ示した。まず目標共有である。目標共有ネットワークが存在しない確率は、Iターンでやや低く、郊外定住と有意な差がある。Iターンは、遠近ともに目標共有ネットワークが存在することになる。また、サイズも、予測値にしても他のグループの2倍以上と大きく、(表 5-26) に示した生の集計値が、属性の差などによって生じたものではないことを表して

いる。他に、弘前UターンとJターンも、ネットワーク・サイズが大きい。これまでと異なり、弘前Uターンの係数は、外れ値を除外しても有意である。郊外Uターンを除いて、県外生活の経験者は、遠距離により大きな目標共有ネットワークをもつことになる。郊外Uターンは、近距離でも、このネットワークが小さい。この理由については、「目標を共有」という言葉で回答者がイメージするような活動の機会が郊外に乏しい可能性、郊外では密な地域的社会的関係が維持されやすいため、遠距離の社会的関係が消滅しやすい可能性が考えられるが、この調査データでは明らかにならない。

表 5-46 共行動ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（遠距離）

	目標共有		娯楽共有	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住(ref)				
郊外定住	0.19	-0.29	0.32 ⁺	0.07
中南津軽内移動	0.22	-1.44 [*]	0.13	-0.30 ⁺
弘前Uターン	0.15	0.71 ^{***}	-0.15	0.46 ^{***}
郊外Uターン	-0.17	-0.24	-0.05	0.18
Jターン	0.29	0.48 [*]	-0.01	0.01
Iターン	-0.33	0.96 ^{***}	-0.70 ^{**}	0.86 ^{***}
その他の県内出身者	0.02	-0.12	-0.25	0.10
年齢	0.02 ^{**}	0.03 ^{***}	0.02 ^{***}	-0.01 ^{***}
性別（女性=1）	-0.39 ^{**}	-0.51 ^{***}	-0.38 ^{***}	-0.15 [*]
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.14	0.04	-0.20 ⁺	0.14 [*]
大学・大学院	0.29 ⁺	1.11 ^{***}	0.09	-0.23 [*]
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.39 [*]	-0.33 [*]	-0.09	-0.13 ⁺
非正規雇用	-0.03	0.45 ^{**}	-0.02	-0.16 [*]
自営業・自由業	-0.22	0.94 ^{***}	-0.13	0.02
配偶者あり	0.28	1.39 ^{***}	-0.01	0.13
子供あり	-0.28	-1.44 ^{***}	0.03	0.04
定数	0.19	-0.43	-0.74 ^{**}	1.68 ^{***}
尤度比カイ二乗値(16)	744.54 ^{***}		234.96 ^{***}	
Vuongテストのz値	4.89 ^{***}		7.51 ^{***}	
回答者数	809		816	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

同じ移動の経験と言っても、地域内部に留まる中南津軽内移動は、むしろ弘前定住よりもネットワーク・サイズが小さい。次に見るように娯楽共有でも有意傾向ながらネットワーク・サイズが小さいことから、これらの人々は、遠距離に共行動ネットワークを持ちにくいと言える。

娯楽共有については、目標共有と同様に、弘前UターンとIターンで、サイズが大きい。また、いずれも、郊外定住と比較してゼロである確率が低い。中南津軽内移動のサイズが小さいのも、目標共有ネットワークと同じである。Jターンは、比較的サイズが小さい郊外定住と比較しても、存在確率、サイズともに有意な差がない。

表 5-47 共行動ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

移動パターン	目標共有						娯楽共有					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
弘前定住	0.74	0.56	ref	ref			0.74	0.56	ref	ref	-	
郊外定住	0.80	0.33			ref	ref	0.80	0.33	+		ref	ref
中南津軽内移動	0.81	0.10		--			0.81	0.10		-		--
弘前Uターン	0.79	0.94		+++		+++	0.79	0.94		+++	---	+++
郊外Uターン	0.69	0.54					0.69	0.54			-	
Jターン	0.83	0.60		++		+++	0.83	0.60				
Iターン	0.63	2.10		+++	--	+++	0.63	2.10	---	+++	---	+++
その他の県内出身者	0.75	0.48					0.75	0.48			---	

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

郊外定住が、弘前定住よりも娯楽共有ネットワークのサイズが小さいのは、近距離と逆の結果である。より都市的な環境では、娯乐的な関係が地理的に拡散するのであろう。この結果は、都市社会学的な先行研究(Fischer(1975)(1982))と一貫する。

(4) 遠距離の就職援助ネットワーク

(表 5-48) に、遠距離の就職援助ネットワーク・サイズの分布を示した。全体に存在確率が低いため、p90 までも示したが、弘前定住と中南津軽内移動では、就職の世話の値はそれでもゼロとなる。I ターンも就職の世話ネットワークが大きい、これまでほどの差はない。就職アドバイスネットワークでも、全体に値は高くなるものの、傾向は類似している。I ターンが突出する傾向は、さらに弱くなる。

表 5-48 就職援助ネットワークのサイズ（遠距離）

	就職の世話						就職アドバイス						回答者数
	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	
弘前定住	0.00	0.00	0.00	0.00	0.23	0.10	0.00	0.00	0.00	2.00	0.58	0.19	213
郊外定住	0.00	0.00	0.00	1.00	0.32	0.15	0.00	0.00	0.00	2.00	0.67	0.25	118
中南津軽内移動	0.00	0.00	0.00	0.00	0.12	0.10	0.00	0.00	0.00	1.00	0.19	0.16	83
弘前Uターン	0.00	0.00	0.00	1.00	0.57	0.13	0.00	0.00	0.00	2.00	0.71	0.20	149
郊外Uターン	0.00	0.00	0.00	2.50	0.47	0.21	0.00	0.00	0.00	2.50	0.60	0.24	70
Jターン	0.00	0.00	0.00	1.00	0.24	0.12	0.00	0.00	0.00	2.00	0.41	0.24	41
Iターン	0.00	0.00	1.00	2.00	0.72	0.31	0.00	0.00	1.00	3.00	0.98	0.30	54
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	1.00	0.34	0.18	0.00	0.00	0.00	3.00	0.60	0.23	108
合計	0.00	0.00	0.00	1.00	0.36	0.15	0.00	0.00	0.00	2.00	0.60	0.22	836

(表 5-49 と 50) に、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果と予測値を、それぞれ示した。まず就職の世話ネットワークであるが、全体に、存在確率は、近距離よりも低い。そのなかで、郊外UターンとIターンは、弘前定住よりも、ゼロの確率が低い。すなわち、就職の世話ネットワークの存在確率が3割台と高い。また、弘前Uターンは、存在確率は変わらないものの、サイズが大きく、差が有意となっている。つまり、県外生活の経験のある者が、遠距離に就職の世話ネットワークを有している。ここでも、例外はJターンである。

就職アドバイスネットワークには、移動パターンによる差がほとんどない。中南津軽内移動と、Jターンのネットワーク・サイズが小さいことから、中南津軽出身者が、出身地とは異なる自治体に居住しているときには、就職アドバイスネットワークのサイズは小さくなりやすいことがわかる。ただし、存在確率には有意な差はない。郊外定住と比較したときには、弘前Uターンのネットワーク・サイズは大きい。この差は、外れ値によるものではない。県外に、就職アドバイスを受けられる相手を、弘前Uターンは有しやすいと考えられる。

表 5-49 就職援助ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析 (遠距離)

	就職の世話		就職アドバイス	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
弘前定住(ref)				
郊外定住	-0.43 ⁺	-0.53 ⁺	-0.22	-0.15
中南津軽内移動	-0.01	-0.61	-0.50	-1.54 [*]
弘前Uターン	-0.18	0.64 ^{**}	-0.09	0.24
郊外Uターン	-0.78 ^{**}	-0.38	-0.34	0.06
Jターン	-0.27	-0.19	-0.62	-0.74 [*]
Iターン	-0.81 ^{**}	-0.20	-0.18	0.10
その他の県内出身者	-0.39 ⁺	-0.12	-0.17	-0.03
年齢	0.02 ^{***}	-0.01	0.01 [*]	-0.02 ^{***}
性別(女性=1)	-0.27 ⁺	-0.71 ^{***}	-0.16	0.17
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.05	0.25	-0.27 [*]	0.12
大学・大学院	0.18	0.58 ^{**}	-0.03	0.01
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.17	-0.39 ⁺	-0.02	0.26 ⁺
非正規雇用	0.08	-0.04	-0.07	-0.08
自営業・自由業	-0.20	0.53 [*]	-0.17	0.39 ⁺
配偶者あり	-0.10	0.14	-0.18	-0.02
子供あり	-0.19	-0.06	0.08	0.07
定数	0.63 ⁺	1.24 ^{**}	0.47	1.59 ^{***}
尤度比カイ二乗値(16)	75.75 ^{***}		68.72 ^{***}	
Vuongテストのz値	3.50 ^{***}		4.87 ^{***}	
回答者数	804		799	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-50 就職援助ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

移動パターン	就職の世話						就職アドバイス					
	予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 弘前定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測	0の 確率	人数	0予測	人数 予測	0予測	人数 予測
弘前定住	0.89	0.21	ref	ref	+	+	0.80	0.45	ref	ref		
郊外定住	0.78	0.24	-	-	ref	ref	0.73	0.51			ref	ref
中南津軽内移動	0.89	0.12					0.63	0.18		--		--
弘前Uターン	0.85	0.53		+++		+++	0.77	0.64				++
郊外Uターン	0.67	0.43	---				0.69	0.72				
Jターン	0.83	0.27					0.59	0.44		--		
Iターン	0.66	0.53	---				0.75	0.62				
その他の県内出身者	0.79	0.34	-				0.75	0.54				

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

弘前Uターンは、遠近どちらにも就職の際に援助を期待できる社会関係を有している。このネットワークが、回答者の期待通りに就職に際して有益な機能を果たすのであれば、弘前市内のUターン者は、弘前市内に定着しやすいのと同時に、再び県外に仕事を求めて流出する可能性があると言えるだろう。弘前市内と郊外とで、県外生活経験者の比率は、それぞれ46.18%と41.06%で大きな差はないが、郊外地域のほうが、地域外からの多様な資源を獲得する可能性が低いと言えるだろう。

8. 集団加入

社会関係は、個人的な縁や選択で成り立つ対人関係のみで構成される概念ではない。個人的な感覚はどうあれ、社会的な文脈（場や状況）を共有したとき、人と人の中には関係性が結ばれやすい(McPherson, Smith-Lovin, & Cook(2001); Mok et al.(2010))。そこでの関係は、これまで見てきたような、私的かつアクティブな関係や、サポートを期待する関係ではないかもしれないが、依然としてそのような重要な関係へと変化する可能性を秘めている。また、個人的な関係がなくとも、ある社会的文脈を共有していれば、言葉を交わし、ともに活動する可能性が生じる（職場における同僚のように）。

本調査では、10種の団体・組織に対する参加を、「非加入」「加入」「積極的に参加」の3カテゴリで測定していた。ただし、積極的参加者は非常に少数であった。そこで、積極的に参加とした回答者を加入とした回答者と合併し、参加の有無を目的変数としたプロビット回帰分析により、回答者の集団加入と地域間移動パターンとの関係を検討する。

（表 5-51、52）に、集団参加のプロビット回帰分析の結果と、そこから算出した参加

率の予測値を示した。全体としてわかるように、参加率は低く、そのために、移動パターンによる差も小さいものに留まる。明瞭な移動パターン差が明らかになるのは、参加率が過半と高い町内会・自治会である。ここでは、郊外定住における参加率の高さが明らかである。これと参加率が等しいのは、郊外Uターンであり、郊外地域で、出身地近辺に暮らす回答者は、町内会・自治会への参加率が高い。子ども会も、中南津軽内移動では有意な差はなくなるものの、やはり郊外定住の参加率が高い。氏子会も、郊外定住が弘前定住とIターンよりも明確に高い。

子どもの有無の効果が非常に大きいPTAと学童・幼児保育クラブ、女性に限定され、かつ参加率が非常に低い婦人会は、移動パターンによる差が確認できないが、町内会に代表される地域に密着した集団への参加は、郊外地域において盛んだと言える。このことが、これまでに見た、近距離での社会関係の豊かさにつながっているとも考えられる。

一方、地域の制約が弱い宗教団体、商店会・同業組合・労働組合、ボランティア・社会奉仕団体、趣味やスポーツのサークルや団体への参加については、ほとんど移動パターンによる差はない。Jターンのボランティア・社会奉仕団体への参加が突出して低いことは、注意を引く。このグループは、全体的に、社会関係が乏しい。どのような背景があるのか、精査が必要であろう。宗教団体への参加がIターンで突出して多いことも、解釈は難しい。少なくとも、宗教的な理由でIターンしてきた者が、回答者に含まれているわけではない。

表 5-51 集団参加のプロビット分析

	町内会 自治会	PTA	氏子会	子ども会	婦人会	学童/ 幼児保育 クラブ	宗教	商店会 同業組合 労働組合	ボラン ティア・ 社会奉仕	趣味やス ポーツ
移動パターン										
弘前定住(ref)										
郊外定住	0.36 *	0.31	0.48 *	0.81 ***	0.09	0.40	0.41 +	0.00	0.27	-0.33 +
中南津軽内移動	-0.09	0.27	0.31	0.63 *	0.06	-0.13	-0.08	-0.09	-0.17	-0.19
弘前Uターン	-0.20	0.25	0.01	0.16	-0.07	-0.09	0.22	0.13	-0.05	-0.12
郊外Uターン	0.03	0.10	0.45 +	0.66 *	0.42	0.26	0.22	-0.01	0.36 +	-0.24
Jターン	-0.37 +	0.25	0.27	-0.18	0.49	0.38	0.22	0.00	-0.57	-0.45 +
Iターン	-0.17	0.29	-0.42	0.26	0.27	0.45	0.74 **	-0.07	0.04	-0.03
その他の県内出身者	-0.23	0.34 +	-0.01	-0.02	-0.66	-0.48	-0.07	-0.03	-0.13	-0.18
年齢	0.03 ***	-0.06 ***	0.02 **	-0.05 ***	0.03 **	-0.06 ***	0.02 *	0.01	0.02 ***	0.01 *
性別(女性=1)	-0.01	0.23 +	-0.36 *	-0.05	0.89 ***	0.46 *	0.10	-0.58 ***	-0.56 ***	-0.33 **
学歴										
高校(ref)										
専門・短大・高専	0.25 *	0.32 *	-0.02	-0.12	-0.29	0.06	-0.41 +	0.07	0.33 *	0.34 **
大学・大学院	0.22	-0.01	0.28	-0.03	-0.03	0.01	-0.03	0.33 +	0.26	-0.13
就業形態										
無職(ref)										
正規雇用	-0.15	-0.01	-0.01	-0.07	-0.23	0.23	-0.02	0.51 *	-0.22	-0.28 *
非正規雇用	0.02	0.02	0.14	-0.15	-0.26	-0.20	-0.23	0.57 **	0.05	-0.13
自営業・自由業	-0.09	-0.05	0.28	-0.52 +	0.17	0.03	-0.34	1.23 ***	0.11	0.10
配偶者あり	0.44 ***	0.28	0.28	0.27	0.25	0.02	0.10	0.23	0.07	0.22
子供あり	0.41 **	2.15 ***	0.23	1.29 ***	-0.23	子どもありのみ	-0.16	-0.21	0.02	-0.03
定数	-1.80 ***	-0.57	-3.00 ***	-0.75 +	-4.09 ***	0.73	-2.49 ***	-1.84 ***	-2.26 ***	-1.04 ***
尤度比カイ二乗値(16)	189.07 ***	220.38 ***	53.26 ***	89.32 ***	49.24 ***	61.57 ***	25.15 +	85.61 ***	66.15 ***	52.43 ***
分散説明率	.16	.27	.12	.20	.19	.20	.07	.14	.11	.06
回答者数	860	808	810	808	803	596	814	820	821	825

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 5-52 集団参加の予測値と定住者との比較

移動パターン	町内会・自治会			PTA			氏子会			子ども会			婦人会		
	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住
弘前定住	0.64	ref	--	0.08	ref		0.04	ref	--	0.02	ref	---	0.01	ref	
郊外定住	0.76	++	ref	0.14		ref	0.10	++	ref	0.12	+++	ref	0.02		ref
中南津軽内移動	0.61		--	0.13			0.07			0.09	++		0.02		
弘前Uターン	0.56		---	0.12			0.04		-	0.04		--	0.01		
郊外Uターン	0.65			0.09			0.10	+		0.09	++		0.04		
Jターン	0.49	-	---	0.12			0.07			0.02		--	0.05		
Iターン	0.58		--	0.13			0.01		--	0.04		-	0.03		
その他の県内出身者	0.55		---	0.14	+		0.04		-	0.02		---	0.00		
	学童／幼児保育			宗教			商店会・同業組合			ボランティア			趣味やスポーツ		
移動パターン	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 弘前定住	vs. 郊外定住
弘前定住	0.04	ref		0.03	ref	-	0.09	ref		0.09	ref		0.27	ref	+
郊外定住	0.08		ref	0.08	+	ref	0.09		ref	0.14		ref	0.18	-	ref
中南津軽内移動	0.03			0.03			0.08			0.07			0.21		
弘前Uターン	0.03			0.05			0.12			0.08			0.23		
郊外Uターン	0.06			0.05			0.09			0.16	+		0.20		
Jターン	0.08			0.05			0.09			0.03		--	0.15	-	
Iターン	0.09			0.14	+++		0.08			0.10			0.26		
その他の県内出身者	0.01		--	0.03			0.09			0.07		-	0.22		

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

9. 小括

この章では、回答者の移動パターンと社会関係との関係を分析してきた。分析の論点として、地域社会に対する流入者、Uターン者の社会的統合と、橋渡し型社会関係資本としての遠距離関係を取り上げた。

全体として見たとき、特別に意外な状況があるわけではない。しかし、いくつかの重要な事実が明らかになったと言えよう。まず、地域的な活動については、弘前市郊外地域で、密な社会関係がある。それらは、自治会や氏子会、子ども会と言った地域的な活動と、中学校以前の、学校中心の関係を基盤として、サポータティブで、アクティブな関係を形成している傾向がある。全体として、豊かな社会関係があると考えてよい。郊外においては、Uターン者も、自身の出身自治体に帰還している限りにおいては、そうした社会関係に再統合されるようである。

一方で、弘前市内では、郊外地域ほどには強力な社会関係があるわけではない。多くの社会関係で、県外出身者やJターン者と、大きな違いが見られない状況である。相対的に都市的な弘前市内では、郊外地域よりも、地縁的な関係を維持するシステム的な基盤が弱いのだと考えられる。

Iターン者は、全体として、地域社会への統合が弱い。孤立しているかと問われれば、

そうとは言えない結果が多かったが、高校以前の関係のアクティブさも低く、地域的な活動からもアクティブな友人を得ておらず、近距離にはサポート資源が乏しい。

遠距離の関係、おそらくは移動元地域に在住する人々との関係によって、サポートは補われているため、個人としてIターン者の適応が低いとは、この調査から言うことはできない。むしろ、重要な問題として問われるのは、Iターン、さらにはJターンの経験者を、中南津軽の地域社会が十分に取り込むことができていない、という点にある。中南津軽、特に郊外地域の人々は、幼少期から積み上げた、強固な社会関係を地域に張り巡らせているから、さらなる社会関係を形成する必要性は薄いだらう。それがひとつの理由となって、流入者と積極的に関係を形成する動機が発生しにくいのだと考えられる。

しかし、地方が人口環流を考えると、あるいは、新たに地域の魅力を作り、発信しようとするとき、このような社会関係の固定性は障害となる。すでに述べたように、良好な社会関係は幸福感の源泉であり、社会関係から排除される地域に住もうと思う者はいない。そして、新たなアイディアは、地理的に拡散した、異質性のある他者との関係性をもつ移住者が持ち込む可能性が高い。今後の中南津軽地域の生き残りを考えても、移住者の存在は必要なのである。社会関係は個人の好みや利害で形成されるものであり、地域住民の意識と行動が、容易に変わるとは考えられない。移住者を受け入れる制度的な枠組みが必要だと考えられる。

社会関係が地元、地域由来で編まれる傾向の強い郊外地域では、それを活かしてUターン者を地域活動の核に据えていくのが有用かもしれないし、すでに、現実はそのようになっている可能性が分析から示唆された。困難な現実はあるが、この章の分析結果を踏まえるのであれば、単に人口の流入を期待するのではなく、中南津軽地域の出身者のUターンを促進するのがより現実的であろう。

ただし、本調査では回答者の人数の問題から、IターンとJターンについては、現住所が弘前市内なのか、郊外なのかを区別できなかった。現実には、これらの回答者は弘前市内に居住しているケースが多いから、Jターン者の社会関係、特に近隣関係の弱さは、都市的な環境によって生じている部分もあると考えられる。その他の県内移動者も同様である。郊外にI Jターンした人々の社会的統合については、郊外地域に特に注目した調査によって明らかにされる必要がある。また、本調査のデータを、別の角度から分析することも必要だと考えられる。

[参考文献]

- Burt, R. S. (2002). Bridge decay. *Social Networks*, 24(4), 333-363. doi: 10.1016/s0378-8733(02)00017-5
- Festinger, L., Schachter, S., & Back, K. (1950). *Social pressures in informal groups*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Fischer, C. S. (1975). Toward a subcultural theory of urbanism. *American Journal of Sociology*, 80(6), 1319-1341. doi: doi:10.1086/225993
- Fischer, C. S. (1982). *To dwell among friends: personal networks in town and city*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Granovetter, M. S. (1973). The strength of weak ties. *American Journal of Sociology*, 78(6), 1360-1380.
- 狭間諒多朗・吉川徹 (2014). 全国調査データで見る地域文化活動の「平均像」 刈谷剛彦(編) 「地元」の文化力：地域の未来のつくりかた 河出書房新社 pp. 171-193.
- Hipp, J. R., & Perrin, A. J. (2009). The simultaneous effect of social distance and physical distance on the formation of neighborhood ties. *City & Community*, 8(1), 5-25. doi: 10.1111/j.1540-6040.2009.01267.x
- 石黒格 (2012). 地域間移動は地元の人間関係を壊すか 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子 「東京」に出る若者たち ミネルヴァ書房 pp. 91-118.
- 刈谷剛彦 (2014). 参加のパラドクスと地域社会のゆくえ 刈谷剛彦(編) 「地元」の文化力：地域の未来のつくりかた 河出書房新社 pp. 195-221.
- Kossinets, G., & Watts, D. J. (2009). Origins of homophily in an evolving social network. *American Journal of Sociology*, 115(2), 405-450.
- Lewis, P. A., Rezaie, R., Brown, R., Roberts, N., & Dunbar, R. I. M. (2011). Ventromedial prefrontal volume predicts understanding of others and social network size. *Neuroimage*, 57(4), 1624-1629. doi: 10.1016/j.neuroimage.2011.05.030
- McPherson, M., Smith-Lovin, L., & Cook, J. M. (2001). Birds of a feather: Homophily in social networks. [Review]. *Annual Review of Sociology*, 27, 415-444.
- Mok, D., Wellman, B., & Carrasco, J. (2010). Does distance matter in the age of the Internet? *Urban Studies*, 47(13), 2747-2783. doi: 10.1177/0042098010377363
- Pollet, T. V., Roberts, S. G. B., & Dunbar, R. I. M. (2013). Going That Extra Mile: Individuals Travel Further to Maintain Face-to-Face Contact with Highly Related Kin than with Less Related Kin. *Plos One*, 8(1). doi: 10.1371/journal.pone.0053929
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: the collapse and revival of American community*. New York, NY: Simon & Schuster.

- Putnam, R. D., Leonardi, R., & Nanetti, R. (1992). *Making democracy work: Civic traditions in modern Italy*. Princeton: Princeton University Press.
- Roberts, S. G. B., & Dunbar, R. I. M. (2011). The costs of family and friends: An 18-month longitudinal study of relationship maintenance and decay. *Evolution and Human Behavior*, *32*(3), 186-197. doi: 10.1016/j.evolhumbehav.2010.08.005
- Roberts, S. G. B., Wilson, R., Fedurek, P., & Dunbar, R. I. M. (2008). Individual differences and personal social network size and structure. *Personality and Individual Differences*, *44*(4), 954-964.

第6章 中南津軽地域の女性のUターン移動経験について

山口 恵子

1. 問題設定

(1) 先行研究

本稿の目的は、女性の生活と移動経験について、とくに地方から県外へと生活を移し、そしてまた地元に戻ってくるというUターン移動の動向について、明らかにすることである。

日本におけるUターン移動に関する研究は、戦前・戦後にわたって少なくない。まず蘭信三は、先行研究を整理し、大都市から地方へのUターンの動向について、Uターンを主体的に選択したのかあるいは周囲の状況から仕方なく行ったのかという「自主—受動軸」と、Uターンが主として地方からのpull要因によって選択されたのか、あるいは都市でのpush要因で行われたのかという「地方pull—都市push」軸の2軸を用いて、Uターン者の類型化を行い、(a) 自主的家族・人間関係志向型 (b) あきらめの家族・人間関係志向型 (c) 地元発展型 (d) 都会みかぎり型 (e) 都会不適応型 (f) 引退型の6つの類型とその特性を仮説的にまとめている(蘭(1994))。

より近年の研究としては、江崎雄治らは、長野県と宮崎県出身の男性を事例としてUターン傾向の調査を行い、就職後の早い段階でUターンは起こっており、そのきっかけは「親の面倒をみるため」「豊かな自然環境の中で生活したくなった」など、地元のpull要因が主要であったことを指摘している(江崎ほか(1999, 2000))。また、西野淑美と石倉義博は、岩手県釜石市を対象とした総合調査(希望学プロジェクト)から、世代ごとに進学率や移動と就職の状況が異なっていること、より新しい世代がUターン率は高く、かつ転出後10年以内という早い時期にUターン行動が起こっていることを指摘している(西野(2009a); 石倉(2009))。さらに大学進学率の増大を受け、山口泰史らはより学歴を絞り、山形県庄内地域を事例として、新規男性大卒者のUターン移動と就職の実態について明らかにし、Uターン時の職業において高卒との学歴代替が生じていること、さらに卒業して職を得ないままUターンするケースが増加傾向にあるという(山口ほか(2010))。

以上のような研究は、その調査・分析対象の多くが男性であった。これに対して、よりジェンダーの視点を持った研究として、まず安藤由美は、沖縄出身者の本土移動と帰還行動について、那覇都市圏の市民意識調査から、「Uターン経験率」が女性は男性に比べて少なく、しかも時代が下がるにつれて減少傾向にあることを指摘している(安藤(2014))。さらに、とくに女性を対象とした研究として、先の西野は同じく釜石調査のデータを用いて、女性は初職地から移動しないことによって正規雇用を持続する効果があること、また学歴の効果

が地域によって違いがあることを明らかにしている（西野(2009b)）。さらに同様の釜石調査から、永井暁子は女性の婚姻状態と地域移動との関係を分析し、未婚や離婚の経験は経済的資源の少なさ等と関連していること、そして離死別、特に若い世代の離別が故郷への U ターンで多い傾向があるとし、故郷が離別者の受け入れ先として機能していることを指摘している（永井(2010)）。

(2) 研究目的

以上のように、U ターン移動の現象について、さまざまな研究が行われてきているが、まず蘭の整理は、U ターン移動のバリエーションをその意識を含めて丁寧に示しているものの、主に 1970 年代の調査を参照しており、現代の社会構造を踏まえていない。江口らの研究は、現代的な U ターン移動のメカニズムに関して、その移動のきっかけについての意識を問うているが、意識を持っただけでは移動はできず、それを可能にした具体的な条件を知る必要があると考えられた。とくに筆者の大都市に住む青森県出身の若者への聞き取り調査では、地元に戻ることを余儀なくされている若者の存在がみてとれ（山口(2012)）、経済の低成長と雇用の流動化が続く現代の状況を踏まえて、人々の移動のきっかけや条件はより丁寧にみていく必要があると思われる。

さらに、先行研究からは、性別によって U ターン移動の動向が異なることが予想されるが、研究に乏しい。それは女性の場合、結婚・出産などによってその社会的地位や生活が変化し、学歴獲得や就業との関連が男性に比べて見えにくいということがあっただろう。しかし、先の西野は、「女性の階層という問いは、単に複雑ということではなく、地位達成過程という観点で個人のライフコースを眺める視線や、そもそもライフコースを意思に貫かれた整合性のあるものとして眺める視線に対して、そう眺めることのメカニズムを詰めることを要求してくるのではないか」として、ジェンダー差や場所性、地域移動の視点を取り入れることの意義を指摘している（西野(2009b : 226)）。

加えて、近年では実践的にも、地方の人口減少をくいとめるために地域に女性をとどめ、戻し、また新しく取り込んで、人口の再生産を可能にすることが政策課題となっている。そうしたニーズをはかるためにも、女性の生活と移動経験への注目は必要であろう。

そこで本稿では、地元から県外へと生活に移し、そしてまた戻ってくるという女性の U ターン移動の理由や条件の動向に注目する。以下、まず女性の現在の家族と就業状況について、移動経験別に概観する。次に青森県出身者のみを取り出して、県外への移動理由や U ターンの状況、およびそうした移動経験者が青森県内で生活することへの意識について分析する。最後に小括を行う。

2. 現在の家族と就業の状況

(1) 家族の状況

まずは、青森県中南津軽地域の女性がどのような家族と就業の状況にあるのか、回答のあった女性全体（561 ケース）について、県外への移動経験（県外での生活経験）の有無にて、定住層（344 ケース）と移動層（217 ケース）とに分け、比較しつつみていこう。

表 6-1 は現在の家族形態を示している。全体としては、三世帯世帯が 20.1%、核家族世帯が合わせて 65.9%、単独世帯（ひとり暮らし）が 8.3%である¹⁾。移動経験別では、定住層は親と未婚の子の核家族世帯が 19.8%と移動層に比べて比率が高く、一方、移動層では単独世帯が 11.2%と比較的高くなっている。

表 6-1 世帯の家族類型

世帯の状況	通称	定住層	移動層	合計
		N=343	N=214	N=557
配偶者有り、親世代以上同居、子ども有り	（三世帯世帯）	16.6%	13.6%	15.4%
配偶者無し、親世代以上同居、子ども有り	（三世帯世帯）	3.5%	6.5%	4.7%
配偶者有り、親世代以上別居、子ども無し	（夫婦のみの核家族世帯）	12.5%	15.9%	13.8%
配偶者有り、親世代以上別居、子ども有り	（夫婦と子の核家族世帯）	28.3%	27.1%	27.8%
配偶者無し、親世代以上同居、子ども無し	（親と未婚の子の核家族世帯）	19.8%	11.7%	16.7%
配偶者無し、親世代以上別居、子ども有り	（ひとり親と子の核家族世帯）	6.7%	8.9%	7.5%
配偶者有り、親世代以上同居、子ども無し	（核家族以外の世帯）	6.1%	5.1%	5.7%
配偶者無し、親世代以上別居、子ども無し	（単独世帯）	6.4%	11.2%	8.3%
合計		100.0%	100.0%	100.0%

注： $p<.05$

次に、表 6-2 は実家に帰るのに必要な時間を示している。全体としては、実家暮らしが 28.3%で、30 分未満 40.3%、1 時間未満 17.7%であり、合わせて 86.3%が同居および近居で、親族の援助を受けやすい、および援助をしやすい場所に居住していた。移動経験別には、移動層は実家と離れている傾向にあり、とくに 3 時間以上の遠距離の比率が 13.4%と高い。移動層には、他県の出身で婚姻により青森県内に引っ越してきた層が一定含まれており、そうしたことが反映していると考えられる。

表 6-2 実家との距離

	定住層	移動層	合計
	N=332	N=209	N=541
今は実家で暮らしている	30.7%	24.4%	28.3%
30 分未満	44.3%	34.0%	40.3%
30 分～1 時間未満	18.1%	17.2%	17.7%
1～3 時間未満	6.3%	11.0%	8.1%

3 時間以上	0.6%	13.4%	5.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

注: $p < .01$

(2) 就業状況

次に現在の就業状況であるが、先に、一般的に就業状況と関連が強い学歴を確認しておきたい。表 6-3 によると、全体としては高校程度が 49.9%と圧倒的に比率が高く、低学歴である（中退者も含む）。移動経験別では、定住層は高校や短大・高専程度の比率が高く、逆に移動層は大学・大学院程度の比率が高くなっている。移動層には大学への進学のために県外に出る場合があること、県外出身者は大学程度の場合が多いことから、高い比率になっていると考えられる。

表 6-3 学歴

	定住層 N=344	移動層 N=217	合計 N=561
小・中学校	6.7%	7.4%	7.0%
高校	52.0%	46.5%	49.9%
短大・高専	14.8%	9.2%	12.7%
大学・大学院	8.7%	18.0%	12.3%
専門学校	17.7%	18.9%	18.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

注: $p < .01$

表 6-4 は現在の就業状況を示している。全体としては、正規の職員・従業員とパート・アルバイトが 25%強とほぼ同じ割合であり、一方で収入になる仕事をしていない層が 32.5%である。別の章で言及されているのでここで詳細は触れないが、この就業状況の男性との差は大きく、性別役割分業によるジェンダー不平等のなかで、正規雇用が少なく、そして主婦層が含まれるため、収入になる仕事をしていない比率は高い。

移動経験別には統計的に有意な差がなかった。先の学歴では差がみられたにもかかわらず、就業状況では差がないという結果は、分析によると男性でも同様の傾向であった。おそらく、現在の従業上の地位は、移動経験などの経歴ではなく、この地域の労働市場の動向に強く影響を受けているということであろう²⁾。

表 6-4 現在の就業状況

	定住層 N=330	移動層 N=206	合計 N=536
正規の職員・従業員	29.4%	21.8%	26.5%
パート・アルバイト	24.2%	27.2%	25.4%
派遣・契約・委託社員	6.7%	6.8%	6.7%
自営	3.9%	2.4%	3.4%
家族従業	5.8%	5.3%	5.6%
収入になる仕事はしていない	30.0%	36.4%	32.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

注: *n.s.*

表 6-5 は、その収入になる仕事をしている層について、どのような仕事についているのか、現在の仕事の職種を示している。全体としては、専門技術職 23.4%、サービス職 20.3%、事務職 19.4%が多い。見逃せないのは、管理職がたったの 1.4%に過ぎないことであろう。男女共同参画事業などにおいて女性の管理職への登用が強くうたわれているが、いまだ限定的であることが分かる。移動経験別では、定住層に専門・技術職が多くなっているのに対して、移動層はサービス職が多くなっている。

表 6-5 現在の仕事の職種

	定住層 N=228	移動層 N=127	合計 N=355
管理職	0.9%	2.4%	1.4%
専門・技術職	27.2%	16.5%	23.4%
事務職	19.3%	19.7%	19.4%
販売職	9.2%	9.4%	9.3%
営業職	3.5%	1.6%	2.8%
サービス職	15.8%	28.3%	20.3%
製造・生産職	13.6%	8.7%	11.8%
農林水産関係	9.2%	11.0%	9.9%
その他	1.3%	2.4%	1.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

注: $p < .10$

3. 地域移動の理由や条件について

(1) 移動経験の概要

以上を踏まえたうえで、ここからは移動の理由や条件をより詳細にみていこう。先述したように、女性のうちで県外への移動経験（県外での生活経験）がある移動層は 217 ケースであったが、ここでは U ターンの状況をクリアにするために、事情がやや異なる県外出身者を除き、青森県出身者（中学校の所在地が青森県内と回答している層）である 177 ケースに注目する。つまり、ここで対象とする U ターン層とは、青森県出身の女性で青森県外にて生活した経験があると回答し、かつ現在青森県内（中南津軽地域）に居住している者となる。したがって、いわゆる J ターン者もこの中に含まれる。その県外での生活の理由と、県内に戻った時に、なぜその地域に戻ったのか、戻った直接のきっかけやそれを可能にした条件などの、より詳細な移動の状況について検討する。その際、時代の変化とともに世代によって基本的な生活や経験が異なることから、20～49 歳の低年齢層（1965 年以降の生まれ）、50～70 歳の高年齢層（1964 年以前の生まれ）の 2 つの年齢層に留意しつつ進める。

まず、表は省くが、U ターン移動の時期や意識について先に確認しておこう。女性の 68.6%（107 ケース、以下、%のあとのカッコ内はすべてケース数を示す）が 20 代までに U ターンしており、30 代も加えると、86.5%（135）となる。男性と女性とで有意な差はなかった。こうした早期に帰還する傾向は、先行研究の知見とほぼ一致しており（江崎ほか（1999、2000）西野（2009a）、石倉（2009））、本調査でも検証された。

さらに、青森に引っ越してくる以前から青森県内で生活したいという望みがあったかどうかという問いに対して、55.1%（86）が「いつかは青森で生活したいと望んでいた」、15.4%（24）が「すぐにでも青森で生活したいという望みがあった」と回答している。つまり、約 7 割がもともと青森に戻る希望を持っていたことが分かる。沖縄県的那覇都市圏における U ターンに関する市民意識調査（2008 年実施、男女を含む）でも 66.7%がこうした帰郷志向を持っていることが明らかになっており（安藤（2014））、少なくとも日本の周縁部の地域ではこうした志向が高いといえるかもしれない。

(2) 青森県外で生活していた理由

では、なぜ人々は青森県外で生活していたのだろうか。表 6-6 はその理由を示している（複数回答）。年齢別にかかわらず最も多い理由は、「自分がその地域で働いていたから」という理由であり、半数前後の女性が、少なくとも自分の仕事の都合で県外で生活していたとしている。

年齢層ではやや傾向が異なり、学校に通う年齢に近い低年齢層は「自分がその地域の学校に通っていたから」が 28.6%と高く、結婚している可能性が高い高年齢層は、夫がその地域で働いていたという回答が 30.9%と高い。結婚をしている女性はパートナーとの関係の中で移動が行われやすいことが分かる。

表 6-6 青森県外で生活していた理由(複数回答)

	低年齢層		高年齢層		
	%	ケース	%	ケース	
自分がその地域の出身だから	1.4%	1	1.0%	1	
自分がその地域の学校に通っていたから	28.6%	20	11.3%	11	**
自分がその地域で働いていたから	55.7%	39	47.4%	46	
妻や夫がその地域の出身だから	2.9%	2	1.0%	1	
妻や夫がその地域の学校に通っていたから	0	0	0	0	
妻や夫がその地域で働いていたから	8.6%	6	30.9%	30	**
両親の仕事などの都合	1.4%	1	1.0%	1	
子どもの通学、仕事などの都合	4.3%	3	5.2%	5	
その他(具体的に:	5.7%	4	9.3%	9	

注:** $p<.01$ 、* $p<.05$ 、+ $p<.10$

表は省くが、住んでいた地域(2回以上の経験がある場合はもっとも最近の地域)は、低年齢層が東京都 29.4% (20)、神奈川県 16.2% (11)、宮城県 14.7% (10)、北海道 13.2% (9) と高い。高年齢層は、東京都 34.7% (34)、神奈川県 18.4% (18) と高く、あとの地域は 10%未満の比率となっている。つまり、年齢層に関わらず集中するのはやはり東京と神奈川の大都市圏であるが、より近年になると政令指定都市である仙台市を抱える宮城県、札幌市を抱える北海道などの近隣の大都市へと移動が広がっているということであろう。

(3) 県内に戻った理由や条件

さて、こうした県外での生活をへて、青森に戻って現在住んでいる地域を選んだのはなぜなのだろうか。表 6-7 からは、実家の影響が非常に大きいことが見て取れる。すなわち、年齢層にかかわらず最も多いのは自分の「実家に戻ったから」という理由で、低年齢層で 64.3%、高年齢層で 37.4%を占めている。「配偶者の実家で同居するから」は、低年齢層 10.0%、高年齢層 25.3%と高年齢層が高くなっている。自分の実家に近いという理由も少なくなく、自分および配偶者の実家の影響は大きいものである。

一方、自分の「仕事場・通学先に近いから」という理由も年齢に関わらず 1割強を占めている。そして有意差はないが、高年齢層の場合は配偶者や子どものことが理由にあがる傾向がみてとれよう。なお、「自然環境、居住環境に魅力があった」にも若干の回答があるが、決して多くはなく、買い物・交通などの利便性についても少数であることには留意しておこう。

表 6-7 現在の地域に住むことになった理由(複数回答)

	低年齢層		高年齢層		
	%	ケース	%	ケース	
実家に戻ったから	64.3%	45	37.4%	37	**
実家に近いから	10.0%	7	15.2%	15	
配偶者の実家で同居するから	10.0%	7	25.3%	25	*
配偶者の実家に近いから	5.7%	4	3.0%	3	
仕事場・通学先に近いから	12.9%	9	11.1%	11	
配偶者の仕事場・通学先に近いから	4.3%	3	10.1%	10	
買い物に便利だから	0.0%	0	2.0%	2	
娯楽施設があるから、趣味の活動に便利だから	0.0%	0	0.0%	0	
交通の便がよいから	0.0%	0	4.0%	4	+
子どもの学区や通学の便を考えて	7.1%	5	10.1%	10	
その他、子どものことを考えて	2.9%	2	7.1%	7	
友人や恋人がいた	4.3%	3	3.0%	3	
地域の活動や行事に参加していた、してみたかった	0.0%	0	0.0%	0	
地域の住民に魅力があった	0.0%	0	0.0%	0	
自然環境、居住環境に魅力があった	2.9%	2	8.1%	8	
その他	1.4%	1	4.0%	4	

注: ** $p < .01$ 、* $p < .05$ 、+ $p < .10$

では、県外生活を経て、人々はなぜ戻ってきたのだろうか、表 6-8 は帰還の直接のきっかけを示している(複数回答)。これは年齢層によってばらつきがあった。

まず低年齢層は、最も多いのは「仕事を自分から辞めた」31.4%で、次が「学校を卒業した」20.0%となっている³⁾。低年齢層の場合は、何らかの事情で仕事を自分から辞めて実家に戻る、ということが想定されよう。その他、「今の地域、またはそこから通える範囲に就職した」「転勤や配置転換」などの仕事の事情が多くあがっている。

一方、高年齢層は、「特に問題はないが、親に実家に戻るように言われた」22.7%が最も多くなっていた。これは分析によると、とくに 60 代の高年齢層が多く回答する傾向にあり、若い頃に親の指示のもとに戻ってきたということであろうか。また「仕事を自分から辞めた」「転勤や配置転換」などの仕事の関連はやはり一定の回答がある。

さらに年齢層で大きな差があるわけではないが、「家族が怪我や病気をした」という回答も 1 割近くを占めているのも見逃せないだろう。

表 6-8 青森県内に引っ越してきた直接のきっかけ(複数回答)

	低年齢層		高年齢層		
	%	ケース	%	ケース	
家族が怪我や病気をした	8.6%	6	11.3%	11	
家族の介護が必要になった	2.9%	2	7.3%	7	
実家の家業に問題が発生した	2.9%	2	1.0%	1	
特に問題はないが、親に実家に戻るよう言われた	11.4%	8	22.7%	22	+
自分が結婚した	1.4%	1	7.2%	7	+
子どもが産まれた	1.4%	1	1.0%	1	
子どもが小学校や中学校にあがった	0.0%	0	1.0%	1	
子どもが高校に進学した	0.0%	0	2.1%	2	
家を買った	1.4%	1	4.1%	4	
学校を卒業した	20.0%	14	5.2%	5	**
今の地域、またはそこから通える範囲に就職した	15.7%	11	5.2%	5	*
転勤や配置転換	12.9%	9	17.5%	17	
転職先が青森県内で見つかった	2.9%	2	5.2%	5	
自分が怪我や病気をした	4.3%	3	3.1%	3	
仕事を自分から辞めた	31.4%	22	18.6%	18	+
解雇された／契約が切れた	2.9%	2	5.2%	5	
友人や仲間に誘われた	0.0%	0	1.0%	1	
親戚に誘われた	0.0%	0	3.1%	3	
その他の知人に誘われた	0.0%	0	0.0%	0	
移住支援事業など、自治体の働きかけがあつて	0.0%	0	0.0%	0	
その他	4.3%	3	5.2%	5	

注:** $p<.01$ 、* $p<.05$ 、+ $p<.10$

ところで、青森に帰ることを意識しても、帰ることができる条件が整わなければ、実際の移動は難しい。表 6-9 は青森に引っ越すことを可能にした具体的な条件を示している(複数回答)。抜きん出て多いのは、「実家に住むことができた」という条件で、とくに低年齢層において多い。「家族から、生活について援助が受けられた」という回答とも考えあわせると、やはり先にも触れたように帰郷において実家の存在は大きいものである。先述したように、2007 年の釜石を対象とした調査では、U ターン者の 4 人に 3 人が U ターン後、親と同居していることが明らかになっており、親との同居は経済的に合理的な行動であるという(石倉 2009)。本調査でも同様の傾向が指摘できるだろう⁴⁾。

高齢層では「実家以外に、住む家や土地があった」という回答もやや多いが、これはおそらく配偶者の実家を指していると思われる。そのほか、年齢層で差はないが「勤務先に、支

店や支部があった」という仕事の条件も一定の割合を占めている。

表 6-9 青森に引っ越すことを可能にした条件(複数回答)

	低年齢層		高年齢層		
	%	ケース	%	ケース	
実家に住むことが出来た	77.5%	55	62.5%	55	*
実家以外に、住む家や土地があった	5.6%	4	13.6%	12	+
家族から、生活について援助が受けられた	12.7%	9	13.6%	12	
親戚から、生活について援助が受けられた	0.0%	0	0.0%	0	
友人、知人、恋人から、生活について援助が受けられた	1.4%	1	0.0%	0	
引っ越すことについて、家族の理解があった	9.9%	7	8.0%	7	
勤務先に、支店や支部があった	14.1%	10	13.6%	12	
転職して、定職に就く見込みがあった	5.6%	4	9.1%	8	
定職に就けなくても、生活していける見込みがあった	7.0%	5	11.4%	10	
子どもが自立していた	0.0%	0	0.0%	0	
生活のコストが安かった	4.2%	3	1.1%	1	
自治体による移住支援があった	0.0%	0	0.0%	0	
その他	0.0%	0	1.1%	1	

注: ** $p<.01$ 、* $p<.05$ 、+ $p<.10$

ただし、青森県内に戻ったときには、かなりの収入の減少があったようである。表 6-10 は青森に戻ってきたときの収入の変化を示している。年齢層に関わらず「かなり下がった」とする回答が多いが、とくに高年齢層は 55.8%と高くなっている。たとえ実家に住むことができたり、仕事のめどがあったりしても、そうした収入減は痛いものであつたらう。

表 6-10 青森に引っ越してきたときの収入の変化

	低年齢層	高年齢層	合計
	N=64	N=77	N=141
かなり上がった	7.8%	1.3%	4.3%
少し上がった	3.1%	3.9%	3.5%
ほとんど変わっていない	32.8%	18.2%	24.8%
少し下がった	15.6%	20.8%	18.4%
かなり下がった	40.6%	55.8%	48.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

注: $p<.10$

(4) 県内で生活することへの意識

先に、約 7 割の回答者が青森に戻る以前から青森県内で生活したいという望みがあったことに言及したが、最後に、その望んでいた理由と望んでいなくなった理由について検討しよう。それは県内での生活にどのようなニーズや改善点があるのか、という政策的な課題にもつながるだろう。

まず、表 6-11 は青森で生活したいという望みを持っていた人々の理由である(複数回答)。年齢層に関わらず最も多いのは、「親の近くにいたほうが安心だから」というもので、7 割弱の回答があった。そのほか、「青森のほうが、生活環境がよさそうだった」「青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた」と青森の環境をポジティブに評価する回答が 2 割前後ある。一方、「親の面倒を見たり、介護したりするため」「実家やお墓を継ぐため」という家族的責任を意識した回答も、前者が 2 割 5 分、後者が 1 割 5 分と一定の割合を占める。多くがこうした家族関係を理由にあげていることが分かる。

表 6-11 青森で生活したいという望みを持っていた理由(複数回答)

	低年齢層		高年齢層		
	%	ケース	%	ケース	
実家やお墓を継ぐため	15.6%	7	15.9%	10	
家業を継ぐため	2.2%	1	3.2%	2	
親の面倒を見たり、介護したりするため	28.9%	13	25.4%	16	
親の近くにいたほうが安心だから	68.9%	31	65.1%	41	
青森でやりたい仕事があった	8.9%	4	6.3%	4	
仕事以外に、青森でやりたい活動があった	2.2%	1	0.0%	0	
青森のほうが、仕事が見つかりやすかった	4.4%	2	3.2%	2	
青森のほうが、労働環境がよさそうだった	2.2%	1	4.8%	3	
地域に貢献したいという気持ちがあった	6.7%	3	0.0%	0	*
青森に通いたい学校があった	0.0%	0	1.6%	1	
青森に友人や恋人がいた	17.8%	8	6.3%	4	+
青森のほうが、生活環境がよさそうだった	31.1%	14	22.2%	14	
青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた	20.0%	9	15.9%	10	
今いる町自体に魅力があった	2.2%	1	0.0%	0	
自治体の移住支援が充実していた	0.0%	0	0.0%	0	
都会の生活が自分に合わなかった	6.7%	3	9.5%	6	
その他	2.2%	1	1.6%	1	

注: ** $p < .01$ 、* $p < .05$ 、+ $p < .10$

逆に、表 6-12 は青森に戻る以前から青森では生活したいと思っていなかった層の理由である（複数回答）。全体のケースが非常に少ないのであるが、年齢層にかかわらず、「青森にはやりたい仕事がなかった」「青森には仕事がなさそうだった」「青森のほうが、労働環境が悪そうだった」という仕事に関する点に回答が多い。また、「以前いた地域のほうが生活環境がよかった」「親から離れていたかった」という点にも一定の回答があった。

表 6-12 青森で生活したいと思っていなかった理由（複数回答）

	低年齢層		高年齢層		
	%	ケース	%	ケース	
実家やお墓を継ぎたくなかった	0.0%	0	4.2%	1	
家業を継ぎたくなかった	0.0%	0	4.2%	1	
親の面倒を見たり、介護したりするのが嫌だった	0.0%	0	4.2%	1	
親から離れていたかった	31.8%	7	20.8%	5	
青森にはやりたい仕事がなかった	45.5%	10	25.0%	6	
仕事以外の、やりたいと思う活動が青森にはなかった	27.3%	6	12.5%	3	
青森には仕事がなさそうだった	31.8%	7	37.5%	9	
青森のほうが、労働環境が悪そうだった	27.3%	6	37.5%	9	
以前にいた地域に貢献したいという気持ちがあった	4.5%	1	4.2%	1	
青森には通いたいと思える学校がなかった	4.5%	1	0.0%	0	
青森には友人や恋人がいなかった	4.5%	1	4.2%	1	
以前いた地域のほうが、生活環境がよかった	36.4%	8	29.2%	7	
以前いた地域のほうが、子どもを育てるのによかった	0.0%	0	12.5%	3	+
以前いた町自体に魅力があった	18.2%	4	0.0%	0	*
その他	13.6%	3	0.0%	0	+

注：** $p < .01$ 、* $p < .05$ 、+ $p < .10$

4. 小括

(1) まとめ

まとめよう。まず、中南津軽地域の女性の現在の家族と就業の状況について、家族形態は、核家族が 6 割 5 分、三世代世帯が 2 割を占めていた。実家との距離は、全体としては 9 割弱が実家で同居および一時間以内の近居であり、実家と密接な関係を持てる状況にある。移動経験別には県外出身者を一定含む移動層は 3 時間以上の遠距離の比率が高かった。現在の就業状況は、正規の職員・従業員とパート・アルバイトが 2 割 5 分程度とほぼ同じ割合であり、一方で収入になる仕事をしていない層が 3 割強である。その職種は、定住層に専

門・技術職が多いのに対して、移動層はサービス職が多い。全体として管理職はごくわずかにすぎなかった。

次に、その女性の移動層のなかで、青森県出身者にしぼって U ターンの動向をみたところ、9 割弱が 30 代までに U ターンしており、7 割近くがもともと青森に戻る希望を持っていた。その県外で生活していた理由は、基本的には半数近くが自分の仕事の都合であり、加えて低年齢層は学校への通学、高年齢層は夫の仕事の都合をあげる傾向にあった。移動先は東京都と神奈川県が多いが、低年齢層は宮城県と北海道にも広がっていた。

それから青森に戻り、現在の地域に住むことになった理由や引っ越すことを可能にした条件は、圧倒的に自分や配偶者の実家の存在が大きく、特に低年齢層はその傾向が強かった。そして結婚をしている女性が多く含まれる高年齢層は、配偶者との関係の中で移動が行われやすかった。青森に戻った直接のきっかけは、年齢層によってかなりばらつきがあり、低年齢層は、仕事を自分から辞めたという回答が 3 割強と多く、その後、実家に戻ったことが想定される。また、学校を卒業するという契機も 2 割ほどあった。一方、高年齢層は親に実家に戻るように言われたという回答が 2 割強と比較的多かった。さらに年齢層であまり差がないが一定の回答があったものに、就職・転勤・配置転換などの仕事の都合に関するものと、家族が怪我や病気をしたという家族の都合がある。こうして青森に戻ってきたが、半数近くの人収入がかなり下がったと感じており、とくに高年齢層にその傾向が強かった。

最後に、青森へ戻る希望を持っていた層は、7 割弱が親の近くにいることへの安心をあげており、そのほか、青森の環境をポジティブに評価するものや、家族的責任を意識した回答が多かった。逆に戻る希望を持っていなかった層は、その多くが仕事の問題をあげていた。

(2) 今後に向けて

このようにみえてくると、江口らの研究で指摘されたような男性の意識面のみの pull 要因を強調した U ターン移動の理由は一面的なものであることが分かる。

まず、女性にとって、家族との関係（親や配偶者、子どもなど人間関係や家屋などの資産も含む）は非常に密接であり、U ターンの動向に大きな影響を及ぼすことが分かる。そのうえで、年齢層に関わらず U ターンできるのは圧倒的に実家が存在することが大きかった。そして低年齢層では、仕事を辞めて避難的に実家に戻っているであろう層が浮き彫りになった。つまり、実家に住むことの経済的な合理性や家族の情緒的援助の側面がある。対して高年齢層では、若いときに親の指示のもとで戻ったり、配偶者や子どもの都合とすり合わせるなど、親や家族との関係のなかで移動が行われる傾向が強かった。よく知られているように、性別役割分業のなかで家族のケアを女性が担いやすく、地域移動においてもそうした傾向は顕著であった。

7 割近くが青森への帰郷の希望をもともと持っており、その帰郷の希望を持っていた人々の理由として、親の近くにいることへの安心感が高い割合を占めていたこと、およびとくに低年齢層で生活環境や子育て環境へのよいイメージの比率が高いことから、少なくとも

実際に戻ってきた女性たちにとっては、青森はポジティブな評価を受けていることが分かる。そして、実家の家屋や家族は一時的にせよ避難所的な役割、および長期のセーフティネットとして役割を果たす側面があろう。

しかし、親や家族との関係のなかで移動が行われやすい状況や、家族的責任への意識の高さは、必ずしもポジティブな側面だけを意味しないだろう。女性が性別役割分業によるジェンダー不平等と経済的に不利な状況におかれているなかで、そうせざるをえない状況にあることも考えられるからである。女性にとって魅力的な地域であるためには、まずは、「男尊女卑」や、女性が家族のケアの役割を担うことを当然視する意識や態度を改める必要がある。もちろん、女性個人や家族にすべての負担を押し付けることのないように、子育て環境や介護環境を政策的に整えることはいままでもない。

また、県外で仕事をやめてすぐに実家に戻っている低年齢層の女性には、そのまま青森県内で仕事をみつけ、生活を安定させることができるような就労支援が必要であろう。青森では生活したいと思っていなかった理由において仕事へのネガティブな意識の比率が高かったことから、そうした面が改善されることは重要であるといえる。

最後に、量的調査では表れにくく、今回の分析でも注目ができなかったが、家族との関係性が脆弱になった場合には、より危機的な状況になることが予想される。女性のひとり親家庭や高齢単身者に貧困が集中するなどの格差があることについては多くの指摘がある（白波瀬(2005)ほか）。そうした層を放置することなく、政策による包摂をはかることは重要であると考えられる。

[注]

- 1) ここでの家族類型はシンプルにするために、ごく少なかった兄弟姉妹の関係や、「その他」の同居人などは考慮に入れていない。
- 2) なお、先の西野による女性データの分析では、初職地から移動しないことによって正規雇用を持続する効果があること、また、高卒者の釜石定住は、職業キャリアの継続を強めるが、高卒者の U ターンは結婚時に職業キャリアの中断につながっており、一方で進学者については、U ターンした場合も初職から外に出た場合も、職業キャリアが継続していた（西野 2009b）。本調査でも、有意な差はなかったが、傾向としてはやはり定住層の方が正規雇用についている比率が高い傾向にあり、同様のことが予想される。
- 3) 本調査は複数回の経験がある人の場合、最新の U ターンの状況のみを聞いているので、学校の割合は低めの値になっていると思われる。
- 4) キャサリン・S・ニューマンは、成人した子どもと親からなる複数世代の同居世帯（多世帯家族）をアコーディオン・ファミリーと呼び、それが日本に特有なものではなく、1990 年代以降のグローバル競争の激化と労働コストの削減が進められた先進国に共通してみられるようになったと指摘している（ニューマン 2013）。もともと成人した子どもとの同居が多かった日本でも、同時期において増加したのかどうか、それが日本の経済・雇用条件の悪化

などを反映したものなのか、検討の余地がある。

[引用文献]

- 安藤由美, 2014, 「成人期への移行と U ターン」 谷富夫・安藤由美・野入直美編『持続と変容の沖縄社会——沖縄的なるものの現在』 ミネルヴァ書房, 45-64.
- 蘭信三, 1994, 「都市移住者の人口還流——帰村と人口 U ターン」 松木通晴・丸木恵祐編『都市移住の社会学』 世界思想社, 166-198.
- 江崎雄治・荒井良雄・川口太郎, 1999, 「人口還流現象の実態とその要因——長野県出身男性を例に」『地理学評論』 72(10), 645-667.
- 江崎雄治・荒井良雄・川口太郎, 2000, 「地方圏出身者の還流移動——長野県および宮崎県出身者の事例」『人文地理』 52 (2), 190-203.
- 石倉義博, 2009, 「地域からの転出と『U ターン』の背景」 東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学 [3] 希望をつなぐ——釜石からみた地域社会の未来』 東京大学出版会, 205-236.
- 永井暁子, 2010, 「釜石の結婚問題」『社会科学研究』 61(5・6), 87-99.
- 西野淑美, 2009a, 「釜石市出身者の地域移動とライフコース」 東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学 [3] 希望をつなぐ——釜石からみた地域社会の未来』 東京大学出版会, 163-204.
- 西野淑美, 2009b, 「岩手県釜石市出身女性の地域移動とライフコース」『都市政策研究』 3, 203-231.
- キャサリン・S・ニューマン著、萩原久美子・桑島薫訳, 2013, 『親元暮らしという戦略——アコーディオン・ファミリーの時代』 岩波書店.
- 白波瀬佐和子, 2005, 『少子高齢社会の見えない格差——ジェンダー・世代・階層のゆくえ』 東京大学出版会.
- 山口恵子, 2012, 「大都市に就職した工業高校卒業生の地元意識」 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子『「東京」に出る若者たち——仕事・社会関係・地域間格差』 ミネルヴァ書房, 195-227.
- 山口泰史・江崎雄治・松山薫, 2010, 「新規大卒者の U ターン移動と就職——山形県庄内地域の事例」『季刊地理学』 62(4), 211-221.

第7章 出生順位はUJIターンに影響したのか

李 秀 眞

1. 研究の背景および目的

本章では、出生順位とUJIターンの関係について注目する。出生順位は親世代への支援に対する規範意識を決定づける主な要因の一つであると考えられる。岩井・保田(2008)は、「既婚男性および既婚女性は自分の親を援助すべき」という規範意識と実際の親への支援が平行な関係にあることを確認している。また、宍戸(2008)は、「家」意識と父系への援助関係を検討し、「家」意識が強い人ほど、夫側親への支援が多いと指摘している。

兄妹姉妹の有無が親への支援に影響することを明らかにした研究もある。白波瀬(2005)は、女性で男兄弟がいる場合、女性が自分の親へ与える経済的支援は少なくなるとしている。親扶養への規範や兄妹姉妹の存在が実際の親の扶養を決める要因であるという先行研究にもとづき、本章では、親扶養への規範意識を表す指標として出生順位に着目する。そして、UJIターンをする地域移動行動の根柢に親への扶養意識があるのではないかという問題意識をもって、出生順位とUJIターン地域移動との関係を明らかにすることを目的とする。分析に当たって、出生順位は、長男、長女、長男ではない、長女ではないという4区分にする。

2. 分析結果

2-1. 出生順位および年齢階層による特性

(1) 出生順位とUJIターンの形態

表7-1には、出生順位とUJIターンの形態の関係を示した。長男の場合、定住者が42.1%、Uターン者が40.3%で約8割を占めている。長男ではない場合でも、定住者とUターン者を合わせれば7割程度を占める。しかし、Jターン、Iターンに注目すると、長男に比べてJターン、Iターンをしている割合がやや高いのが特徴である。長女の場合、定住者が52.8%で半数以上を占めている。一方、長女はない場合でも定住者

の割合が54.0%でもっとも高く、出生順位による差であるよりは女性であることが県外での生活経験の少なさに影響しているのではないかと推測される。ただ、約半数の定住者を除いた場合、長女と長女でない人でUターン者の割合がそれぞれ4割と約2割強であることをみると、女性でも出生順位として長女であることは、県外の生活から地元に戻ってくる要因ではあると考えられる。

表7-1 出生順位とUJIターンの形態

(段位: %、N=979)

	定住者	Uターン者	Jターン者	Iターン	県内からの流入者	合計
長男	42.12	40.29	4.03	4.4	9.16	100
長女	52.82	40.47	3.26	7.72	15.73	100
長男ではない	34.48	35.17	8.28	9.66	12.41	100
長女ではない	54.02	23.66	5.80	6.25	10.27	100

(2) 出生順位と親との同居状態

本節では、分析対象者の出生順位による特性についてみていく。出生順位と年齢階層別の特性を検討する。親と同居している世帯のみを対象として、親との同居状態を自分の親と同居しているのか、配偶者の親と同居しているのかを確認した（表7-2参照）。

表7-2 出生順位と親との同居状態

(段位: %, N=445)

親との同居状態		自分の親と同居する	配偶者の親と同居する
長男	20代	100.0	0.0
	30代	95.7	4.4
	40代	93.8	6.3
	50代	86.0	14.0
	60代	93.8	6.2
長女	20代	16.7	83.3
	30代	33.3	66.7
	40代	46.2	53.9
	50代	44.0	56.0
	60代	50.0	50.0
長男ではない	20代	100.0	0.0
	30代	92.31	7.7
	40代	52.9	47.1
	50代	30.0	70.0
	60代	50.0	50.0
長女ではない	20代	0.0	100.0
	30代	33.3	66.7
	40代	59.1	40.9
	50代	63.6	36.4
	60代	100.0	0.0

注:親と同居している世帯のみ対象として集計

長男で20代、30代は自分の親と同居する人の割合が他の年齢階層より多いことが特徴的である。長男ではない場合の20代、30代も他の年齢階層に比べ自分の親と同居する割合が多い。この結果は、子育てに対する支援をうけるなど、子世代のニーズによって親との同居を選択した可能性も伺わせる。20代、30代以外の年齢階層では、長男か、長男ではないかによって自分の親と同居している割合には大きな差がみられ、30代、40代、50代で長男でない人は、配偶者の親との同居割合が約半数を超えている。長女の場合はどうなのだろうか？長女で20代、30代の場合、配偶者の親と同居している割合が多く、特に20代では8割を超えている。長女ではない場合の20代、30代でも配偶者の親との同居割合が自分の親との同居割合より多く、さらに他の年齢階層のそれよりも高い。男性同様、女性でも20代、30代では出生順位によって親との同居を決めるというより、子世代のニーズが反映された結果であると考えられる。ただ、長女であっても自分の親よりは配偶者の親との同居率が高いことは、子育てに対する支援などを夫側の親からもらうという現状があるのではないかと推測される。

(3) 地域移動パターンと親との同居状態

表7-3は、地域移動パターン別に親との同居状態を検討したものである。表7-1と同様、現在、親と同居している人のみを分析対象とした。長男か長男ではないかによって、親との同居状態は異なるのだろうか。定住者の場合には、長男か長男ではないかに関わらず、自分の親と同居している割合が9割を超えているが、特に長男の場合、97.3%が自分の親と同居している。Uターン者、Jターン者の場合、長男でUターン者である人の9割が自分の親と同居しているが、長男でない場合はその割合は6割に留まり、4割が配偶者の親と同居している。長男であることがUターン要因の一つであることが推察される。もう少し解釈を付け加えたとしたら、ここで直接的に検証できなかったが、長男であることは、長男の親扶養意識に影響していて、それらの規範意識が親元へ帰ることへつながる構図があるように思える結果である。女性の場合はどうか。女性の場合は、長女で定住者であっても自分の親と同居する割合は約3割で、約7割は配偶者の親と同居していることが確認できる。長女でUターン者の場合でも、7割を超える人が配偶者の親と同居していて、女性にとって自分の出生順位はUターン要因として強く作用しているとは言いがたい結果であった。女性の配偶者の出生順位は確認できず、断定することはできないが、おそらく夫の出生順位との関連もあると考えられる。

表7-3 地域移動パターン別親との同居状態

(段位: %, N=445)

地域移動パターン別親との同居状態		自分の親と同居する	配偶者の親と同居する
長男	定住者	97.3	2.7
	Uターン者	91.3	8.7
	Jターン者	66.7	33.3
	Iターン	50.0	50.0
	県内からの流入者	100.0	0.0
長女	定住者	33.3	66.7
	Uターン者	22.6	77.4
	Jターン者	100.0	0.0
	Iターン	83.3	16.7
	県内からの流入者	73.3	26.7
長男ではない	定住者	90.9	9.1
	Uターン者	63.2	36.8
	Jターン者	20.0	80.0
	Iターン	50.0	50.0
	県内からの流入者	28.6	71.4
長女ではない	定住者	44.9	55.1
	Uターン者	34.8	65.1
	Jターン者	100.0	0.0
	Iターン	100.0	0.0
	県内からの流入者	100.0	0.0

注:親と同居している世帯のみ対象として集計

2-2. 出生順位および年齢階層別地域移動の理由にみられる特性

本節では、県外の生活経験者を対象とし、出生順位および年齢階層別に、地域移動の理由に関する特徴を検討する。

(1) 出生順位と年齢階層別にみる青森県内に引っ越してくることを可能にした条件

20代の長男の場合、特徴としてみられるのは、‘実家以外に住む家や土地があった’、‘実家から、生活について援助が受けられた’を理由としてあげた割合が他の年齢階層より多い。さらに、長男で30代、40代においても実家からの生活援助は、青森県内への引っ越しを可能にした条件であったとみられる。一方、長女の場合、20代、30代、40代の若い世代ほど、実家に住むことができた’ことをあげた割合が多く、これらの結果は、20代でもっとも目立つ。50代、60代においては、他の年齢階層より

‘実家以外に、住む家や土地があった’ことをあげた割合が多い。

また、長女の場合、長男の場合に比べ‘実家から生活について援助が受けられた’ことは、県内引っ越しの要因になったとみられる。

表7-4 出生順位と年齢階層別にみる青森県内に引っ越してくることを可能にした条件

(段位: %、N=459)

青森県内に引っ越してくることを可能にした条件		実家に住むことができた	実家以外に、住む家や土地があった	実家から、生活について援助が受けられた	引っ越すことについて、家族の理解があった
長男	20代	44.4	11.1	22.2	11.1
	30代	60.0	4.0	16.0	20.0
	40代	50.0	6.7	13.3	6.7
	50代	52.6	5.3	5.3	7.9
	60代	73.0	8.1	8.1	10.8
長女	20代	75.0	0.0	12.5	12.5
	30代	60.0	5.0	20.0	5.0
	40代	53.1	6.3	18.8	15.6
	50代	44.8	13.8	17.2	6.9
	60代	57.1	10.7	14.3	7.1
長男ではない	20代	66.7	0.0	0.0	33.3
	30代	58.3	25.0	0.0	8.3
	40代	52.9	0.0	23.5	23.5
	50代	30.0	10.0	5.0	20.0
	60代	23.3	33.3	6.7	10.0
長女ではない	20代	66.7	0.0	33.3	33.3
	30代	76.9	7.7	0.0	7.7
	40代	58.8	11.8	11.8	0.0
	50代	66.7	11.1	16.7	11.1
	60代	57.1	17.9	3.6	10.7

注: 各項目について、‘当てはまる’と回答した人の割合を示したものである。

(2) 出生順位と年齢階層別にみる現在の地域に住むことになった理由

ここでは、現在の地域に住むことになった理由について、出生順位と年齢階層別に確認した。長男で20代の場合、‘仕事先あるいは通学先に近い’ことをあげた人の割合がもっとも多く5割以上を占めている。一方、30代は‘実家に戻ったから’、

‘実家に近いから’という理由が多くの人からあげられているが、前項でも確認できたように、実家からの生活援助があり、実家暮らし、あるいは実家の近くに暮らすことは子世代にニーズによるものである状況が伺える。

現在住む地域を選んだ理由として、‘実家に戻ったから’に注目してみると、長男と長女で年齢階層別の特徴がかなり異なることは興味深い。長男の場合、年齢階層が上がるにつれて、‘実家に戻ったから’を理由としてあげた人の割合は増加するのに対して、長女の場合には、若い世代ほど、この理由をあげた人の割合が多い。親と同居している人を対象として、同居しているのは、自分の親なのか、配偶者の親なのかを確認した前節の結果では、長女であっても自分の親よりは配偶者の親との同居が多かったが、どの程度の女性が自分の親と同居しているのかについての議論は別にしても、女性が自分の親との同居を理由にして住まう地域を決定するという傾向に世代別の変化があるといえる結果である。

また、長男ではない場合、同じ理由をあげた人の割合を年齢階層別にみると、長男の場合と異なり、若い世帯ほど、この理由をあげた人の割合が高く、長男と長男ではない人で‘実家に戻る’ことの意味が同じではない可能性が伺える。すなわち、長男ではない場合の実家暮らしは親を扶養するという意味より、親から援助してもらう意味があるのではないかと推察できる。

表7-5 出生順位と年齢階層別にみる現在の地域に住むことになった理由

(段位 : %, N=459)

現在の地域に住むことになった理由		実家に戻ったから	実家に近いから	配偶者の実家で同居するから	配偶者の実家に近いから	仕事先/通学先に近いから	配偶者の仕事場/通学先に近いから
長男	20代	33.3	0.0	0.0	0.0	55.6	0.0
	30代	60.0	28.0	4.0	0.0	24.0	8.0
	40代	64.5	3.2	6.5	6.5	32.3	3.2
	50代	73.7	2.6	5.3	0.0	23.7	0.0
	60代	80.0	5.0	0.0	2.5	27.5	2.5
長女	20代	75.0	0.0	12.5	0.0	12.5	12.5
	30代	50.0	10.0	5.0	10.0	35.0	15.0
	40代	38.7	9.7	9.7	9.7	12.9	19.4
	50代	26.7	16.7	26.7	3.3	10.0	23.3
	60代	25.8	12.9	19.4	9.7	16.1	16.1
長男ではない	20代	66.7	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0
	30代	66.7	8.3	0.0	0.0	16.7	0.0
	40代	35.3	5.9	29.4	11.8	17.7	5.9
	50代	42.9	4.8	28.6	0.0	33.3	0.0
	60代	25.0	3.1	6.3	15.6	28.1	0.0
長女ではない	20代	66.7	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0
	30代	61.5	7.69	7.7	0.0	0.0	23.1
	40代	41.2	5.9	35.3	5.9	5.9	11.8
	50代	41.7	4.2	29.2	0.0	12.5	4.2
	60代	36.7	16.7	26.7	10.0	10.0	10.0

注: 各項目について、'当てはまる'と回答した人の割合を示したものである。

2-3. 出生順位および年齢階層別にみた青森県内生活への望み

(1) 長男・長女は青森県内で生活したいという望みがつよいのか。

では、長男・長女であることは、青森県内で生活したいという望みを強くするのだろうか。‘いつかは青森で生活したいと望んでいた’という項目に注目すると、長男で20代がもっとも回答割合が低く、30代でその割合がもっとも高い。一方、長女では、50代でこの回答割合がもっとも高く6割に上る。長男ではない人と、長女ではない人がどれぐらい、青森での生活を望んでいるのかをみてみよう。長男でない20代は2割に満たない人がこの項目に回答していて、長男で20代の人々の回答割合と2倍以上の差をみせている。他の年齢階層でも長男か、長男ではないかによって青森県内での生活望みの回答に差がみられるものの、20代で長男と長男でない人での回答の差は目を引くところである。

それでは‘青森で生活したいと思っていなかった’という回答に目を向けるとどうだろうか。長男で20代の人々の回答割合がもっとも高く4割強を占めていて、60代は16.7%で回答割合がもっとも低い。また、長女で30代の人々の回答割合がもっとも高く約6割を占めている。一方、長女で40代がその回答割合がもっとも低い。長男か長女かに

よる、この回答の差をみると、全体的に長男の回答割合は長女に比べて低い。特に、長男と長女の間で回答に差がみられる年齢階層は30代であった。これらの差を生む要因については、ここでの分析からは特定することは難しいが、今後追求していく必要があるだろう。

表7-6 出生順位および年齢階層別にみた青森県内生活への望み

(段位: %, N=459)

青森県内で生活したいという望み		いつかは青森で生活したと望んでいた	すぐにでも青森で生活したという望みがあった	青森で生活したいと思っていなかった
長男	20代	44.4	11.2	44.4
	30代	64.0	12.0	24.0
	40代	60.0	20.0	20.0
	50代	50.0	22.2	27.8
	60代	50.0	33.3	16.7
長女	20代	37.5	12.5	50.0
	30代	27.8	16.7	55.6
	40代	58.1	19.4	22.6
	50代	62.1	0.0	37.9
	60代	48.2	24.1	27.6
長男ではない	20代	16.7	16.7	66.7
	30代	41.7	25.0	33.3
	40代	52.9	0.0	47.1
	50代	47.4	15.8	36.8
	60代	51.9	18.5	29.6
長女ではない	20代	0.0	33.3	66.7
	30代	30.8	30.8	38.5
	40代	31.3	6.3	62.5
	50代	47.6	9.5	42.9
	60代	58.3	8.3	33.3

注: 各項目について、'当てはまる'と回答した人の割合を示したものである。

(2) 出生順位と年齢階層別にみる県内生活を望んだ理由

出生順位と年齢階層別に、県内生活を望んだ理由を確認した(表7-7参照)。長男で20代の場合、親の面倒をみたり、介護するためを理由にあげた人は6割ある一方、親の近くにいたほうが安心だからという理由をあげた人も6割存在する。親の面倒をみるのに、近くにあることが安心な場合もあるだろうが、親からの援助も受けられることがこのような結果になったと考えられる。一方、長女の場合、どの年齢階層でも

‘親の近くにいたほうが安心だから’という理由をあげている人の割合がもっとも高く、長男である人の回答との差が明確にみられるところである。すなわち、‘親の近くにいたほうが安心だから’というにはさらに多様な理由が存在しうると考えられるが、長男の場合と比べて長女でこの理由をあげた人が年齢階層に関わらず高いことは、おそらく自分の親と同居はしないあるいはできないが、すぐに訪問できる距離にいる状態を望んでいると解釈することも可能であろう。

表7-7 出生順位と年齢階層別、県内生活を望んだ理由

(段位: %, N=273)

青森県内で生活したいという望みがあった理由		実家やお墓を継ぐため	家業を継ぐため	親の面倒をみたり、介護したりするため	親の近くにいたほうが安心だから
長男	20代	40.0	0.0	60.0	60.0
	30代	31.6	10.5	21.1	36.8
	40代	55.0	20.0	25.0	35.0
	50代	50.0	19.2	46.2	30.8
	60代	65.5	17.2	34.5	17.2
長女	20代	25.0	0.0	0.0	75.0
	30代	0.0	0.0	37.5	50.0
	40代	8.3	0.0	25.0	62.5
	50代	16.7	0.0	27.8	61.1
	60代	4.8	0.0	28.6	57.1
長男ではない	20代	0.0	0.00	0.0	100.0
	30代	12.5	12.50	37.5	25.0
	40代	22.2	11.11	33.3	44.4
	50代	8.3	0.00	8.3	41.7
	60代	10.5	10.53	5.3	15.8
長女ではない	20代	100.0	0.0	100.0	100.0
	30代	37.5	12.5	37.5	62.5
	40代	16.7	0.0	16.7	83.3
	50代	36.4	9.1	18.2	63.6
	60代	13.3	6.7	26.7	73.3

注: 各項目について、'当てはまる'と回答した人の割合を示したものである。

(3) 実家に戻ることは地域移動をさせる要因になるのか。

ここでは、前項で取り上げた回答のうち、‘青森で生活したいと思っていなかった’と回答した人のみを対象として、実家、あるいは配偶者の実家で親と同居するこ

とが、地域移動をさせる要因になったのかを検討する（表7-7参照）。長男の場合、青森で生活したいと思っていなかったのに、実家に戻った人の割合は半数を超えている。長女の場合、実家に戻った割合は25%、配偶者の実家で同居する人は17.5%である。一方、青森で生活したいと望んでなかった長男ではない、長女ではない人で、それぞれ約3割が実家に戻っている。また、それぞれ15.6%、20.6%が配偶者の一家で同居していることが確認できた。実家に戻ることが、地域に戻ってくるのに、どれぐらゐの影響力をもったのかはこの数値から明言することが難しい。ただ、実家に戻って生活するということは、地域移動を説明する一つの要因として位置づけることは可能であろう。さらに、付け加えると長男にかかる親扶養意識はかなりの影響力をもつと推察できよう。

表7-8 青森で生活したいと思っていなかった人が戻った理由

(段位: %, N=140)

青森で生活したいと思っていなかった人が戻った理由	実家に戻ったから	配偶者の実家で同居するから
長男	54.8	0.0
長女	25.0	17.5
長男ではない	31.3	15.6
長女ではない	31.4	20.6

注: 各項目について、'当てはまる'と回答した人の割合を示したものである。

3. 小括

本章では、親扶養への規範意識を表す指標として出生順位に着目し、U J I ターンをする地域移動行動の根柢に親への扶養意識があるのではないかという問題意識をもって、出生順位とU J I ターン地域移動との関係を明らかにした。

本章での結果をもとに、特に若い世代の地域移動および地域定着について考察を行いたい。長男にしろ、長男でないにしろ、20代、30代は自分の親と同居する人の割合が他の年齢階層より多い点、また、長女の場合でも、長女でない場合でも20代、30代の場合、配偶者の親と同居している割合が多い点に注目したい。この結果に対して、子育て等に対する支援を親からうけるなど、子世代のニーズによって 地域移動、また地域に定着するに当たって、親との同居を選択した可能性も伺わせると解釈するこ

とができた。すなわち、若い世代、特に子育て世代にとって親から生活および子育てへのサポートがあることが定住するあるいはU J Iターンしてくる要因になることであろう。しかし、子育て世代の子育て支援を家族のみに頼ることは無理があり、かつ望ましくないと考えられる。すなわち、子育てサポートの役割を若い子育て世代の親世代の責任として位置づけるのではなく、都会では成し遂げられない子育てサポート仕組みを発展させることによって、若い世代が地域移動および地域に定着できる環境を整えることは今後の課題であろう。

【参考文献】

- 岩井紀子・保田時男，2008，「世代間支援における夫側と妻側のバランスについての分析—世代間関係の双系化論に対する実証的アプローチ」『家族社会学研究』20(2)：34-47.
- 宍戸邦章，2008，「実親。義親への世代間援助にみる「家」の原理」『日本版General Social Surveys 研究論文集』7：1-12.
- 白波瀬佐和子，2005，「少子高齢社会の世代間支援」『少子高齢社会のみえない格差—ジェンダー・世代・階層のゆくえ—』東京大学出版会，135-160.

回答者集計表

中南津軽地域住民の仕事と生活に関する調査 集計表

n = 1000

計画数 2000 回収率 1000/1880=0.532

対象以外回答 15 サンプルングミス 105

問1 あなたの性別を教えてください 42.6 1. 男 53.7 2. 女 DKNA 0.1

問2 あなたの生年月をおうかがいします。 西暦 () 年 () 月
平均 49.3 歳 median 51 歳 min.20 歳 max.70 歳 DKNA 2.4

問3 あなたは、現在結婚していますか。

69.0 1. 結婚している 10.8 2. 離別・死別した 19.9 3. 結婚していない DKNA 0.3

問4 お子さんはいますか。

26.9 1. いない 72.6 2. いる → 一番下のお子さんは () 歳 DKNA 0.5
該当者 711 人中 平均 22.0 歳 median 23 歳 min 0 歳 max 50 歳 DKNA 2.8

問5 現在、あなたはどなたと同居していますか。一緒に暮らしている方**すべてに○をつけて**
ください。**一人暮らしの方は、「12. 一人暮らし」に○をつけてください。**

64.6 1. 夫や妻 19.4 2. 自分の父 29.4 3. 自分の母 5.8 4. 舅(夫や妻の父)
12.3 5. 姑(夫や妻の母) 10.0 6. 兄弟姉妹 35.2 7. 息子 32.7 8. 娘
1.7 9. 祖父 6.0 10. 祖母
0.4 11. その他(具体的に:)
6.8 12. 一人暮らし
DKNA 0.6

問6 現在、住んでいる家の世帯主はどなたですか。

64.6 1. 自分 31.1 2. 夫や妻 20.4 3. 自分の父母 5.8 4. 舅・姑(夫や妻の父母)
0.9 5. 兄弟姉妹 1.2 6. 息子・娘 1.4 7. 祖父母 0.2 8. 夫や妻の祖父母
0.5 9. その他(具体的に:)
DKNA 0.2

問7 実家まで帰るのに、どのくらい時間がかかりますか。

40.0 1. 今は実家で暮らしている

31.2 2. 30分未満 12.9 3. 30分～1時間未満 5.0 4. 1～2時間未満

1.6 5. 2～3時間未満 5.5 6. 3時間以上 DKNA 3.8

問8 あなたは長男、または長女ですか。

40.0 1. はい 12.9 2. いいえ

DKNA 0.6

問9 現在、お住まいの地域はどこですか。

63.6 1. 弘前市 11.8 2. 黒石市 10.8 3. 平川市 0.5 4. 西目屋村 5.6 5. 藤崎町

4.5 6. 大鰐町 3.2 7. 田舎館村 0 8. その他(具体的に:)

DKNA 0.5

問10 あなたが通った、または現在通っている学校についてお聞きします。

(1) あなたが卒業した中学校の所在地はどこですか。

45.5 1. 弘前市 11.9 2. 黒石市 10.9 3. 平川市 0.6 4. 西目屋村 5.0 5. 藤崎町

5.0 6. 大鰐町 3.1 7. 田舎館村 3.4 8. 青森市 0.8 9. 八戸市

7.8 10. それ以外の青森県内

6.6 11. 青森県外(都道府県名:) 0.1 12. 国外 DKNA 0

(2) あなたが最後に通った、または通っている学校は、次の中のどれにあたりますか。

7.9 1. 小学・中学校 51.7 2. 高校 8.4 3. 短大・高専

17.2 4. 大学・大学院 14.8 5. 専門学校 DKNA 0

(3) その学校は、どこにありますか(ありましたか)。

51.2 1. 弘前市 9.3 2. 黒石市 4.8 3. 平川市 0.2 4. 西目屋村 1.8 5. 藤崎町

1.9 6. 大鰐町 0.3 7. 田舎館村 7.6 8. 青森市 0.3 9. 八戸市

6.8 10. それ以外の青森県内

15.3 11. 青森県外(都道府県名:) 0.4 12. 国外 DKNA 0

(4) その学校を卒業しましたか、それとも中途退学しましたか。

92.9 1. 卒業した

5.0 2. 中途退学した

2.4 3. 現在通っている

DKNA 0.1

問 11 現在の仕事についてお聞きします。

(1) 家業の手伝いも含めて、ふだん何か収入になる仕事をしていますか。

26.1 1. 仕事をしていない → (2) ~ (12) は飛ばして、5 ページの間 12 にお進みください

71.5 2. 仕事をしている → (2) ~ (12) にお答えください

DKNA 2.4

(2) 先週一週間で働いたのは何日で、労働時間は合計すると何時間ですか。

該当者 700 人中

() 日働いて、労働時間は合計 () 時間くらい

労働日数 平均 5.2 日 median 5 日 min 0 日 max 7 日 DKNA 4.9

労働時間 平均 38.8 時間 median 40 時間 min 0 時間 max 90 時間 DKNA 5.3

(3) 通勤時間は、往復で何分くらいですか。

該当者 700 人中

12.1 1. 自宅で仕事をしている

85.1 2. 通勤には往復で () 分くらいかかる

DKNA 2.7

該当者 596 人中 平均 44.1 分 median 30 分 min 1 分 max 480 分 DKNA 0.3

(4) 現在の仕事で得られる収入はどれくらいですか。月収と年収の両方を、税引き前の金額でお答えください。

該当者 700 人中

月 () 万円くらいで、年 () 万円くらい

月 平均 22.1 万円 median 17 万円 min 0 万円 max 400 万円 DKNA 9.1

年 平均 287.2 万円 median 216 万円 min 12 万円 max 3600 万円 DKNA 7.9

(5) 現在の仕事の勤務先（職場）はどの地域にありますか。

該当者 700 人中

62.9 1. 弘前市 8.9 2. 黒石市 7.0 3. 平川市 0.9 4. 西目屋村 3.4 5. 藤崎町
 3.0 6. 大鰐町 1.1 7. 田舎館村 5.3 8. 青森市 0 9. 八戸市
 3.1 10. それ以外の青森県内
 1.4 11. 青森県外（都道府県名： ） 0 12. 国外 DKNA 3.0

(6) 現在の仕事について、次のようなことに満足していますか、不満ですか。

該当者 700 人中

	満足	まあ満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	DKNA
	↓ 1	↓ 2	↓ 3	↓ 4	↓ 5	
a. 総合的に	12.0	40.1	24.1	11.9	8.7	2.6
b. 収入	8.7	27.4	23.1	21.0	17.4	2.3
c. やりがい	15.1	38.7	28.4	8.1	7.0	2.6
d. 労働時間	13.1	25.7	26.1	11.3	10.7	3.0
e. 福利厚生	12.9	25.7	27.4	12.6	14.3	7.1
f. 自宅と勤務地の距離	32.7	35.7	15.7	7.6	4.1	4.1
g. 仕事と私生活のバランス	13.6	31.7	30.3	14.7	8.3	2.1

(7) あなたの仕事は、次のどれに当たりますか。複数の仕事についている方は、**もっとも近い職種に○**をつけてください。

該当者 700 人中

- 5.6 1. 管理職……………会社・官庁・団体の役員や管理職など
- 20.1 2. 専門・技術職……………専門的で高度な知識や技術が必要な仕事
法律家、医師・看護師、芸術、教育・保育職、研究・開発、
技術者・エンジニア、プログラマ、パイロットなど
- 14.1 3. 事務職……………会社・官庁・団体などの事務職
- 7.3 4. 販売職……………店員、販売員など、直接個人のお客と接する仕事
- 3.6 5. 営業職……………会社、営業所などとの交渉や販売に関わる仕事
- 13.9 6. サービス職……………ウェイター、調理、接客担当、美容師、介護など
- 5.1 7. 技能職……………整備士、大工、左官、配管工、技能工など
- 1.4 8. 保安職……………自衛官、警察官、消防士、警備員など
- 12.1 9. 製造・生産職……………工場勤務者、建設作業者
- 10.6 10. 農林水産関係……………農業、林業、水産業、食品加工
- 2.0 11. 運輸業……………タクシー、バス、トラックなどの運転手
- 0.7 12. その他の仕事（具体的に： _____)

DKNA 3.4

(8) あなたのお仕事は、勤めでしょうか、自営でしょうか。

該当者 700 人中

- 4.1 1. 家業の手伝い
 - 14.0 2. 自営業または会社経営
- } → 5 ページの間 12 にお進みください
- 81.4 3. 雇われている → (9)にお進みください

DKNA 0.4

(9) 勤め先での立場を教えてください。

該当者 570 人中

- 59.8 1. 正規の職員・従業員
- 0.9 2. 会社役員
- 27.4 3. パート、アルバイト
- 1.6 4. 派遣社員
- 9.1 5. 契約社員・委託
- 0.4 6. その他（具体的に： _____)

DKNA 0.9

(10) 勤め先の企業全体の従業者数を教えてください。

該当者 570 人中

5.8	1. 1～4名	29.1	2. 5～29名	19.7	3. 30～99名
15.6	4. 99～299名	27.9	5. 300名以上		DKNA 1.9

(11) 今の職場に勤め始めてどれくらいになりますか。

() 年と () ヶ月くらい
該当者 570 人中 平均 12.7 年 median 9 年 min 0 年 max 44 年 DKNA 9.3

(12) 今の仕事をどうやって見つけましたか (○はいくつでも)。

該当者 570 人中

7.9	1. 新聞・雑誌・チラシの求人広告	2.8	2. ネットの求人情報
27.0	3. ハローワーク、ジョブカフェなど	1.4	4. 民間の職業紹介所
0.7	5. 合同会社説明会のようなイベントで	16.0	6. 学校の紹介
4.7	7. 両親の紹介	6.8	8. 両親以外の家族、親戚の紹介
14.7	9. 親しい友人の紹介	3.7	10. あまり親しくない知りあいの紹介
10.5	11. 前の職場でできた知りあいの紹介		
7.4	12. その他 (具体的に :)

DKNA 1.2

ここからは、すべての方に生活経験のある地域についてお聞きします

問 12 青森県外で生活した経験はありますか。

53.6	1. ない	} → 9 ページの問 15 にお進みください
27.4	2. 一回だけある	
9.5	3. 二回ある	
9.7	4. 三回以上ある	
	→ () 回	} → 問 13 と問 14 にお答えください

該当者 95 人中 平均 4.7 回 median 4 回 min 1 回 max 30 回 DKNA 39.0

問 13 県外での生活経験についてお聞きします。

- (1) そのとき住んでいた地域はどこですか。二回以上経験がある方は、もっとも最近生活していた地域についてお答えください。

該当者 454 人中

96.1	1. 国内	()	都道府県	()	市区町村
1.3	2. 国外				DKNA 2.6

- (2) その県外の地域で生活していた理由はなんですか。下に挙げた理由の中から、あなたご自身の場合に当てはまるものを**いくつでも選んで**○をつけてください。

該当者 454 人中

6.6 1. 自分がその地域の出身だから

18.3 2. 自分がその地域の学校に通っていたから

57.1 3. 自分がその地域で働いていたから

0.7 4. 妻や夫がその地域の出身だから

0.7 5. 妻や夫がその地域の学校に通っていたから

11.2 6. 妻や夫がその地域で働いていたから

2.6 7. 両親の仕事などの都合

4.6 8. 子どもの通学、仕事などの都合

4.4 9. その他（具体的に：)

DKNA 2.6

- (3) その地域で生活していたときに、どのような働き方をしていましたか。

該当者 454 人中

18.1 1. その当時は働いていなかった

52.2 2. 正規の職員・従業員 13.7 3. パート、アルバイト 2.2 4. 派遣社員

8.6 5. 契約社員・委託 1.3 6. その他（具体的に：)

DKNA 4.0

問 14 その地域から、現在お住まいの地域に移ってきたことについてお聞きします。

- (1) 現在の地域に移ってきたのはいつごろですか。 西暦 () 年ごろ

該当者 454 人中 平均 20.9 年前 median 20 年前 min 0 年前 max 60 年前 DKNA 10.8

(2) 現在の地域に住むことになったのはなぜですか。 **あてはまる理由すべてに○をつけてください。**

該当者 454 人中

- 47.4 1. 実家に戻ったから
- 8.8 2. 実家に近いから
- 13.7 3. 配偶者の実家で同居するから
- 5.1 4. 配偶者の実家に近いから
- 20.5 5. 仕事場・通学先に近いから
- 7.9 6. 配偶者の仕事場・通学先に近いから
- 3.1 7. 買い物に便利だから
- 0.4 8. 娯楽施設があるから、趣味の活動に便利だから
- 2.4 9. 交通の便がよいから
- 6.4 10. 子どもの学区や通学の便を考えて
- 4.2 11. その他、子どものことを考えて
- 3.3 12. 友人や恋人がいた
- 0.4 13. 地域の活動や行事に参加していた、してみたかった
- 0.2 14. 地域の住民に魅力があった
- 7.7 15. 自然環境、居住環境に魅力があった
- 2.9 16. その他（具体的に： _____)

DKNA 2.4

- (3) 以前にいた県外の地域を離れて、青森県内に引っ越してくるようになった、直接のきっかけはなんでしたか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

該当者 454 人中

- 6.2 1. 家族が怪我や病気をした
- 5.3 2. 家族の介護が必要になった
- 3.1 3. 実家の家業に問題が発生した
- 12.1 4. 特に問題はないが、親に実家に戻るように言われた
- 7.5 5. 自分が結婚した
- 2.0 6. 子どもが産まれた
- 0.9 7. 子どもが小学校や中学校にあがった
- 0.7 8. 子どもが高校に進学した
- 2.6 9. 家を買った
- 9.9 10. 学校を卒業した
- 7.7 11. 今の地域、またはそこから通える範囲に就職した
- 19.6 12. 転勤や配置転換
- 8.6 13. 転職先が青森県内で見つかった
- 19.8 15. 仕事を自分から辞めた
- 5.1 16. 解雇された／契約が切れた
- 0.9 17. 友人や仲間に誘われた
- 0.9 18. 親戚に誘われた
- 0.4 19. その他の知人に誘われた
- 0 20. 移住支援事業など、自治体の働きかけがあって
- 4.6 21. その他（具体的に： _____)

DKNA 3.7

- (4) あなたが青森県内に引っ越してくることを可能にした条件はなんだったでしょうか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

該当者 454 人中

- 50.4 1. 実家に住むことが出来た
- 10.8 2. 実家以外に、住む家や土地があった
- 11.0 3. 家族から、生活について援助が受けられた
- 0.9 4. 親戚から、生活について援助が受けられた
- 0.4 5. 友人、知人、恋人から、生活について援助が受けられた
- 10.4 6. 引っ越すことについて、家族の理解があった
- 15.9 7. 勤務先に、支店や支部があった
- 13.2 8. 転職して、定職に就く見込みがあった
- 6.2 9. 定職に就けなくても、生活していける見込みがあった
- 0.7 10. 子どもが自立していた
- 3.1 11. 生活のコストが安かった
- 6.4 12. 自治体による移住支援があった
- 1.8 13. その他（具体的に：)

DKNA 6.4

- (5) 青森県内に引っ越してくるときに、離職や転職をしましたか。

該当者 454 人中

- 9.0 1. 離職し、転職先を決めてから引っ越してきた
- 17.4 2. 離職せず、転勤や配置転換で引っ越してきた
- 5.3 3. 離職し、家業や親戚、知り合いの仕事を手伝う約束をして引っ越してきた
- 36.3 4. 離職し、転職先が決まる前に引っ越してきた
- 22.5 5. 当時は、そもそも仕事に就いていなかった

DKNA 9.5

- (6) 青森県内に引っ越してくるときに、収入の変化はありましたか。

該当者 454 人中

- 3.7 1. かなり上がった
- 3.3 2. 少し上がった
- 22.5 3. ほとんど変わっていない
- 15.6 4. 少し下がった
- 38.1 5. かなり下がった

DKNA 16.7

(7) 県内に引っ越してくる以前から、青森県内で生活したいという望みはありましたか。

該当者 454 人中

- 44.3 1. いつかは青森で生活したいと望んでいた } →(8)と(9)にお答えください
15.2 2. すぐにでも青森で生活したいという望みがあった }
30.4 3. 青森で生活したいとは思っていなかった →(10)にお答えください

DKNA 10.1

(8) (望みがあった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

該当者 270 人中

- 27.8 1. 実家やお墓を継ぐため
8.5 2. 家業を継ぐため
27.8 3. 親の面倒を見たり、介護したりするため
45.2 4. 親の近くにいたほうが安心だから
8.2 5. 青森でやりたい仕事があった
1.1 6. 仕事以外に、青森でやりたい活動があった
2.2 7. 青森のほうが、仕事が見つかりやすかった
3.0 8. 青森のほうが、労働環境がよさそうだった
5.2 9. 地域に貢献したいという気持ちがあった
0.7 10. 青森に通いたい学校があった
17.4 11. 青森に友人や恋人がいた
27.4 12. 青森のほうが、生活環境がよさそうだった
14.8 13. 青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた
1.1 14. 今いる町自体に魅力があった (どのような：)
1.1 15. 自治体の移住支援が充実していた
7.0 16. 都会の生活が自分に合わなかった (どのように：)
4.4 17. その他 (具体的に：)

DKNA 1.1

(9) (望みがあった方に) どのくらい前から、青森県内での生活を考えていましたか。

西暦 () 年ころから

該当者 270 人中 平均 24.7 年前 median 25 年前 min 1 年前 max 55 年前 DKNA 21.1

(10) (望みがなかった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

該当者 138 人中

5.1 1. 実家やお墓を継ぎたくなかった

7.5 2. 家業を継ぎたくなかった

4.4 3. 親の面倒を見たり、介護したりするのが嫌だった

16.7 4. 親から離れていたかった

28.3 5. 青森にはやりたい仕事になかった

11.6 6. 仕事以外の、やりたいと思う活動が青森にはなかった

33.3 7. 青森には仕事になさそうだった

25.4 8. 青森のほうが、労働環境が悪そうだった

3.6 9. 以前にいた地域に貢献したいという気持ちがあった

3.6 10. 青森には通いたいと思える学校がなかった

8.7 11. 青森には友人や恋人がいなかった

37.7 12. 以前いた地域のほうが、生活環境がよかった

6.5 13. 以前いた地域のほうが、子どもを育てるのによかった

12.3 14. 以前いた町自体に魅力があった (どのような:)

12.3 15. その他 (具体的に:)

DKNA 1.5

ここからは、すべての方に携帯電話や SNS の利用についてお聞きします

問 15 携帯電話やスマートフォンについてお聞きします。

(1) あなたは携帯電話やスマートフォンを使っていますか。

89.9 1. 使っている 9.6 2. 使っていない

DKNA 0.5

(2) (使っている方のみ) 携帯電話やスマートホンの「アドレス帳」に登録されている番号とメールアドレスは、何人分くらいありますか。お店や会社などは除いて考えてください。

該当者 880 人中

87.2 1. () 人分くらい登録されている

該当者 854 人中 平均 64.9 人 median 40 人 min.1 人 max. 800 人

1.6 2. 一人も登録されていない

DKNA 11.1

問 16 SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の利用についてお聞きします。

(1) あなたがふだん利用している SNS は、以下のどれですか。利用している SNS すべてに○をつけてください

7.7 1. Twitter 12.2 2. Facebook 2.0 3. Mixi 31.3 4. LINE

2.7 5. Instagram 1.5 6. その他

55.5 7. 使っていない→(2)は飛ばして、問 17 にお進みください

DKNA 11.1

(2) SNS 上でのやりとりをするのは、ふだんから実際に顔を合わせる人たちと、ふだんは顔を合わせない人たちの、どちらが多いでしょうか。

該当者 352 人中

45.5 1. ふだんから実際に顔を合わせる人たちがほとんど

19.9 2. ふだんから実際に顔を合わせる人たちとのやりとりが多い

15.6 3. どちらも同じくらい

9.1 4. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりが多い

7.1 5. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりがほとんど

1.4 6. SNS は使っていない

DKNA 1.4

ここからは、あなたの人間関係についてお聞きします

問 17 次のような学校や機会を知りあった、今でも**仕事以外の理由で、月に一度は会ったり連絡したりする人**は、それぞれ何人くらいいますか。

	1. () 人 くらい 平均値のみ表示	2. いない	DKNA
a. 小学校時代やそれ以前に知りあった人	30.9 (3.1)	56.1	13.1
b. 中学校時代に知りあった人	31.4 (3.3)	55.4	13.3
c. 高校時代に知りあった人	36.8 (3.3)	49.6	13.7
d. 大学・短大・専門学校等で知りあった人	16.1 (5.1)	62.5	21.4
e. 今の仕事やアルバイトで知りあった人	34.8 (6.3)	48.5	16.7
f. 以前の仕事やアルバイトで知りあった人	32.1 (3.6)	52.1	15.8
g. インターネットやメールで知りあった人	2.8 (6.3)	77.1	20.1
h. 町や遊び場で知りあった人	8.8 (7.5)	71.7	19.5
i. 祭や青年団など地域の活動で知り合った人	11.2 (6.5)	69.3	19.5
j. ボランティア活動で知り合った人	6.6 (8.3)	74.0	19.4
k. その他、社会人になってから知り合った人	39.3 (9.2)	46.8	13.9

問 18 今お住まいの場所から 30 分以内に会える距離に、家族や親戚を含めて、次のような相手は何人くらいいますか。

	1. () 人 くらい 平均値のみ表示	2. いない	DKNA
a. 困ったときに相談に乗ってくれる人	81.6 (3.5)	14.5	3.9
b. 個人的な悩みを話せる人	73.0 (5.3)	21.0	5.9
c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人	65.4 (2.6)	27.0	7.7
d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人	40.9 (1.8)	50.9	8.3
e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人	31.2 (4.9)	59.6	9.3
f. 一緒に遊ぶ人	68.5 (4.4)	25.4	6.3
g. 必要なら就職の世話をしてくれる人	22.1 (2.8)	67.7	10.2
h. 必要なら就職活動についてアドバイスしてくれる人	31.9 (2.9)	58.0	10.1

問 19 では、会うのに 1 時間以上かかる距離には何人くらいいますか。

	1. () 人 くらい 平均値のみ表示	2. いない	DKNA
a. 困ったときに相談に乗ってくれる人	52.3 (3.1)	39.6	7.8
b. 個人的な悩みを話せる人	49.3 (2.5)	41.8	8.9
c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人	31.5 (2.5)	57.9	10.6
d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人	25.2 (1.9)	63.9	10.8
e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人	17.0 (4.4)	71.9	11.1
f. 一緒に遊ぶ人	40.6 (4.0)	49.2	10.2
g. 必要なら就職の世話をしてくれる人	12.9 (2.4)	75.3	11.9
h. 必要なら就職活動についてアドバイスしてくれる人	18.6 (2.8)	69.0	12.5

問 20 あなたは、次にあげる団体・組織に加入していますか。(1)～(10)のそれぞれについて、「1. 非加入」「2. 加入」「3. 加入して積極的に参加」のなかから1つずつ選んでください。

	1 非加入	2 加入	3 積極的に参加	DKNA
(1) 町内会・自治会	36.7	53.3	5.2	4.8
(2) PTA	71.3	14.2	3.2	11.3
(3) 氏子会	82.1	6.0	0.8	11.0
(4) 地域の子ども会	81.5	5.4	1.6	11.4
(5) 地域の婦人会	84.7	2.5	0.9	12.0
(6) 学童保育クラブ・幼児保育クラブ	83.9	3.8	0.8	11.5
(7) 宗教団体	83.9	4.3	1.4	10.4
(8) 商店会・同業組合・労働組合	79.3	9.4	1.2	10.1
(9) ボランティア組織・社会奉仕団体	79.2	7.7	3.1	10.0
(10) 趣味やスポーツのサークルや団体	68.7	15.2	6.7	9.2

問 21 先週一週間を振り返って、次のような活動に何日関わって、合計何時間を費やしましたか。仕事の時間は除いて考えてください。

平均値のみ表示

- a. 介護 (0.5) 日 (1.4) 時間くらい
 b. 自治会、PTA、町おこしなどの地域活動 (0.4) 日 (1.3) 時間くらい

最後に、あなたの物事についての考え方、感じ方についてお聞きします

問 22 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を選んで○をつけてください。

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	DKNA
0	0.8	2.9	5.6	5.2	22.6	8.6	18.9	18.6	6.6	7.9	2.4

問 23 あなたは、生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。

- 40.4 1. 満足している
 34.3 2. 不満だが、これ以上はあきらめている
 22.9 3. 不満なので、なんとか改善しようとしている

DKNA 2.5

問 24 青森県や、現在住んでいる地域について、次のように思いますか(○はそれぞれ1つずつ)。

	あては まる ↓ 1	ややあて はまる ↓ 2	あまり あては まらない ↓ 3	あては まらない ↓ 4	DKNA
a. 今の地域はとても暮らしやすい	23.5	50.0	18.7	5.9	1.9
b. 今の地域がとても好きだ	29.0	47.4	16.3	5.3	1.9
c. 今住んでいる地域は、工夫次第でもっと活気を出すことができると思う	30.1	39.0	19.4	8.6	2.9
d. ずっと今の地域にいられば良いと思う	32.0	39.9	16.0	9.9	2.2
e. 今住んでいる地域に貢献したい	21.4	43.9	22.6	9.2	3.0

問 25 あなたは、あなたご自身について、次のように思いますか。思ったとおりにお答えください(○はそれぞれ1つずつ)。

	あては まる ↓ 1	ややあて はまる ↓ 2	あまり あては まらない ↓ 3	あては まらない ↓ 4	DKNA
a. 将来を考えて不安になることが多い	36.2	39.8	16.3	5.8	1.8
b. 自分の健康に不安がある	26.2	42.9	21.8	8.0	1.2
c. 自分の将来が今より良いとは思えない	25.5	34.5	28.2	9.2	5.6
d. 親や親戚はわずらわしい	5.9	20.4	38.2	32.5	3.0

問 26 過去 1 ヶ月の間に、次のように感じたことがどれくらいありましたか (○はそれぞれ 1 つずつ)。

	あては まる ↓ 1	ややあ てはま る ↓ 2	あまり あては まらない ↓ 3	あては まらな い ↓ 4	まった くない ↓ 5	DKNA
a. 神経過敏に感じた	4.2	6.8	25.7	27.7	33.0	2.6
b. 絶望的だと感じた	1.2	3.5	13.7	20.9	58.3	2.4
c. そわそわ、落ち着かなか く感じた	1.3	3.8	15.7	27.3	49.1	2.8
d. 気分が沈み込んで、何 が起こっても気が晴 れないように感じた	1.9	4.2	16.9	28.8	45.6	2.7
e. 何をするのも骨折りだ と感じた	1.5	3.5	16.8	29.2	46.3	2.8
f. 自分は価値のない人間 だと感じた	2.3	3.3	12.3	23.6	56.3	2.4

長い間のご協力、本当にありがとうございました

回答者用質問紙

中南津軽地域住民の仕事と生活に関する調査

弘前大学地域未来創生センター

この調査は、弘前大学地域未来創生センターの調査・研究事業の一環として行うもので、中南津軽地域にお住まいの皆さまの働き方や現在の生活状況について調査し、今後の地域振興、特に若者の地域定着やUターンを推進する政策の提案を行うべく、基礎資料として利用するものです。この調査の結果や内容は統計的に処理し、地域全体としての傾向を把握することだけを目的として利用されますので、皆様のご回答が個々に分析されることは絶対にありません。

お忙しい中、誠に恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

ご記入に当たってのお願い

1. 2015年2月時点でお答え下さい。
2. 回答は、あなたご自身に当てはまる選択肢を選び、番号を○で囲んでいただく形式がほとんどです。設問によっては直接ご記入をいただいたり、具体的な内容を文章でご記入いただくところもあります。
3. ご記入済みのアンケート用紙は、同封しました返信用封筒に入れて、

2015年2月16日（月）までに

投函していただけますようお願いいたします。

4. 本調査についてご不明な点がございましたら、電話やメールにて下記にお問い合わせ下さい。

弘前大学地域未来創生センター

電話・ファクス : 0172-39-3198

E-mail : irrc@cc.hirosaki-u.ac.jp

お電話の受付は月曜日から金曜日の10時より17時までとなっております。

なにとぞご了承ください

○この調査に含まれている内容以外で、政府や行政、当センターへのご意見、ご要望がございましたら、このらんにお書きください。

まず、結果の整理に必要な、いくつかの点についてお聞きします

問1 あなたの性別を教えてください 1. 男 2. 女

問2 あなたの生年月をおうかがいします。 西暦 () 年 () 月

問3 あなたは、現在結婚していますか。
1. 結婚している 2. 離別・死別した 3. 結婚していない

問4 お子さんはいますか。
1. いない 2. いる → 一番下のお子さんは () 歳

問5 現在、あなたはどなたと同居していますか。一緒に暮らしている方**すべてに○をつけて**ください。**一人暮らしの方は、「12. 一人暮らし」に○をつけてください。**
1. 夫や妻 2. 自分の父 3. 自分の母 4. 舅 (夫や妻の父)
5. 姑 (夫や妻の母) 6. 兄弟姉妹 7. 息子 8. 娘
9. 祖父 10. 祖母
11. その他 (具体的に :)
12. 一人暮らし

問6 現在、住んでいる家の世帯主はどなたですか。
1. 自分 2. 夫や妻 3. 自分の父母 4. 舅・姑 (夫や妻の父母)
5. 兄弟姉妹 6. 息子・娘 7. 祖父母 8. 夫や妻の祖父母
9. その他 (具体的に :)

問7 実家まで帰るのに、どのくらい時間がかかりますか。
1. 今は実家で暮らしている
2. 30分未満 3. 30分～1時間未満 4. 1～2時間未満
5. 2～3時間未満 6. 3時間以上

問8 あなたは長男、または長女ですか。 1. はい 2. いいえ

問9 現在、お住まいの地域はどこですか。
1. 弘前市 2. 黒石市 3. 平川市 4. 西目屋村 5. 藤崎町
6. 大鱈町 7. 田舎館村 8. その他 (具体的に :)

問10 あなたが通った、または現在通っている学校についてお聞きします。

(1) あなたが卒業した中学校の所在地はどこですか。

1. 弘前市 2. 黒石市 3. 平川市 4. 西目屋村 5. 藤崎町
6. 大鰐町 7. 田舎館村 8. 青森市 9. 八戸市
10. それ以外の青森県内
11. 青森県外（都道府県名： ） 12. 国外
-

(2) あなたが最後に通った、または通っている学校は、次の中のどれにあたりますか。

1. 小学・中学校 2. 高校 3. 短大・高専
4. 大学・大学院 5. 専門学校
-

(3) その学校は、どこにありますか（ありましたか）。

1. 弘前市 2. 黒石市 3. 平川市 4. 西目屋村 5. 藤崎町
6. 大鰐町 7. 田舎館村 8. 青森市 9. 八戸市
10. それ以外の青森県内
11. 青森県外（都道府県名： ） 12. 国外
-

(4) その学校を卒業しましたか、それとも中途退学しましたか。

1. 卒業した 2. 中途退学した 3. 現在通っている
-

問11 現在の仕事についてお聞きします。

(1) 家業の手伝いも含めて、ふだん何か収入になる仕事をしていますか。

1. 仕事をしていない → (2)～(12)は飛ばして、**5ページの間12にお進みください**
2. 仕事をしている → **(2)～(12)にお答えください**
-

(2) 先週一週間で働いたのは何日で、労働時間は合計すると何時間ですか。

() 日働いて、労働時間は合計 () 時間くらい

(3) 通勤時間は、往復で何分くらいですか。

1. 自宅で仕事をしている
2. 通勤には往復で () 分くらいかかる
-

(4) 現在の仕事で得られる収入はどれくらいですか。月収と年収の両方を、税引き前の金額でお答えください。

月 () 万円くらいで、年 () 万円くらい

(5) 現在の仕事の勤務先（職場）はどの地域にありますか。

1. 弘前市 2. 黒石市 3. 平川市 4. 西目屋村 5. 藤崎町
6. 大鰐町 7. 田舎館村 8. 青森市 9. 八戸市
10. それ以外の青森県内
11. 青森県外（都道府県名：） 12. 国外

(6) 現在の仕事について、次のようなことに満足していますか、不満ですか。

	満足	まあ満足	どちらとも いけない	やや 不満	不満
	↓	↓	↓	↓	↓
a. 総合的に.....	1	2	3	4	5
b. 収入.....	1	2	3	4	5
c. やりがい.....	1	2	3	4	5
d. 労働時間.....	1	2	3	4	5
e. 福利厚生.....	1	2	3	4	5
f. 自宅と勤務地の距離.....	1	2	3	4	5
g. 仕事と私生活のバランス.....	1	2	3	4	5

(7) あなたの仕事は、次のどれに当たりますか。複数の仕事についている方は、**もっとも近い職種に○をつけてください。**

1. 管理職.....会社・官庁・団体の役員や管理職など
2. 専門・技術職.....専門的で高度な知識や技術が必要な仕事
法律家、医師・看護師、芸術、教育・保育職、研究・開発、
技術者・エンジニア、プログラマ、パイロットなど
3. 事務職.....会社・官庁・団体などの事務職
4. 販売職.....店員、販売員など、直接個人のお客と接する仕事
5. 営業職.....会社、営業所などとの交渉や販売に関わる仕事
6. サービス職.....ウェイトラー、調理、接客担当、美容師、介護など
7. 技能職.....整備士、大工、左官、配管工、技能工など
8. 保安職.....自衛官、警察官、消防士、警備員など
9. 製造・生産職.....工場勤務者、建設作業員
10. 農林水産関係.....農業、林業、水産業、食品加工
11. 運輸業.....タクシー、バス、トラックなどの運転手
12. その他の仕事（具体的に：）

(8) あなたのお仕事は、勤めでしょうか、自営でしょうか。

1. 家業の手伝い
2. 自営業または会社経営 } → **5ページの間12にお進みください**
3. 雇われている → **(9)にお進みください**

(9) 勤め先での立場を教えてください。

- | | |
|--------------|---------------------|
| 1. 正規の職員・従業員 | 2. 会社役員 |
| 3. パート、アルバイト | 4. 派遣社員 |
| 5. 契約社員・委託 | 6. その他（具体的に： _____） |

(10) 勤め先の企業全体の従業者数を教えてください。

1. 1～4名 2. 5～29名 3. 30～99名 4. 99～299名 5. 300名以上

(11) 今の職場に勤め始めてどれくらいになりますか。

（ ）年と（ ）ヶ月くらい

(12) 今の仕事をどうやって見つけましたか（○はいくつでも）。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. 新聞・雑誌・チラシの求人広告 | 2. ネットの求人情報 |
| 3. ハローワーク、ジョブカフェなど | 4. 民間の職業紹介所 |
| 5. 合同会社説明会のようなイベントで | 6. 学校の紹介 |
| 7. 両親の紹介 | 8. 両親以外の家族、親戚の紹介 |
| 9. 親しい友人の紹介 | 10. あまり親しくない知りあいの紹介 |
| 11. 前の職場でできた知りあいの紹介 | |
| 12. その他（具体的に： _____） | |

ここからは、すべての方に生活経験のある地域についてお聞きします

問 12 青森県外で生活した経験はありますか。

- | | | |
|------------|-------------------------|-------------------------|
| 1. ない | } → 9 ページの問 15 にお進みください | |
| 2. 一回だけある | | |
| 3. 二回ある | | } → 問 13 と問 14 にお答えください |
| 4. 三回以上ある | | |
| →（ ）回 | | |

問 13 県外での生活経験についてお聞きします。

(1) そのとき住んでいた地域はどこですか。二回以上経験がある方は、もっとも最近生活していた地域についてお答えください。

1. 国内 （ ）都道府県 （ ）市区町村
2. 国外

(2) その県外の地域で生活していた理由はなんですか。下に挙げた理由の中から、あなたご自身の場合に当てはまるものを**いくつでも選んで**○をつけてください。

1. 自分がその地域の出身だから
2. 自分がその地域の学校に通っていたから
3. 自分がその地域で働いていたから
4. 妻や夫がその地域の出身だから
5. 妻や夫がその地域の学校に通っていたから
6. 妻や夫がその地域で働いていたから
7. 両親の仕事などの都合
8. 子どもの通学、仕事などの都合
9. その他（具体的に： _____）

(3) その地域で生活していたときに、どのような働き方をしていましたか。

1. その当時は働いていなかった
2. 正規の職員・従業員
3. パート、アルバイト
4. 派遣社員
5. 契約社員・委託
6. その他（具体的に： _____）

問 14 その地域から、現在お住まいの地域に移ってきたときのことについてお聞きします。

(1) 現在の地域に移ってきたのはいつごろですか。 _____ 西暦（ _____ ）年ごろ

(2) 現在の地域に住むことになったのはなぜですか。**あてはまる理由すべてに**○をつけてください。

1. 実家に戻ったから
2. 実家に近いから
3. 配偶者の実家で同居するから
4. 配偶者の実家に近いから
5. 仕事場・通学先に近いから
6. 配偶者の仕事場・通学先に近いから
7. 買い物に便利だから
8. 娯楽施設があるから、趣味の活動に便利だから
9. 交通の便がよいから
10. 子どもの学区や通学の便を考えて
11. その他、子どものことを考えて
12. 友人や恋人がいた
13. 地域の活動や行事に参加していた、してみたかった
14. 地域の住民に魅力があった
15. 自然環境、居住環境に魅力があった
16. その他（具体的に： _____）

(3) 以前にいた県外の地域を離れて、青森県内に引っ越してくるようになった、直接のきっかけはなんでしたか。 **あてはまる理由すべてに○をつけてください。**

1. 家族が怪我や病気をした
2. 家族の介護が必要になった
3. 実家の家業に問題が発生した
4. 特に問題はないが、親に実家に戻るように言われた
5. 自分が結婚した
6. 子どもが産まれた
7. 子どもが小学校や中学校にあがった
8. 子どもが高校に進学した
9. 家を買った
10. 学校を卒業した
11. 今の地域、またはそこから通える範囲に就職した
12. 転勤や配置転換
13. 転職先が青森県内で見つかった
14. 自分が怪我や病気をした
15. 仕事を自分から辞めた
16. 解雇された／契約が切れた
17. 友人や仲間に誘われた
18. 親戚に誘われた
19. その他の知人に誘われた
20. 移住支援事業など、自治体の働きかけがあつて
21. その他（具体的に： _____)

(4) あなたが青森県内に引っ越してくることを可能にした条件はなんだったでしょうか。 **あてはまるものすべてに○をつけてください。**

1. 実家に住むことが出来た
2. 実家以外に、住む家や土地があった
3. 家族から、生活について援助が受けられた
4. 親戚から、生活について援助が受けられた
5. 友人、知人、恋人から、生活について援助が受けられた
- 6.引っ越すことについて、家族の理解があった
7. 勤務先に、支店や支部があった
8. 転職して、定職に就く見込みがあった
9. 定職に就けなくても、生活していける見込みがあった
10. 子どもが自立していた
11. 生活のコストが安かった
12. 自治体による移住支援があった
13. その他（具体的に： _____)

(5) 青森県内に引っ越してくるときに、離職や転職をしましたか。

1. 離職し、転職先を決めてから引っ越してきた
2. 離職せず、転勤や配置転換で引っ越してきた
3. 離職し、家業や親戚、知り合いの仕事を手伝う約束をして引っ越してきた
4. 離職し、転職先が決まる前に引っ越してきた
5. 当時は、そもそも仕事に就いていなかった

(6) 青森県内に引っ越してくるときに、収入の変化はありましたか。

1. かなり上がった
2. 少し上がった
3. ほとんど変わっていない
4. 少し下がった
5. かなり下がった

(7) 県内に引っ越してくる以前から、青森県内で生活したいという望みはありましたか。

1. いつかは青森で生活したいと望んでいた
 2. すぐにでも青森で生活したいという望みがあった
 3. 青森で生活したいとは思っていなかった
- (8)と(9)にお答えください
→(10)にお答えください

(8) (望みがあった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

1. 実家やお墓を継ぐため
2. 家業を継ぐため
3. 親の面倒を見たり、介護したりするため
4. 親の近くにいたほうが安心だから
5. 青森でやりたい仕事があった
6. 仕事以外に、青森でやりたい活動があった
7. 青森のほうが、仕事が見つかりやすかった
8. 青森のほうが、労働環境がよさそうだった
9. 地域に貢献したいという気持ちがあった
10. 青森に通いたい学校があった
11. 青森に友人や恋人がいた
12. 青森のほうが、生活環境がよさそうだった
13. 青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた
14. 今いる町自体に魅力があった (どのような：)
15. 自治体の移住支援が充実していた
16. 都会の生活が自分に合わなかった (どのように：)
17. その他 (具体的に：)

(9) (望みがあった方に) どのくらい前から、青森県内での生活を考えていましたか。

西暦 () 年ころから

(10) (望みがなかった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

1. 実家やお墓を継ぎたくなかった
2. 家業を継ぎたくなかった
3. 親の面倒を見たり、介護したりするのが嫌だった
4. 親から離れていたかった
5. 青森にはやりたい仕事が多くなかった
6. 仕事以外の、やりたいと思う活動が青森には多くなかった
7. 青森には仕事が多そうだった
8. 青森のほうが、労働環境が悪そうだった
9. 以前にいた地域に貢献したいという気持ちがあった
10. 青森には通いたいと思える学校が多くなかった
11. 青森には友人や恋人が多くなかった
12. 以前いた地域のほうが、生活環境が多かった
13. 以前いた地域のほうが、子どもを育てるのに多かった
14. 以前いた町自体に魅力が多かった (どのような:)
15. その他 (具体的に:)

ここからは、すべての方に携帯電話や SNS の利用についてお聞きします

問 15 携帯電話やスマートフォンについてお聞きします。

(1) あなたは携帯電話やスマートフォンを使っていますか。

1. 使っている 2. 使っていない

(2) (使っている方のみ) 携帯電話やスマートフォンの「アドレス帳」に登録されている番号とメールアドレスは、何人分くらいありますか。お店や会社などは除いて考えてください。

1. () 人分くらい登録されている
2. 一人も登録されていない

問 16 SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の利用についてお聞きします。

(1) あなたがふだん利用している SNS は、以下のどれですか。利用している SNS すべてに○をつけてください

1. Twitter 2. Facebook 3. Mixi 4. LINE
5. Instagram 6. その他
7. 使っていない→(2)は飛ばして、問 17 にお進みください

(2) SNS 上でのやりとりをするのは、ふだんから実際に顔を合わせる人たちと、ふだんは顔を合わせない人たちの、どちらが多いでしょうか。

1. ふだんから実際に顔を合わせる人たちがほとんど
2. ふだんから実際に顔を合わせる人たちとのやりとりが多い
3. どちらも同じくらい
4. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりが多い
5. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりがほとんど
6. SNS は使っていない

ここからは、あなたの人間関係についてお聞きします

問 17 次のような学校や機会で知りあった、今でも**仕事以外の理由で、月に一度は会ったり連絡したりする人**は、それぞれ何人くらいいますか。

- | | | |
|-----------------------------|-----------------|--------|
| a. 小学校時代やそれ以前に知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| b. 中学校時代に知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| c. 高校時代に知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| d. 大学・短大・専門学校等で知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| e. 今の仕事やアルバイトで知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| f. 以前の仕事やアルバイトで知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| g. インターネットやメールで知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| h. 町や遊び場で知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| i. 祭や青年団など地域の活動で知り合った人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| j. ボランティア活動で知り合った人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| k. その他、社会人になってから知り合った人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |

問 18 今お住まいの場所から 30 分以内に会える距離に、家族や親戚を含めて、次のような相手は何人くらいいますか。

- | | | |
|---------------------------------|-----------------|--------|
| a. 困ったときに相談に乗ってくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| b. 個人的な悩みを話せる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| f. 一緒に遊ぶ人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| g. 必要なら就職の世話をしてくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| h. 必要なら就職活動についてアドバイスしてくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |

問 19 では、会うのに1時間以上かかる距離には何人くらいいますか。

- a. 困ったときに相談に乗ってくれる人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- b. 個人的な悩みを話せる人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人…… 1. () 人くらい 2. いない
- d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人… 1. () 人くらい 2. いない
- e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人…… 1. () 人くらい 2. いない
- f. 一緒に遊ぶ人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- g. 必要なら就職の世話をしてくれる人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- h. 必要なら就職活動についてアドバイスして
くれる人…………… 1. () 人くらい 2. いない

問 20 あなたは、次にあげる団体・組織に加入していますか。(1)～(10)のそれぞれについて、「1. 非加入」「2. 加入」「3. 加入して積極的に参加」のなかから1つずつ選んでください。

	1 非加入	2 加入	3 積極的に参加
(1) 町内会・自治会	1	2	3
(2) PTA	1	2	3
(3) 氏子会	1	2	3
(4) 地域の子ども会	1	2	3
(5) 地域の婦人会	1	2	3
(6) 学童保育クラブ・幼児保育クラブ	1	2	3
(7) 宗教団体	1	2	3
(8) 商店会・同業組合・労働組合	1	2	3
(9) ボランティア組織・社会奉仕団体	1	2	3
(10) 趣味やスポーツのサークルや団体	1	2	3

問 21 先週一週間を振り返って、次のような活動に何日関わって、合計何時間を費やしましたか。仕事の時間は除いて考えてください。

- a. 介護 () 日 () 時間くらい
- b. 自治会、PTA、町おこしなどの地域活動 () 日 () 時間くらい

最後に、あなたの物事についての考え方、感じ方についてお聞きします

問 22 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を選んで○をつけてください。

0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10

問 23 あなたは、生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。

1. 満足している
2. 不満だが、これ以上はあきらめている
3. 不満なので、なんとか改善しようとしている

問 24 青森県や、現在住んでいる地域について、次のように思いますか（○はそれぞれ1つずつ）。

- | | あては
まる | やや
あては
まる | あまり
あては
まらない | あては
まらない |
|--|-----------|-----------------|--------------------|-------------|
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| a. 今の地域はとても暮らしやすい…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b. 今の地域がとても好きだ…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c. 今住んでいる地域は、工夫次第でもっと活気を
出すことができると思う…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d. ずっと今の地域にいられば良いと思う…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| e. 今住んでいる地域に貢献したい…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 25 あなたは、あなたご自身について、次のように思いますか。思ったとおりにお答えください（○はそれぞれ1つずつ）。

- | | あては
まる | やや
あては
まる | あまり
あては
まらない | あては
まらない |
|---------------------------|-----------|-----------------|--------------------|-------------|
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| a. 将来を考えて不安になることが多い…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b. 自分の健康に不安がある…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c. 自分の将来が今より良いとは思えない…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d. 親や親戚はわずらわしい…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 26 過去1ヶ月の間に、次のように感じたことがどれくらいありましたか（○はそれぞれ1つずつ）。

- | | いつも | たい
てい | とき
どき | 少し
だけ | まったく
ない |
|---|-----|----------|----------|----------|------------|
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| a. 神経過敏に感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| b. 絶望的だと感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| c. そわそわ、落ち着かなく感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| d. 気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れ
ないように感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| e. 何をするのも骨折りだと感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| f. 自分は価値のない人間だと感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

長い間のご協力、本当にありがとうございました

執筆担当者

氏名	所属	担当章
李 永 俊	弘前大学	第1章
	人文学部 教授・地域未来創生センター長	第2章
		第3章
		第4章
杉 浦 裕 晃	愛知大学	第2章
	経済学部 教授	第3章 第4章
石 黒 格	日本女子大学	第5章
	人間社会学部 准教授	
山 口 恵 子	東京学芸大学	第6章
	教育学部 准教授	
李 秀 眞	弘前大学	第7章
	教育学部 准教授	
飯 田 清 子	弘前大学大学院	集計表
	地域社会研究科 博士後期課程	

中南津軽地域住民の 仕事と生活に関する調査報告書

2015年6月

編集・発行

弘前大学地域未来創生センター

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

電話 0172 - 39 - 3198

Email : irrc@hirosaki-u.ac.jp

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/>